

東洋建築史学の成立に見るアカデミーとナショナリズム

—— 関野貞と中国建築史研究 ——

徐 蘇 斌

序

関野貞^{せいのただし}（一八六八—一九三五）は日本近代を代表する著名な東洋建築史家である。関野は日本をはじめ、朝鮮・中国の研究を精力的に行っているが、その研究領域は建築史・美術史・考古学に及んでいる。彼の足跡はそのまま近代日本の東洋研究の縮影であると言っても過言ではない。

日本では戦後、井上晴丸・宇佐美誠次郎の『国家独占資本主義論』（一九五〇年）を先駆として、植民地の問題は重要な研究課題となった。九〇年代以後、植民地の問題について、従来の政治、経済史を重視する傾向から抜けだし、ナショナリズム、植民地、帝国主義、ポスト・コロニアリズムなどに目を向けて、これまで手薄だった教育、社会福祉など政策史、各層のアジア認識や植民地経験、植

民地体制下の社会変容を問い直す研究が活発になった¹⁾。

植民地時代の建築・都市史に関する研究はまだ多くない。その中、第一時期は、一九六〇年代末から一九七〇年代であり、紹介的な研究である。代表作に村田治郎の「東洋建築史研究の課題」（『建築雑誌』第八十四巻、第一号、一九六九年一月）と西川幸治の「東洋建築史研究の展開」（『近代日本建築学発達史』第十編、第八章、丸善、一九七二年）がある。

第二時期は、一九八〇年代末から現在に至る研究である。例えば、植民地都市と建築に関する研究では、村松伸、西澤泰彦編『東アジアの近代建築』（一九八五年）、越沢明の『大連の都市計画史 一八九八—一九四五年』（一九八四年）、『ハルビン^{ハルビン}の都市発達史（一八九六—一九四五年）』（一九八七年）、西澤泰彦の『海を渡った日本人建築家二〇世紀前半の中国東北地方における建築活動』（一九九六年）、『図説

「満洲」都市物語 ハルビン・大連・瀋陽・長春』（一九九六年）などがある。

東洋建築史学史の研究も見られる。

・伊東忠太著、村松伸解説『清国 伊東忠太見聞野帖』（柏書房、一九九〇年十二月）、「忠太の大冒険」（『東方』、第一五三—一六三巻、一九九四年—十二月）

・泉田英雄「J.ファアガソン登場以前東洋建築史学史研究」（『日本建築学会大会講演梗概集』一九九三年）

・青井哲人、韓三健など「東洋建築史の最初期の言及に関する考察」（『日本建築学会大会講演梗概集』一九九三年）

・読売新聞社編『建築巨人 伊東忠太』（読売新聞社、一九九三年）

・「アジアの夢幻」（『建築思潮』十九、一九九五年三月）

・田中禎彦、青井哲人「満洲建築史研究概況と歴史特徴」（『日本建築学会近畿支部研究報告集』三十七、計画系、一九九七年九月）、

「満洲、熱河古跡の概況とその特徴の評価」（『日本建築学会大会講演梗概集』一九九七年九月）、「日本植民地における歴史的建造物の調査・保存事業について」（『第二回アジアの建築交流国際シンポジウム論文集』日本建築学会、一九九八年九月）

東洋建築史学史についての研究、特に伊東忠太（いとうちゆうた）（一八六七—一九五四）に関する研究は進んでいることが見てとれる。だが国民国家、ナショナル・アイデンティティー、植民地、帝国主義などの問題の

深い検討と共に、日本の東洋建築史研究についても、さらに深く研究が進められようと論者は考えている。

東京大学博物館の創立と共に、東洋史研究の先駆者たちについての研究が新たな契機を迎え、「関野貞の東洋史研究」の研究も始まった。

・稲垣栄三「中国・朝鮮における建築遺跡の研究—関野貞と建築史学—」（『総合研究資料展示解説 文化史・自然史の研究紹介』東京大学総合研究資料館、一九八三年）

・稲垣栄三「関野貞一八六七—一九三五」（第十七回展示 先駆者の業績）東京大学総合研究資料館、一九八〇年）

しかし、現在までの関野貞に関する研究をみると、以下のように韓国調査に集中していることが分る。

・早乙女雅博「三国時代江原道の古墳と土器—関野貞資料土器とその歴史的意義—」（『東京大学文学部朝鮮文化研究室研究紀要 朝鮮文化研究』四、一九九七年三月）、「関野貞の朝鮮古跡調査」（『精神のエクスペディション』東京大学出版会、一九九七年十月）

・早乙女雅博、藤井恵介「朝鮮建築・考古資料集成（1）—東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵品（1）—」（『朝鮮文化研究』七、二〇〇〇年三月、一一六—一六六頁）

・Hyung Il Pai, *Constructing "Korean Origins,"* Harvard University Asia Center, 2000

表1 関野貞の中国建築調査表

回数	調査期間
第一回目	明治三十九年（一九〇六）九月十日－四〇年二月十日
第二回目	明治四十年（一九〇七）九月十八日－四一年一月
第三回目	大正二年（一九一三）十月（十一日）
第四回目	大正七年（一九一八）一月十四日－十日
第五回目	昭和五年（一九三〇）三月三十一日
第六回目	昭和六年（一九三一）
第七回目	昭和七年（一九三二）
第八回目	昭和八年（一九三三）
第九回目	昭和九年九月（一九三四）
第十回目	昭和十年（一九三五）

本稿では、関野の中国調査を記した「関野調査帖」（以下、「調査帖」と記す）を中心に、関野貞の中国調査の全容の復原作業を行い、さらに、彼の問題意識、方法論、調査内容及び中国社会との関連などを明らかにする。

・「特集 関野貞と朝鮮古跡調査」（『考古学史研究』第九号、二〇〇一年五月）

植民地史学研究の進展と共に、関野貞の研究は日本国内外の歴史学者、建築史学者、考古学者によって再評価され始めている。

これに対して、中国と関野のかかわりに関する研究はほとんど空白のままと言える。関野の中国研究を明らかにしなければ、東洋建築史研究の全貌は見えてこない。また、日本の建築史研究と中国建築史学の近代化との関係なども解明できない、と論者は考えている。

らかにすることを目的とする。

関野貞の中国に関する「調査帖」は、調査した時点で、東京大学生産技術研究所藤森研究室に所蔵されていた。当該調査帖は六百余枚の調査帖からなる。調査帖は十六×十一・八センチ格紙で、図や文字が書き込めるように工夫されており、右上に調査地名を記入、左上に調査対象の年代、左下に調査年月日が記入されており、ペンと鉛筆で関係資料、図面が描かれている。現存する調査帖は第四回の大正七年以後のもので、第一回から第三回までの調査帖の形が不明である。第三回（大正二年）の輯安（現在中国遼寧省集安）と朝鮮の調査帖は朝鮮で焼失している。

この調査帖及び関係資料により関野の中国調査は、表1に示したように十回にわたり行われたことが知られる。

関野の調査のうち、明治三十九年（一九〇六）－昭和五年（一九三〇）の調査は、個人的な調査段階で、研究の重点は様式、陵墓、悉皆調査にある。また朝鮮では悉皆調査と発掘調査も同時に行われた。昭和五年－同七年には組織的な中国研究が始まり、東方文化学院の研究員として中国の陵墓調査を完遂させた。昭和七年－同十年には、研究の重点は満洲へと移され、遼（九〇七―一二二五）・金（一一一五―一二三四）建築、熱河の研究をしている。

調査帖及び関係資料から関野貞の研究は、以下のような内容に纏められる。

一 ナショナルな立場―中国研究の原点…「平城京および大内裏考」

二 美術からのアプローチ―河南、山東の彫刻の考察

三 植民地の「場」的な誘惑―広開土王碑発見以後における輯安高句麗遺跡の調査

四 保存問題から見た関野貞のナショナル・アイデンティティ―

―一九一八年の悉皆調査

五 焼失した中国陵墓研究の復原

六 究極的な建築様式の視点―中国の最も古い木造建築の追跡

七 中国建築史学研究の「近代化」問題―一九三一年の日中交流を巡って

八 満洲建築の「独自性説」―遼金建築調査

九 幻の熱河保存事業

十 ナショナルリズムの循環―大陸建築の影響の考証から日本建築の進化思想まで

以下この分類に従い、順に考察をすすめたい。

一 ナショナルな立場

―中国研究の原点…「平城京および大内裏考」

日本人として、関野貞はなぜ中国建築を研究したのか。これがまず解明すべき問題である。

明治維新以後、日本は国民国家としての体制を整え、ナショナル・アイデンティティに関する思考が成立した。十九世紀一八九〇年代初頭に、「脱亜入欧」の近代化路線と一致して、日本人論の季節が訪れた。三宅雪嶺の『真善美日本人』（一八九一年）と『偽悪醜日本人』（一八九一年）などをはじめとして、日本人についての認識の検討がブームになった。人類学、考古学、美術、建築史などの分野で「欧化」と対照して、日本民族自身に関する研究が着手された。日本建築史研究では、伊東忠太の博士論文『法隆寺建築論』（一八九三年）が、比較的早いものと言われている。

関野貞の研究はその時代から始まった。関野は明治二十八年（一八九五）七月十日、東京帝国大学工科大学造家科を卒業した。卒業後、恩師辰野金吾の関係した日本銀行本店の付帯工事の設計に従事した。ついで塚本靖が日光廟修理調査に専念するため、関野は東京美術学校で建築講義を代講することになった。

その当時、神仏分離と廃仏毀釈によって、多くの社寺の文化財の破壊の跡はそのままになっていた。美術、建築研究者たちは伝統建築の価値を認識した上で保存の問題に直面した。二十九年（一八九六）四月二十日には古社寺保存会が設置された。内閣が保存会委員を任命し、委員長は九鬼隆一（一八五二―一九三二）、委員には岡倉天心（一八六二―一九二三）、山高信離、小杉樞邸、山名貫義、黒川真頼、伊東忠太などが並んだ。これは日本の最初の建築保存組織で

あるが、これにより、宝物についての取り調べや重要建造物の修理が行われるようになった。

翌年六月五日、古社寺保存法が制定され、社寺所有の建造物及び美術工芸品のうち歴史上、美術上優れたものをそれぞれ特別建造物或いは国宝に指定し、国が保存の責任を担うという画期的な制度が確立した。関野はこの年、保存会の委員となつて、保存の第一線へ赴いた。

関野は明治三十年奈良に赴任する。間もなく調査が始まった。半年後には、約八十件の建築を建築史的価値・芸術的価値から五等級にわけ、また破損度も五等級に分類して表示した。³⁾ 関野の調査に基づいて、一八九七年に十八件、一八九八年に十四件、一八九九年に九件、一九〇〇年には八件の建築が特別建造物として指定された。ちなみに、この調査方法は後に朝鮮、満洲でも使われることになる。

フィールドワークの経験を生かして、関野は鳳凰堂、法隆寺、薬師寺、東大寺など日本建築、美術に関する論文を書いた。しかし、日本の建築文化を強調するために、参考にする「他者」を必要とした。その「他者」はもちろん欧米ではなく、アジアの国である。

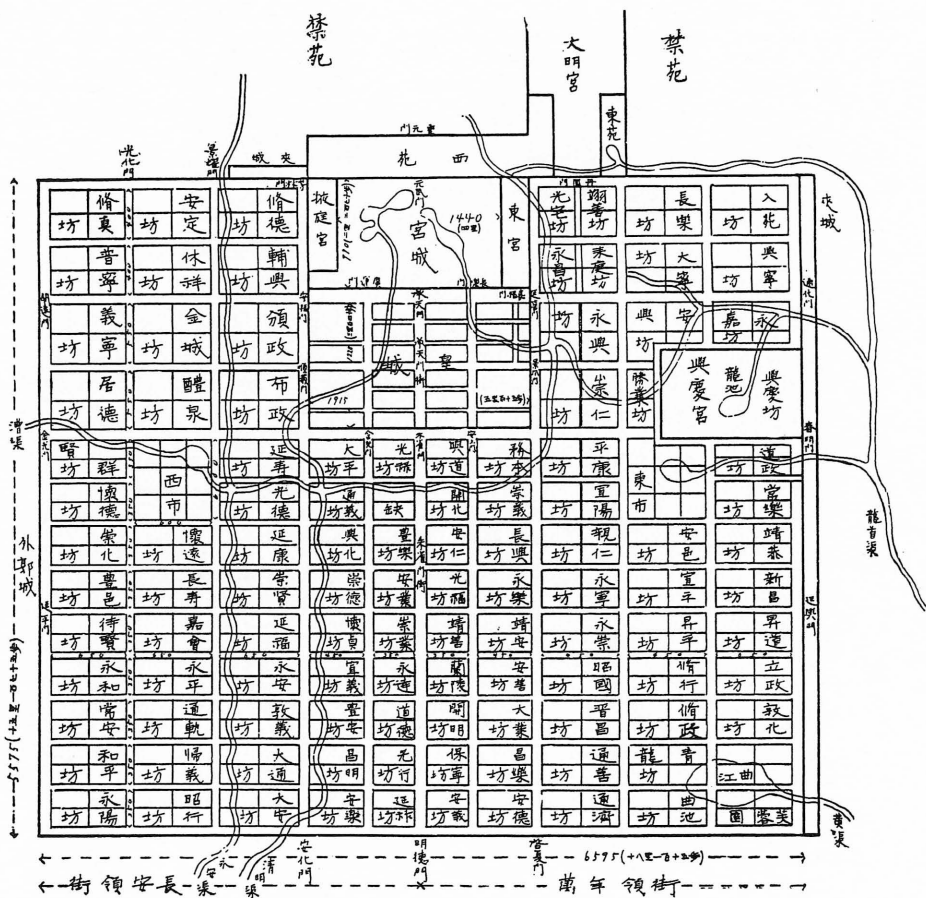
中国と深く関わっている論文として、「平城京及大内裏考」⁴⁾が知られる。『長安志図』、『唐兩京城坊考』、『西安府志』、『唐六典』等を参考にして、寸法、比率に基づいて長安唐京城の平面を作図した。実測図ではないが、従来の中国文献の手描き図より精確である(図

1)。それは、京城から皇城、宮城、大明宮に至る都市と宮殿制度を研究し、さらに日本の平城京と比較したもので、関野が書いた文章により、その要点をまとめると、以下のようになる。

- 一、唐の京城は長方形である。東西に長く、南北に短い。日本はこれに反する。日本では城壁がない。
- 二、皇城と宮城は中央北部にあり、南面する点は、日本も同じ。しかし、日本では宮城、皇城の別を設けていない。
- 三、大小路及び坊の区画制度は日本が整然として碁坪のごとく、中国は多少整齊を欠く。
- 四、坊のごときも一々固有名詞を有し、日本のごとく便宜なる計算の方法あることなし。⁵⁾

さらに、日本の朝堂・内裏と比較して、関野の考えを要約すれば、次の点が指摘できる。

- 一、中国は皇城、宮城を分けた。日本では宮城に両者を含めている。
- 二、中国の宮城、大明宮は、ともに朝堂と内裏とを前後に接続するが、日本では両者は全く隔離されている。
- 三、中国の正殿を宮城においては大極殿といい、日本も同じで



注意 広表を示せる数字は歩を以て単位とす。

図1 関野が描いた長安唐京城の平面（『平城京および大内裏考』より）

この比較研究は文献史料を中心にしただけであるが、日本における中国都市の研究の最初のものと考えられる。中国の都市問題を研究しないと、日本の

- 五、中国の内裏は直に内朝の後にあるが、日本は内裏は別に一区域をなし、内外両郭をめぐらせている。中国で内裏の正殿は宮城にては甘露殿といい、大明宮にては紫宸殿という。日本では大安殿と称せられた。平安宮にては紫宸殿と改称した。
 - 四、宮城、大明宮には内朝すなわち天子が朝事を見るところの宣政殿、兩儀殿があるが、日本にはない。国情の相違により日本ではこれが必要としない。
- ある。しかし、日本の東西朝集殿に相当するもの、南庭の十二堂、百官待朝の場所、参列のための堂宇は中国にはない。大礼の時、群臣はただ庭中程に立つ。大極殿の後ろに、日本では後殿があるが、中国にはない。この問題は隋、唐だけではなく、以後歴代も同じである。

問題を解明できないことが一目瞭然であろう。後に、関野は日本の研究のため、中国を研究したと明言している。

支那は既に三代周漢時代に高度の文化を有し、六朝時代に至り仏教芸術が印度西域地方から輸入せらるるに及び、益複雑となってきました。そしてその発達した文化を朝鮮や日本に更に輸出して、其の国々の文化淵源をなしたのであります。故に東洋文化発達変遷を知らんと欲すれば、是非共支那研究から始めねばならないのであります。又日本や朝鮮の事を研究するにしても、やはり支那を研究しなくては充分な研究は出来ないのであります。

しかし、単純に中国の文化の優秀性を強調することが関野の目的ではなかった。関野の結論として日本の平城京は中国長安を参考に築かれたものだが、

決して甘じて彼の制度を踏襲することをなさず 大小路の如き便宜之を計画し 始めて条坊の制を設け 以て世界に於て最も進歩せる理想的都市の典型を作り 遥かに彼を凌駕せしは一つは以て当時文化の性質を示し 一つは以て我國民の創造的天才を見せし者と謂ふべし⁸⁾

さらに、

我平城京の宮城及朝堂内裏の制度は 大体に於て隋唐の者を参酌したけれども 決して彼を踏襲せず 利便の宜しきに随て之を企画し 別に新生面を開きて 朝堂の經營の如き其整備却て遥かに彼を凌駕するに至れり 当時國民的文化の成熟して其進歩充分高度に達したるにあらずんば 焉ぞ此の如きを得んや⁹⁾

日本人が中国文化を「師匠」として受け入れたことは、研究者として関野には否定できない事実であるが、その後、日本建築が如何に中国建築との違いを見せたかを強調し、日本建築のアイデンティティーを位置付けることにより、日本文化を強調する考え方が明確である。関野がこの論文を書いたのは、日本が日清戦争・日露戦争に勝利した時期である。日本の優れた点を強調することにより、当時の国威発揚にも与かった。この点について、関野は伊東忠太などの研究者と同様の価値観を有している。「日本の研究のため」という目的はその後に至るまで一貫して関野貞の中国調査を支える柱となる。

二 美術からのアプローチ——河南、山東の彫刻の考察

(一) 岡倉天心の道を辿る——一九〇六年龍門石窟彫刻考察

関野貞の最初の中国調査は、明治三十九年（一九〇六）九月十日から翌四十年二月十日にかけて行われた。目的地は河南、陝西である。なぜ河南、陝西なのか。考えられる理由として、その一、河南の龍門は岡倉天心が一八九三年に調査したところで、中国美術の研究にとって注目される地域である。その二、中国の多くの陵墓は、西安付近に集中しており、陵墓の調査で一九〇二年にすでに韓国に赴いていた関野は、中国との比較研究を進めたかったのではないか。その三、平城京を研究したとき、長安（西安）と比較したので、現地に行くことが望まれているからであろう。以上三つの点から河南、西安調査は彼にとって重要であったことが想定できる。

当時は日露戦争が終結し、日本は朝鮮を保護国として、大連では「南滿洲鉄道株式会社」が創設されていた。また中国では義和団運動以後、社会が大きく変容し、清王朝は最後の時期を迎えていた。一方で、明治末期には多くの日本人が中国へ渡り、徳富猪一郎の『七十八日遊記』や、高等師範学校修学旅行を綴った『遼東修学旅行記』など、様々な旅行記が著されていた。¹⁰このようなツーリズムの波に乗って関野は中国へ出発した。

明治三十九年（一九〇六）、関野は東京帝国大学教授の塚本靖^{つかもやすし}、

東京帝室博物館嘱託の平子尚^{ひさし}と同行した。この調査に先立ち、明治三十年代より、日本国内では法隆寺の再建と非再建に関する歴史的な論争が始まっていた。関野、平子尚、塚本靖は「非再建論」の中心的な人物である。特に関野は様式論と尺度論から、また平子尚は資料文献から非再建を論じた。¹¹三人が行をとにしたのも故無きことではあるまい。三人とも初めての中国調査であり、岡倉天心、伊東忠太らがかつて旅した経路に沿って進められた。

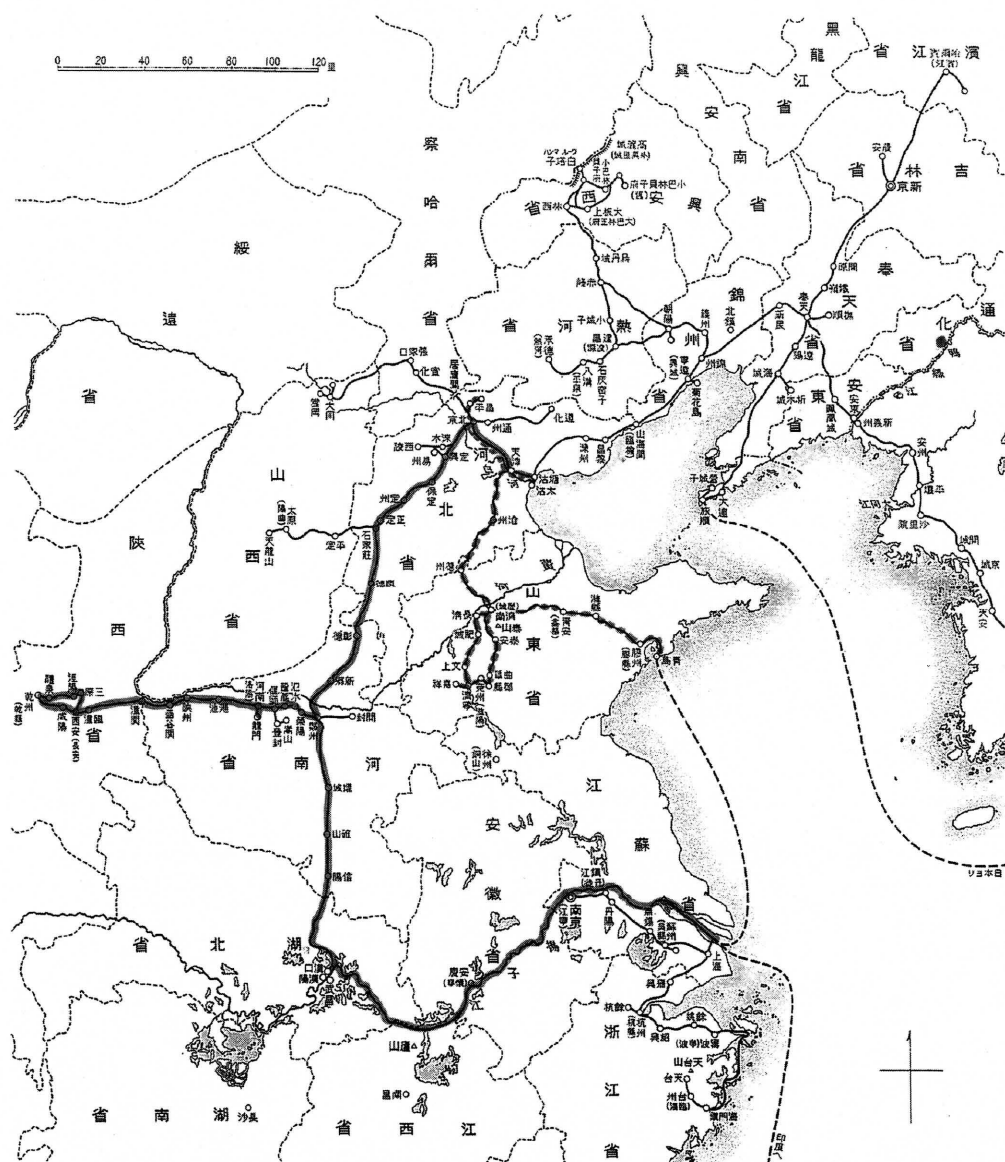
この調査は前後五カ月を要した。この調査については調査帖が現存しないため、旅行記から辿っていくことにする。

同行した塚本靖は「清国内地旅行談¹²」で、日本から中国河南までの経路を細かく記録している。九月十二日、一行は神戸を出港し、長崎を経て、朝鮮へわたり、釜山、仁川、芝罘^{チウフ}（山東省）を経由して、九月二十二日に天津に到着している。

天津から北京までは鉄道を利用しているが、これは前年（一九〇五）に開通したばかりで、岡倉天心や、伊東忠太が中国を調査した時点ではまだなかった。

さて、塚本靖の記録によれば、まず一行は北京城内の国子監、雍和宮や、城外の天壇、地壇、東西黄寺、白雲觀、天寧寺などを見学している。

関野の関心の重点は河南、陝西省にある（付図1、付録1）。彼ら一行は伊東と同じく、北京から京漢鉄道で南に向かい、黄河を渡っ



付図1 一～三回目（1906—1913年）初期踏査（『支那の建築と芸術』などにより作成）
 （——は第一回目調査線路（1906—07）；-----は第二回目調査線路（1907—08）；——は第三回目調査（1913））

て鄭州に到着した。さらに
 鉄道と分かれ洛河に沿って
 西へ進んだ。当時は瀧海鉄
 道の建設の是非をめぐる議
 論の最中で、まだ着工され
 ていない時である。利用し
 た交通機関は轎車、大車、
 一輪車、騾、驢の五種類で
 ある。¹³ 彼らは洛河と伊河に
 沿って多くの石窟を訪れた。
 石窟に関野は何を見たの
 だろうか。後に書かれた
 「清国河南陝西旅行談」に
 よれば、今回の調査は推古
 式と寧楽式の源流を確認す
 るためであった。¹⁴

これを詳しく調べると
 北魏にできた仏像の様
 式及びこれに施された
 装飾の手法が我国の法

付録1 関野貞の中国調査詳細表（1906—1913）

（凡例 ①調査帖の時間順により整理。②他の出典を参考にした場合、調査地内訳及び備考に記載。③（？）は調査時期不明のもの。④出典に著者名のない場合は関野貞である）

回数	期間	調査地内訳	目的	備考
第一回目	明治39.8.16(内閣派遣) 明治39.9.10—40.2.10	河南 陝西	・石窟彫刻 ・帝王陵墓など	・調査帖なし ・「清国河南陝西旅行談」(『地学雑誌』第9年222、224号 1907.6、8)
第二回目	明治40.6.25(内閣派遣) 明治40.9.18—41.1	天津 山東	・石窟彫刻 ・陵墓など	・調査帖なし ・「山東における南北朝及び隋唐の彫刻」(『国華』第26編第308、310、313号 1916.1、3、6) ・「後漢の画像石」(『文芸週報』第117号1908.8.5)
第三回目	大正2年(朝鮮総督府)	輯安(11日滞在): 通溝城、山城子、將軍塚、後方右塚、太王陵、折天井塚、四阿天井塚、五魁墳、散蓮華塚、亀甲塚、美人塚	・古跡調査に関する事務 ・高句麗都市、古墳	・調査帖なし ・『中国文化史跡増補』 ・高橋潔「関野貞を中心とした朝鮮古跡調査工程」(『特集 関野貞と朝鮮古跡調査』『考古学史研究』第9号 2001.5)

隆寺などの内部に安置してある仏体即ち美術史上推古式、若くは飛鳥式と称する流派に属する者に、殆ど一致して居ります、又唐の初に出来た彫刻を見ると、今度是我国の寧楽式とか平安式とか云って、聖武天皇時代を中心として出来た所のものと非常に能く似て居ります、否なそれと殆ど同様であります、此の北魏の様式と唐の初の様式とを比べて見ると非常な相違がある、即ち北魏の技術が其の儘発達しては到底唐にはならない、何か其間に或他の優秀な技術の影響を受けて唐の者ができたもので、両者互に著しく性質を異にして居ります、此或他の優秀な技術の何であるかは美術史上の大問題でまだ充分解決されて居ない、又日本でも同様推古式が其の儘発達しては天平式は出来ぬ、畢竟我国推古式は北魏の様式が朝鮮を通じて来たもので、天平式は直接に唐から輸入されたものである、是は美術史の上から研究して見ると、非常に興味がある問題である。

北魏と初唐の彫刻は日本の推古式と寧楽式の源流の問題である。

一九〇一年に書かれた「薬師寺金堂及び講堂の薬師三尊

の製作年代を論ずる」において、関野は従来の美術史上の時代区分説が二つあると書いた。即ち(一)この時期をもって一時代となし、

奈良(寧楽)時代と名づけ、その中をさらに推古期・天智期・天平期と分かつもの。(二)この時期を推古・天智・天平の三時期に分かつもの。しかし関野はこれらの区分法に反対し、古代美術の様式の視点から推古式と寧楽式を区分した。なぜなら、従来の区分法の(一)について、推古式と天平式とは随分離れ、別の流派となっているので、一時代とするのは合理的ではない。(二)について、天智時代は天平時代と比較して様式上の大きな相違はないので、ひとつにまとめた。彼は推古式と寧楽式の二つに分けて、さらに寧楽式を前期・本期、もしくは白鳳期・天平期と名づけることを提唱した。この白鳳美術についての研究は後に研究者の注意を引いて、その議論が今も続いている。このように日本の建築学、美術学界で関野は様式論を提唱した重要な代表人物である。

関野は寧楽時代の美術形式は唐朝文化を得て成立したので、「此勢力は大化以後漸く熾盛となり、仏像の姿勢はおのずから雄麗となり、相好はますます具足して、ついに優美豊満なる奈良(寧楽)時代の美術を大成するに至れり。」と主張する。しかしなぜ大化以後、唐朝文化による新たな美術様式が始まったかについて、一九〇一年の時点での薬師寺に関する論文では、関野は十分に説明できなかった。様式の問題は長安城の研究と違い、中国側の史料がないので、

フィールドワークによって補うことが重要となった。そのため中国へ赴いた。

最初に選んだ場所は当時日本に知られた龍門石窟であった。明治二十六年(一八九三)、岡倉天心が伊河辺を訪れ、龍門石窟を発見している。ここで、「発見」というのは単に日本人研究者が知らなかったものが発見されたにとどまらず、その彫刻の史的な位置付けがここで初めて行われたことを指している。明治二十六年九月十九日の岡倉の日記には、龍門賓陽洞のことが次のように描かれている。

登レハ三洞アリ 中央ニ賓陽洞ト題ス 中央ハ明カニ古式ニシテ鳥仏師のものト毫モ異ナルコトナシ 北魏のものカ 六朝の正式見ルヘキなり 此洞六間四方高サ四丈位 中央釈迦三丈位 前ニ獅子アリ 左右仏像高刻十体 少ナキモノニテ一丈二尺 三仏四菩薩ニ僧ナリ 天井の神仙法隆寺壁画ト様薄肉ニテ十二天女アリ 壁上伊坡トモ見ルヘキ浮彫の男女の形数百体亦因果経ニ係タリ アシリアの半刻ヲ思ハシム 婦人翳ヲ持チタル極メ(テ)面白シ

帰国後、岡倉天心は「支那美術ニ就テ」、「支那旅行——幻燈説明」等で調査結果を公表し、日本における石窟調査の先駆者となった。そして初めて、その美術的価値を世界に知らしめた。

洛河の沿岸には多数の仏像彫刻が残っており、南北朝、北魏の景明年間のものをはじめ、東魏北齊から唐の初めにかけて建立された彫刻がたくさんある。それは推古式と寧楽式について考察するためには、関野にとって一番よい見学場所だったかもしれない。

関野の目に映じた龍門石窟は北魏と唐の彫刻であった。両者はかなり趣を異にしており、その差は日本の推古式と寧楽式と類比可能である。しかしなぜ寧楽式（特に問題の焦点たる白鳳式）が推古式と大きく違っているのか、についてはまだ謎が残る。ただ、関野は日本の推古式と中国の北魏式、日本の寧楽式と中国初唐との類似性を提唱した。日本における差の存在は中国の差と関連している。しかしなぜ中国の北魏と初唐との間に、差が存在しているのか。この疑問は、第二回目の中国山東調査の時に解明されることとなる。

洛陽で関野は他の二人の同行者と分かれ、西安へ赴き、唐長安城と周辺の多くの陵墓を調査した。この部分の内容は後述する。

（二） 山東省で隋時代彫刻の発見

引き続き明治四十年（一九〇七）九月十八日から翌四十一年一月まで、関野は天津から運河を遡り、山東に入り、二回目の中国調査を行っている。⁽²¹⁾ 第一回目の調査からわずか九カ月後である。第一回調査で直面した謎を如何に早く解決しようと欲しているかが窺える。

山東の調査については「山東省における南北朝及び隋唐の彫刻」⁽²²⁾

に記録が残る。その中に千仏山（済南）、神通寺（済南）、玉函山（済南）、龍洞九塔寺（済南）、五峰山蓮花洞（済南）、雲門山（青州）、靈巖寺（済南）、駝山（益都）などについて彼の調査内容が見られる。

この調査により、南北朝時代には二つの流派が存在していたことが分かった。その一つは北魏式である。その様式は朝鮮を経て日本に伝わり、鳥仏師派の飛鳥時代の様式となった。二つ目は南北朝ではあまり見られず、隋に入ると発展し、唐に至り円熟の境に入り、しかも全く第一派の影響を免がれることがなく、かつ唐作に比べる と生硬の傾向なきにしもあらず。これは後に日本に伝えられて寧楽時代の様式となる。そして、隋時代の彫刻を見ると、第一派は南北朝より隋に入りて完美の発達を遂げたもので、駝山の第四、第五窟の仏菩薩に作例があり、崇高なスタイルと洗練された技術で、盛唐にはないことである（図2）。第二派は「亦隋に入りて益その特質を発揮し、漸く円熟の境に入らんとす。而も猶全く第一派の影響を免くこと能はず、且つ唐作に比べれば生硬の傾向なきにあらず。」⁽²³⁾

雲門山の第一、二窟の仏像に見られる。関野は第一窟で隋開皇十六年から十九年の造像銘を見つけ、第二窟では銘を見つかなかったが、「左右両挾侍は其の様式を見るに、亦隋に属すべき者にして技巧頗る優れたり」⁽²⁴⁾と結論する。その隋の彫刻は「宝冠は甚だ美にして既に唐式の先駆たることを示せり。而も直立の姿勢と穩健の衣文とは猶北魏の余影を見るべし。佩剣及び石帯の手法は温雅雄麗にして、



図3 雲門山石窟第二窟脇侍菩薩像（『支那の建築と芸術』より）



図2 駝山石窟第四窟本尊（『支那の建築と芸術』より）

菩薩の台座に於ける蓮弁亦頗る雄健の氣象をあらはせり。」（図3）
 第一派は隋に於いて充分円熟の域に達して終焉を迎えたが、第二派は発展して、唐に入り初めて完美なる唐式を大成に至る、と関野は結論した。

隋の石窟の発見によって、北魏と唐との間の変化を説明するための証拠が見つけられたことになる。

関野に先行する岡倉天心は山東省に行かなかった。また、近代日本の中国彫刻研究の第一人者となる大村西崖の初めての中国調査は一九二一年である。山東省の調査とそこから引き出された結論は関野の独自のものではないか、と論者は考えている。第一回の中国調査と比べると、山東調査はさらに新しい刺激的な発見と言える。山東半島と韓国と日本との関係は今に至るまで重要な研究テーマとして扱われている。一世紀以前の関野貞の研究は今日なおその存在価値を失っていない。

中国の問題解決よりも一歩進んでいたと言えるだろう。しかし、隋時代の彫刻と日本との関係について、関野は説明しなかった。この問題について、一九一五年大村西崖は『支那美術史彫塑編』中で、関野の調査成果を継承し、「唐式の早く既に隋代に胚胎せるを見るべし」といい、続いて隋風と推古朝風との関係について、「我が国古代の彫刻を顧みるに、これ等の諸像と年代を同じうする推古天皇時代の像式は、東魏、高齊の典型を伝へたるものなること、先にその相似を説けるが如く、却りてその隋式に非ざるを

するべし。惟ふに最初我が国には三韓より伝へたるにて、三韓は隋代尚魏齊の旧式に依りしが為なるべし。飛鳥時代に至りては、直接唐と交通してその風を伝へ、謂わゆる隋式は終に殆ど我が国に行はれずして止みしなり」と論説した。隋の彫刻は日本に影響しなかったという結論を出すためには、関野の実証調査が不可欠であったことになる。

しかしなぜ中国の北魏と唐の様式が異なるのか、そして、隋時代に初めて出現した様式がどこからきたのか、もまた重要な問題であった。当時はまだ解決できなかったが、関野は後のインドでの調査（一九一八年）の結果と総合的に分析して、解決をはかることとなる。一九二一年に関野は「飛鳥時代の彫刻」を発表し、インドとの関連性を論述した。さらに一九二八年に「寧楽時代の彫刻」を発表し、インド、中国、日本の彫刻の關係について次のように明確に述べている。

まずインドの方からお話すると、インドには古代芸術の二大様式がありました。その一つは中インドすなわちガンジス河流域に発生したもの、いま一つは西北インドすなわちインダス河の上流ペシャワール地方に発達したものであります。これをまたガンダーラの芸術とも称します。（中略）また中インドの芸術は紀元前三世紀阿育王のころより、ギリシアやペルシアの

影響を受けて固有の発達を遂げ、特に四、五世紀グプタ朝の時代に異常の進歩をなし、インド芸術の黄金時代を作り出した。

ガンダーラの芸術は早く仏教とともにシナに輸入されました。（中略）シナの伝統様式にガンダーラ式が多少加わって、それが十分シナ化され、ほとんどガンダーラの形式が残らないまでに変化してしまつたのであります。この南北朝時代の形式が朝鮮を通じて日本へ入って来たのが、すなわち我が飛鳥時代の芸術とするのであります。

唐が天下を統一するに及び、その領土は西域地方に拡がり、パミールを越えてペルシアと境を接し、またチベットを付庸として直接にインドに通ずるようになり、シナとペルシア・インドとの交通は大いに開け、したがってペルシア・インドの芸術が盛んにシナに輸入され、新興漢民族の自覚の下に十分に消化され、空前絶後ともいふべき初唐文化の黄金時代を大成したのであります。この初唐において発達成熟した優秀なる芸術が、大化の革新以後直接に唐との交通により盛んに我が国に輸入され、それが奈良時代の芸術の根本となるのであります。

岡倉天心は『日本美術史』のうち、天智時代は唐の影響が顕著であり、唐の美術はインド・ギリシア風と関連性のあるもの、と論じ

た。つまり寧楽時代美術様式の変化は他の種類の様式を中国に導入したためであると考えている。この観点は関野の認識と同種のものである。関野には建築、彫刻など、すべての細部に関心を寄せ、個々の曲線、図形を捉えて、そこから得られた判断を全体に及ぼす傾向が見られる。関野はその実証的な調査により、日本の推古式と寧楽式彫刻はなぜ急変したのか、を解明しようと、努力した。「七世紀後半の美術作品が唐文化を得て成立したもので、次の八世紀の美術様式の萌芽ないし先駆的なものと扱えたのは明治の関野貞氏であった」と、大橋一章は先学の白鳳研究を纏めながら、関野の研究を評価した。しかし関野説は「大化改新に対する認識を示さなかった……このような政治上の事件にとらわれて美術現象を解釈しようとするのはたしてどんなものだろうか」と批判されることになったのである。」また、白鳳期の基準作例が指定されなかったために、「関野氏の言う白鳳期の始まりがどうしても曖昧になるのである。画期的な関野説もこの点が弱点と言えよう」と指摘した。

彫刻様式の研究は、後の関野の中国建築様式研究に受けつがれることとなる。

三 植民地の「場」的な誘惑

—— 広開土王碑発見以後における
輯安高句麗遺跡の調査

(一) 朝鮮調査の概況

一九〇二から一九三〇年までは、朝鮮、満洲が植民地化される時期であり、関野は頻繁に日本、朝鮮、中国を巡っている。一九〇二年に朝鮮、一九〇六―〇八年に中国、一九〇九―一五年には朝鮮、一九一八年に中国、さらに一九一八―二〇年にインド、ヨーロッパへと、調査を交叉的に行った。一九一八年以前の調査の重心は朝鮮に偏っている。

朝鮮の最初の考古学的調査は八木樊三郎（やぎ さんろう）によってなされた。彼は一九〇〇年に六カ月におよぶ朝鮮調査を行った。続いて、関野貞は一九〇二年五月九月にかけて朝鮮に滞在した。初めての朝鮮調査の重点は朝鮮南部慶尚南北道の一部とソウルの周辺であった。重点は新羅、高麗、朝鮮各時代の宮殿、城壁、寺院、塔、陵墓、住宅などで、悉皆調査である。

一九〇五年、日露戦争の後、日本は正式に朝鮮を保護国とした。日本は「建築改善」政策を取り入れた。建築家の妻木頼黄（つまき よりなか）（一八五九―一九一六）は朝鮮の古建築を破壊から救う必要があると認識し、調査に基づいてランキングを付け、さらにこれらの建築を保護することを提案した。植民地に対して、日本は保存に関する独自イデオ

ロギーを加味する傾向が見られる。妻木は関野をこの仕事の担当に推した。この推薦により、関野は中国調査の後、一九〇九年九月―十二月、再び朝鮮で調査の機会を得た。³⁵⁾

「支那の陵墓」を発表した翌年、一九〇九年十月、関野は平壤日報社の白川正治から大同江南岸に大量の古墳があることを聞いて、すぐに現場に向かった。そこで漢代の瓦、そして煉瓦の玄室から漢代の古鏡、土器、武器を大量に発見する。これらの古墳からは楽浪時代の漢民族との関連性、また楽浪郡治遺跡の所在地が証明された。³⁶⁾

このように朝鮮の研究は一歩ずつ北へと発展し、中国との関連性を明らかにした。

さらに一九一三年、約十一日間、関野は国境を越え、安東省輯安県³⁷⁾にて調査を行った。研究の進展は帝国主義の植民地開発の拡がりとは一致したものであった。

(二) 輯安高句麗遺跡の調査

1. 高句麗陵墓の調査

歴史的に見ると、輯安丸都は三国時代の高句麗の首都であり、魏の直接的な支配を受けていたので、中原文化の影響があった。四世紀に入ると、高句麗の力が強くなり、独立し、朝鮮半島の北半を制圧した。その後、今の平壤に遷都した。それ故、輯安の研究は高句麗研究の重点であった。

輯安が注目されたのは、一八八四年、広開土王碑の発見からである。広開土王碑の拓本を最初に日本にもたらしたのは、学者ではなく、日本の参謀本部の将校である陸軍砲兵大尉、酒匂景信という現役軍人である。

一九〇五年、人類学者・考古学者の鳥居龍藏³⁸⁾(二八七〇―一九五三)が輯安丸都を発見する。鳥居龍藏はここで三日間にわたる最初のフィールドワークを行い、「高句麗の陵墓地として一千四、五百の古墳今なお存在」することが確認された。³⁹⁾ 続いて一九〇九―一九一〇年に谷井濟一、栗山俊一らによって、輯安・平壤一帯で高句麗墳墓の調査がなされた。

これをうけて、関野も現地を訪れた。鳥居龍藏の研究は関野の研究と似ているところが多かった。楽浪の研究から、輯安、そして東方文化学院時代の遼文化研究に至る鳥居の軌跡には、関野に近いテーマがみとめられる。関野は朝鮮調査から輯安に至る。いわば輯安の調査は朝鮮の延長である。鳥居と関野とはお互いに影響を与えたものと論者は考えている。

一九一三年、関野貞による壁画古墳を中心とする調査がなされた。「土塚」と「石塚」の二種あることに触れ、將軍塚、太王陵、千秋塚、折天井塚、四阿天井塚、散蓮花塚などの調査を行っている。調査内容は内田好昭の「日本統治下の朝鮮半島における考古学的発掘調査」(上)に詳しく書かれているので、ここでは省略する。

関野はこの調査により、『朝鮮古蹟図譜』の作製を行ったが、中国の陵墓、朝鮮の古墳は関野の研究の重点と考えられる。古墳から古代文化交流のありさまが窺える。

結論として彼はこう述べている。「石塚」について、「支那の方から伝へられたものではないと思ひます。」⁽⁴⁾「土塚」については、「壁から天井は全部漆喰を塗って仕上げをするのであります。かう云ふ墓の構造は高句麗特有のものでありまして、その仕組みは非常に巧なものであります。」⁽⁵⁾

高句麗古墳は高句麗に特有のものとして認定すると共に、壁画からそこに漢文化、仏教の影響が存在する事を指摘した。

その外漢時代の雲の如き文様から出て来た一種の蟠虬文があったり、又仏教芸術から来たところの蓮花文様があったり、それから又四方に四神と称し、……この青龍・白虎・朱雀・玄武と云ふ四神は支那の方の思想でありまして、即ちこれは星を現しているのであります。⁽⁶⁾

彼はそれまでに中国、朝鮮の陵墓を調査していたので、このような総合的な視野を持つことができたのであろう。無論、「高句麗の特有のもの」として説明した抹角天井 (Laternen Decks) は西アジア、シルクロードでも発見され、「高句麗の特有のもの」ではない

ことが以後の研究により明らかになったが、関野が文化影響の視点から建築の様式を考察しようとした姿勢が窺える。

そして高句麗の古墳の価値について、彼はこう評定する。「支那でも未だこの時代に相当する南北朝以前の絵画といふものは、実物として一つも見えられていないのであります。……南北朝時代以前の東洋における文化を知る上に非常に貴重なものと云はなければならぬのであります。」⁽⁷⁾

彼の研究は、『朝鮮古蹟図譜』や『高句麗時代の遺跡』上・下として刊行された。かくして、高句麗の壁画古墳の存在は世界に知られるに至ったのである。

2. 国内城と丸都城跡についての議論

歴史史料により、かつて輯安の周辺に高句麗の都として国内城と丸都城が存在していたことは知られていた。始め始祖鄒牟王沸流水のほとりに居り、次の琉璃王は更めて国内城に移り、第十代少上王は都を丸都に遷し、第二十代長寿王は遂に鴨綠江畔を去りて平壤を都とした。だが、その所在地は一九〇五年から一九一〇年代半ばまで研究者の議論の焦点であった。

鳥居は『三国史記』、広開土王碑、魏の母丘儉紀功碑(輯安の西北九十華里、山城子の西の板石嶺で、一九〇六年発見)と古墳などから、一九一〇年になって初めて輯安(通溝)は国内城であると主張

した。また丸都城の所在地は輯安の西北九十華里の板石嶺にあると纏めた。⁽⁴⁶⁾

さらに、鳥居は一九一二年に現地調査を行い、自分のかつての丸都城の場所についての想定を否定し、板石嶺ではないが、東に発見された山城子は天険要害で、かつ高句麗の山城と合致しているので、丸都城は山城子に比定される、とした。同時に鳥居は国内城を懷仁県の兀刺山城に比定した。⁽⁴⁷⁾

日本の著名な学者たちがこの問題に関心を寄せた。歴史史料の記載が混乱しているため、様々な説が出てきた。那珂通世は「此碑の現はれたる洞溝の地は蓋国内城の近郊ならん」⁽⁴⁸⁾。松井等は臨江県付近と考えた。⁽⁴⁹⁾

また丸都城については、那珂は楚山若しくはその対岸の辺とした。⁽⁵⁰⁾ 小川柳波は板石嶺付近とした。⁽⁵¹⁾ 松井等も板石嶺とした。⁽⁵²⁾

城址の問題は今日なお定説がない状態である。

関野は一九一三年に現場調査を行った。関野は前述した太王陵、將軍塚、千秋塚、西大塚、臨江塚以外に、広開土王碑、通溝城、山城子なども調査し、瓦、銘文煉瓦などを収集した。これは高句麗文化の研究にとって貴重な資料として、今日まで東京大学に保存されている。しかし、この調査の帰途、京三防という所で宿舎が火事に遭い、調査帖を焼失した。調査の成果は「満洲輯安県及び平壤付近に於ける高句麗時代の遺蹟」⁽⁵³⁾として発表された。

結論として、関野は国内城は通溝にあり、尉那巖城は山城子に比定される、と考えた。丸都城の位置は東の鴨緑江の下流の楡樹林子にあると判断した⁽⁵⁴⁾。関野は鳥居の意見に反対している。「蓋山城子の地は城内險隘到底王宮衛を設くるの余地なく……城外亦地形居促到底都邑を置くべき処にあらず……其間直徑猶四里……距離あまりに遠きに過ぎたり」⁽⁵⁵⁾、と。

丸都城の位置について、関野は『道里記』や『遼史』により丸都城が鴨緑江の下流二百里のところにあることを確認し、そこから楡樹林子の谷地を挙げ、さらに現地調査して同定した。唐の一里は千五百尺に相当する。唐の一尺は当時日本の曲尺の約九寸七分、ならば、唐の一里千五百尺は曲尺の千四百五十五尺である。『道里記』によれば、「自鴨緑江口至丸都県城」六百三十里（唐里）となる。

関野は朝鮮総督府臨時土地調査局に依頼して、現場で実測した。結果は、鴨緑江口から楡樹林子河口まで五百六十九唐里となっている。誤差は「各碇泊地の距離は四捨五入の結果実際の里数より多少の延長あるは免かれ難き所」⁽⁵⁶⁾と考えた。建築にせよ都市研究にせよ、寸法計測は関野が頻繁に使った方法である。法隆寺の年代考証問題、遼東の漢墓問題、輯安の古墳の実測についての研究にいずれも援用されている。丸都城の位置推測にもこの方法が用いられた。

しかし論争はまだ続く。一九一四年、白鳥庫吉は丸都城即ち国内城説を提唱し、東洋史学界に新たな論争をまき起こした。⁽⁵⁷⁾ 彼は関野

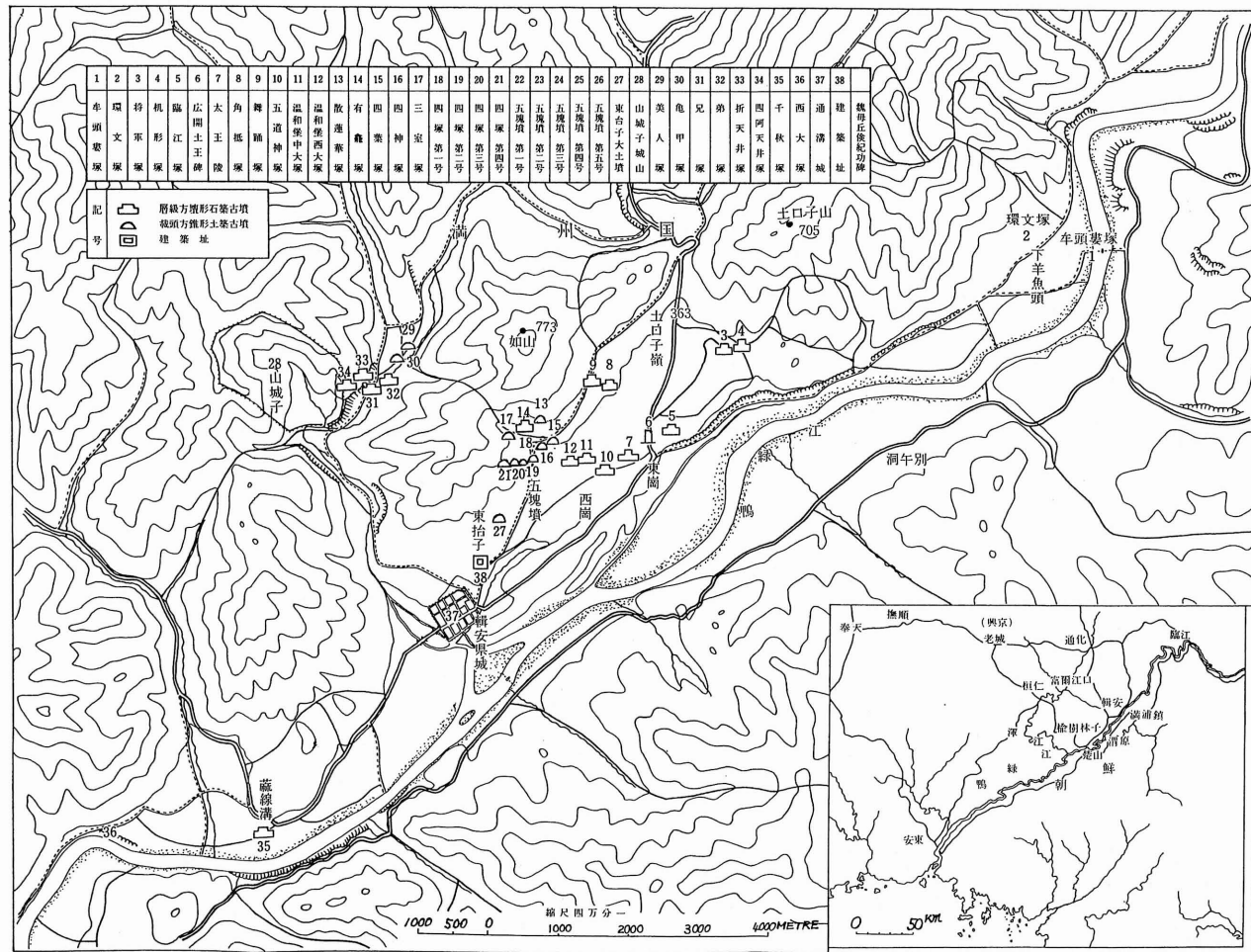


図4 輯安遺跡分布地図（『高句麗と渤海』より）

の意見に反対し、丸都城は山城子にあるという鳥居の説に同意した。ただし、国内城については鳥居と異なる意見を持っている。これに對し、鳥居は自分の意見を堅持し、関野も納得せず、「国内城の位置を決定せんとすれば丸都城の所在地を併せて考究せざるべからず」と言った。⁽⁸⁾

通溝についての研究は後に東方文化学院の池内宏^(いけうちひろし)(二八七八—一九五二、東京帝国大学教授、文学博士)によって完成された。その成果として『滿洲国安東省輯安県高句麗遺蹟』、『通溝』がある。池内

宏は白鳥の意見を支持し、「余は白鳥博士の丸都、国内同処を以て鉄案と信ずるものである」とする。⁽⁹⁾戦後中国側の研究者は『三国史記』高句麗本紀の記事に基づいて、この通溝城を瑠璃明王三十二年(紀元後三)に王が遷都した国内城であると認めている。またその時、同時に築かれた尉那巖城は山城子山城であり、そこは山上王の時、石築の完成された山城となって丸都城と呼ばれ、同王五十三年のときには、この山城内に王宮が移ったと主張している。しかし、日本人研究者はまだ納得していない。⁽¹⁰⁾高句麗都市についての研究は今なお続いている。

輯安は一見極めて普通の田舎であり、それに関する研究は大変地味なものと思われるが、いかなる誘因で輯安の研究がそれほどまで注目されたかは、重要なポイントと考えなければならぬ。それは、輯安に関する研究が、広開土王碑から誘発された研究だったため

はないか、と論者は考えている。当時の多くの研究者は広開土王碑の発見以来輯安に注目し始め、広開土王碑研究の結論として、以下の説が日本の常識となった。つまり、「この碑文には、西暦三九一年に大和朝廷の軍隊、日本の軍隊が、朝鮮南部を攻め、百済や新羅を征服・服属させたばかりでなく、その後はるか平壤あたりまで進攻し、高句麗もたたかたと記録されており、……」⁽¹¹⁾とするものである。現在なお、広開土王碑を巡り、日朝の政治関係が議論の焦点になっている。⁽¹²⁾それゆえ、植民地問題が如何に見えない線で研究と繋がっているのかも良く分かる。その中、関野は鳥居龍蔵やフランス人のE. Chavannes⁽¹³⁾に続き輯安に最も早く足を延ばした研究者のひとりである。

輯安研究は高句麗の研究であるが、朝鮮研究と滿洲研究との接点ともいえ、関野の滿洲研究の出発点となった。

四 保存問題から見た関野貞のナショナル・アイデンティティー

——一九一八年の悉皆調査

関野は実証主義的な研究者と言われ、政治的な論説は多くないが、研究者も時代と無関係ではなく、時代の刻印は残されている。保存の問題は建築史研究と社会との接点であり、そこからは関野のナショナル・アイデンティティーが窺われる。

(二) 中国文化遗产の悉皆調査

清末の中国内陸調査から十年、関野貞は大正七年（一九一八）三月九日から十月十三日まで第四回中国調査を行っている。その間、中国は清国から民国へと時代が変わっていた。中国も国民国家へと脱皮し、反日の民族主義運動が高揚し五四運動が起きた時期に当たる。今回の調査は文部省の依頼で、中国、インド、欧米における古建築保存に関する調査である。朝鮮、中国を含めて、八カ月の調査である。この調査は彼の中国踏査のうちでも一番長く、広い調査である。三月から十月までかかった。⁽⁶⁶⁾

調査帖を見ると、彼は一九一八年二月二十日に東京を出発、朝鮮を経て、三月九日奉天に着いた。そして、大連、遼陽、北京、大同、雲崗、周口店、房山、西陵、正定、彰徳、開封、鞏県、洛陽、偃師、登封、太原、山東、江蘇、浙江などを調査して、七月十四日北京日本人倶楽部で『支那古代文化遺跡』の講演を行っている。その後、天津、濟南、青州によって、海路上海に来て、蘇州、鎮江、南京、杭州、紹興、寧波、天台山に至った。（付図2、付録2）

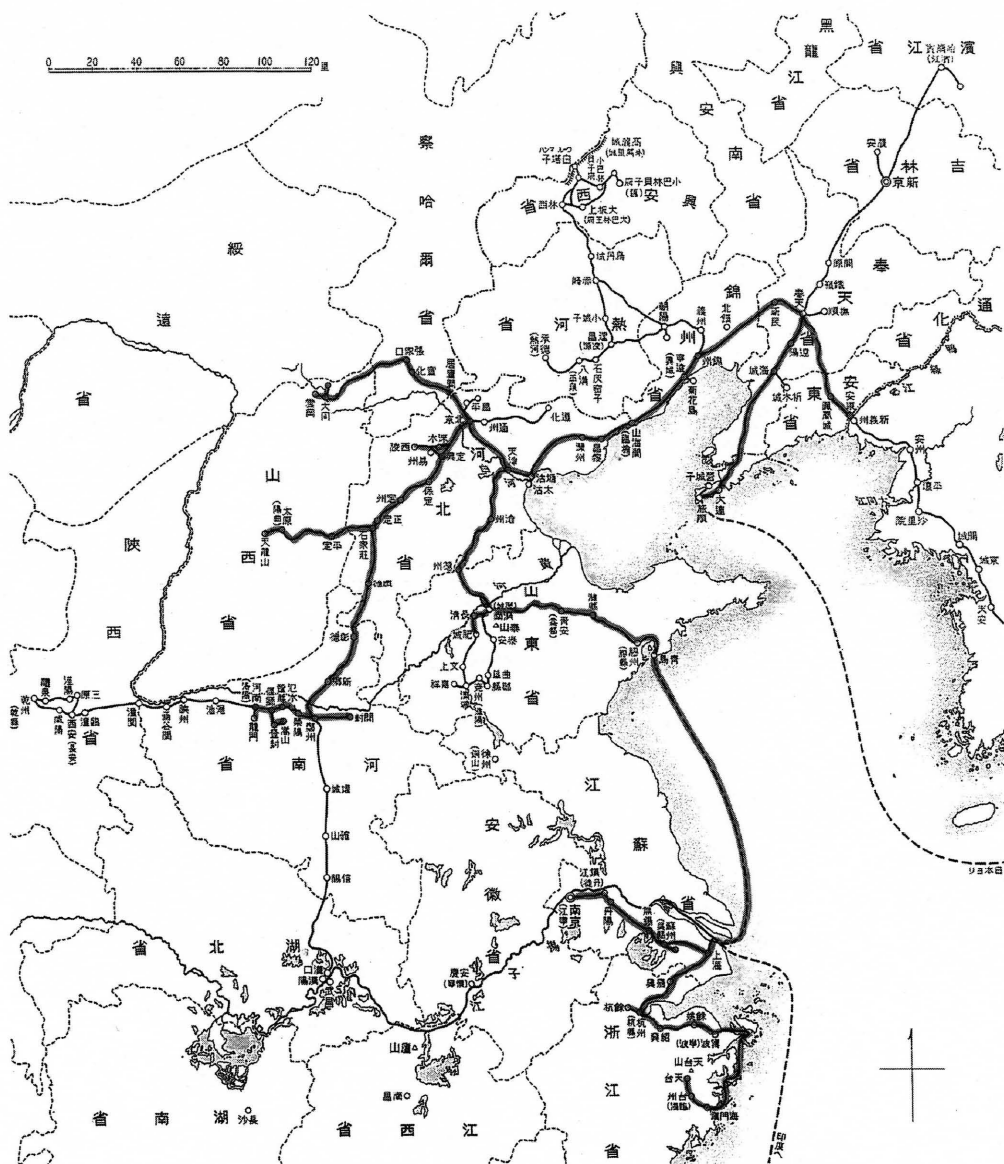
これらの調査により、一九二五—三一年『支那仏教遺蹟』、一九二九年『支那建築』⁽⁶⁸⁾という中国建築の基礎となる資料が完成することとなる。

今回の調査の重大な収穫は天龍山石窟であった。

岡倉天心の龍門石窟に関する発表と伊東忠太の雲崗石窟に関する発表は石窟への注目を高めた。日本と関連する古い時代の木造建築の遺構が少ないため、関野は石窟や陵墓に注目を向け始めていた。上述したように南北朝、隋、唐の初めの石窟を研究したのに続いて、今度は太原県天龍山で大規模な北斉時代の石窟を発見した。石窟の場所が僻地であり（付図2）、文書記録も少ないため、中国の金石学者には注意されていなかった。

関野の発見は偶然である。後に書いた『天龍山石窟』に調査の状況を述べている。これによれば、彼は文献により太原県の重要古跡を知り、晋祠を調査したとき天龍山上に聖寿寺がまだ残っていると聞き、一日往復で見に行くことが決まった。六月三十日、この日は曇天だった。関野は馬に乗って出発したが、途中で道路が険しくて馬を放棄し、徒歩で山を登った。五里ほど登ると、聖寿寺に到着した。寺院は衰退し、僧侶数人しかいなかった。寺院の西は天龍山、山は東と西に分かれ、関野はまず東峰に登った。やっと辿り着いた時、目の前に拡がったのは北斉から初唐期にかけて掘削された石窟だった。

その後、関野は西峰に登って、各窟を調査した。当日、彼は予定を変更し、お寺に一泊し、翌日もう一度石窟を調査した。残念ながらガラスの乾板が少ないため、多くのデーターを撮れなかった。当時日本の研究者はこのようなガラスの乾板を使っていたが、これ



付図2 四回目(1918年)の調査(『支那の建築と芸術』、調査帖などにより作成)
(—は第四回目調査線路(1918))

は非常に重たかった。筆者は伊東忠太の助手であった飯田須賀斯の妻飯田照子にインタビューを行った。飯田照子によれば、当時飯田須賀斯はいつもガラスの乾板をもって中国へ行った。ガラスの乾板は非常に貴重なため、人物写真はあまり撮らなかった。できるだけ建築の写真を撮った、という。関野貞は各窟に番号を付け、西から東へ十四個窟を調査し、各窟の年代、彫刻手法を考察し、日本と比べる。彼の研究は建築に限らず、彫刻、仏像等各方面にわたって、総合的に年代の判定が行われた。関野貞の考察記録

付録2 関野貞の中国調査詳細表(1918)(凡例は付録-1を参照)

回数	期間	調査地内訳	目的	備考
第四回目	大正7年2月20日から10月13日(文部大臣、文部省)	<p>2.20東京出発 奉天：3.9石碑嶺完顔楼室墓・3.12清太宗昭陵(北陵)・3.13奉天宮殿・3.14太祖福陵(東陵)・3.15奉天西塔、南満中学堂講演「支那陵墓」・3.16魯国奉天戰役記念堂 大連：3.9南満発掘品、撫順発掘陶器(満鉄陳列館) 遼陽：3.11遼陽白塔寺 北京：3.28雍和宮・3.29北海・3.30「漢尺及清工部营造尺」・3.31万壽山・4.1紫禁城、宮城・4.3景山・4.5妙応寺、白塔寺白塔、皇帝廟、帝王廟・4.6白塔寺・4.8石棺(宋時代・北京大吉祥古玩処蔵)・4.12文廟、国子監・4.14五塔寺金剛塔・4.16太和殿建築家・4.18天寧寺明銅鐘、天寧寺・4.26北京工科(工手学校出身荒木清三氏談 工匠値段)・4.?西黄寺 張家口： 大同：4.30—5.8旅費精算(関野貞から受入：50.00円 支出37.05円 残高12.95円)5.6大同東門楼・(?)上下大華嚴寺(「大同大華嚴寺」) 房山：5.19西城寺・5.20東峯(小西天)山上九重小石塔、西域雲居寺・5.21金陵 肇興：6.3宋陵(西陵太宋陵?)、宋陵東方南陵(太祖陵?)、皇後陵・6.4石窟寺 洛陽：6.5存古閣・6.6洛陽天津橋 偃師：6.16偃師県金石・6.17宋重修昇仙太子大殿碑・6.24唐孝敬皇帝恭陵(少林寺から偃師へ帰途中.....) 登封：6.19中岳廟大宝石闕・6.22啓母廟石闕、少室石闕 太原：6.29晋祠、淨明寺、奉聖寺・6.30天龍山第7窟・7.1天龍山西峯石窟、天龍山第1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13窟・7.2永祚寺大雄殿、双塔寺大雄殿 北京：7.14「支那古代文化遺跡」(北支那旅行談)(北京日本人倶楽部に於て) 雲崗、西陵、正定、彰德、開封、天津 濟南：(?)金石保存所(濟南) 青島：(?)雲門山(青州)、五峰山蓮華洞(肥城)、孔子廟図 上海： 蘇州：瑞光寺、双塔寺、報恩寺、開元寺、元妙觀、滄狼亭、寒山寺、楓橋、虎丘(「蘇浙旅行談」より) 鎮江：(?)甘露寺鉄塔、金山寺七重塔、金山江天禪寺 南京：8.26明孝陵・8.27貢院・8.28棲霞寺舍利塔、梁墓石物、張家庫梁墓石獅・8.29明故宮・8.30棲霞寺 余杭：9.12徑山、徑山寺大鐘 杭州：9.9保淑塔、昭慶寺、雷峰塔、孤山及西湖景勝・9.10靈隠寺飛來峰、靈隠寺・9.13靈隠寺飛來峰・9.14白塔・9.14棲霞寺、六和塔・(?)三潭印月九曲橋、法鏡寺・10.5靈隠寺飛來峰 紹興：9.16紹興会稽山清墓、禹廟及禹墓、塔山応真塔・9.17宋孝宗永阜陵 寧波：9.20育王寺 天台山：9.25万年寺・9.27国清寺、国清九層磚塔・(?)万年寺、真覺寺、華頂善興寺、上中下方広寺 台州：(?)巾峰寺及千仏塔 上海：10.8上海学士会講演 10.?磚郭『台州瓦録卷三』</p>	<p>・悉皆調査 ・古跡古物保存調査</p>	<p>・徴西旅費 総計：351.225円 東京—京城：44.85円。京城—奉天：32.00円。 奉天—大連：8.5円；大連—奉天：12.5円。奉天—北京：31.45円。大同往復：56円。 ・調査帖より ・「蘇浙旅行談」上海学士会講演1918.10</p>

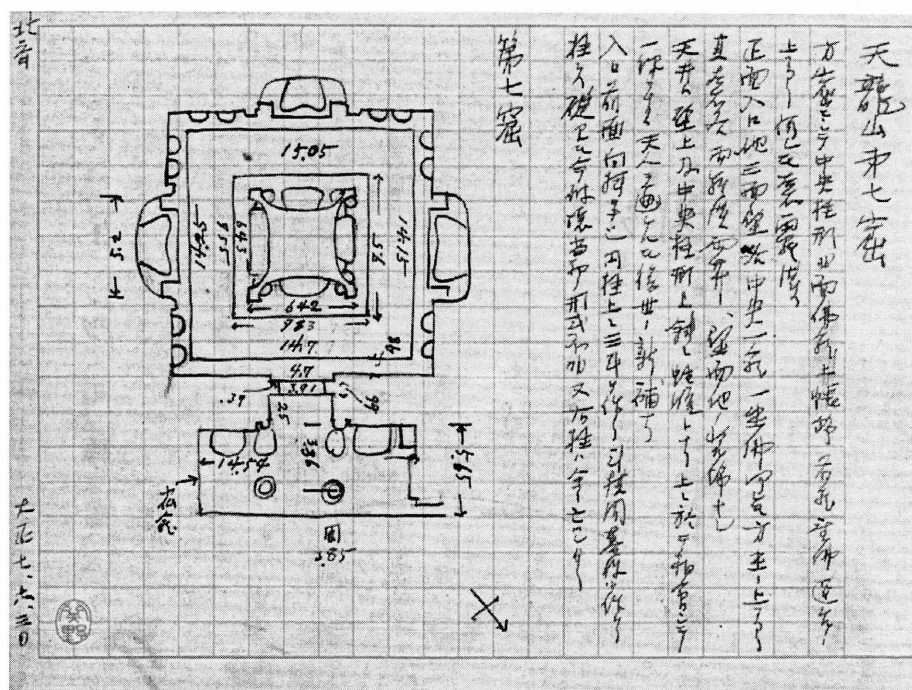


図5 天龍山第七窟の調査帖（東京大学生産技術研究所所蔵）

はすべて特製の「関野」と刻まれた調査帖に書かれた(図5)。調査帖から見ると、六月三十日(一九一八年)に天龍山第七窟を観察、平面と詳細寸法を調査した。そして七月一日石窟第一―十三窟まで調査した。実は十四窟を発見したのだが、近づく術がなく、メモもできなかった。

調査した結果、北斉(五五〇―五七七年)の石窟は五つ、隋(五八一―六一八年)に属するものは一つ、唐(六一八―九〇七年)に属するものは八つある。北斉の石窟は完全に保存され、他のところではほとんど類例を見ない。北斉時期の彫刻研究に欠かせない作例である。

関野は第一回目の調査では河南省で北魏と唐の彫刻を考察、第二回目には山東省で隋の彫刻を発見、今度の調査では、さらに作例の少ない北斉の彫刻を発見した。北斉の彫刻の様式について、彼は次のような結論を出した。

是等の石窟に現れた手法を挙げれば、北斉の芸術は大体に於て北魏の連続にして、殆んど何等新たな様式の加はれるを見ず。却つて之を雲崗、龍門に於ける者に比すれば、甞に規模の小なるのみならず、技工の寧ろ簡朴に過ぎるを覚ゆ。北魏盛代の隆昌を極めたる両帝都と、国力沈滞せる北斉の別都との芸術の間には、技術上かかる相違を見るは偶然にはあらざるべし。而も吾人は他に類例なき北斉の石窟之に発見せるを以て満足せ

んと欲するなり。⁽⁸⁾

また、北斉と隋の差について「木造建築の細部を模したる柱、斗拱、臺股^{きようた} 軒を用ひし用いること之なり。是雲崗龍門にも亦見ざる」とし、唐時代の彫刻については、「規模小なれども手法の精鍊、寧ろ龍門幾多の唐作を凌駕せん」と評した。

岡倉天心が龍門石窟を発見したのは一八九三年のことであった。そして一九一二年には伊東忠太が雲崗石窟を発見している。それに続く一九一八年の天龍山の発見が当時の調査者にとって、探検の様な気分を与えたことは間違いない。一つの発見は文化伝播の一つの証拠となる。それは当時のアジア古跡調査の魅力でもあった。しかし、そのような発見はすぐに世界に伝わり、中国の古跡古物保存制度がまだ整っていない時点では、非常に危険でもあった。

関野の調査以後、外村太治郎^{たじろう}らの調査により、二十四窟が発見され、大正十一年には『天龍山石窟^{てんりゅうざん}』が出版されている。その後、天龍山の仏像彫刻は、龍門石窟などと同じくその多くが流失した。いささか皮肉なことに、一九一八年の関野の調査の目的は、中国の古跡古物の破壊状況を考査することであった。

(二) 遅れた中国の保存体制

中国の遺跡保存についてどのような問題があったのだろうか。関

野は次のように書いている。

前両回の調査の時を距ること僅僅十二年であるにも拘わらず、遺跡の破壊廢滅の大なるに驚き、其防護の一日も忽^{ゆるがせ}にすべからざるを覚ったのである。……古来革命の兵乱や、外敵の侵掠や、保護の不十分などの原因で、明以前の木造建築は殆んど全部廢滅し、僅かに石造、磚造^{せんぞう}の者が荒廢しながら遺っている。日本では千年以前の木造建築は尚三四十棟あり、五百年以前の者は三四百棟もあるが、支那の如き大国でありながら、余の調査の範囲では千年以上の建物は一つも遺っていない。五百年以上の者も極めて僅少である。余の見た木造建築で最も古い正確の者は河南省登封県少林寺の初祖庵で、宋の宣和七年（一一二五）の再建である。次は同寺の鼓樓で元の大徳六年（一三〇二）の再建である。少林寺は昔時達磨が面壁九年の行をしたといふ著名の大刹であるが、今は非常に貧乏寺で、是等文化史上最も大切な建物も修繕の力なく、屋根破れ軒落ち、今にも崩壊せんとしている。……又山西省大同府の城樓は、明初洪武年間の者、日本ならば特別保護建築物として国家的に保存すべき者であるに拘らず、今は全く屋根を失ひ、僅かに柱や組物や梁などが脇骨のやうになって風雨の浸蝕に任されている。……文化史上貴重な資料たる建造物は、近き将来に於て多くは湮滅^{いんめつ}に歸するで

あらう。実に惜むべきことである。……余は十四五年前に往った時無事にあつた優秀な仏頭は、一昨年再遊の時には皆打落されていた。実に情けないことで、余は之を見て遺憾に堪へなかつた。⁽¹⁾

これは関野が時代の証言者として証言した中国の清末民初の文化遺産の状況である。

清末民初は中国の保存体制の誕生の初期で、非常に重要な時期である。当時法律が施行されていなかったため、大量な資料が外国に持ち出された。周知のとおり、最も有名な事件として敦煌石室書目の流失がある。⁽²⁾

一九〇六年官制が改革され、民政部は古物古跡の保存の責任を持つようになった。一九〇九年『保存古物推広弁法折』を公布⁽³⁾、そのうち、調査と保存の二つに分けて内容を規定した。調査するべき項目は六項目。すなわち①周秦以来の碑碣^{ひけつ}、石幢^{せきどう}、石磬^{せきけい}、造像及び石刻古画、摩崖字跡など、②石質古跡、③古廟名人壁画或いは彫刻美術の優れた作品、④古代帝王陵寢、先賢祠墓、⑤名人祠廟、⑥金石諸物、である。各々の分布、種類、内容、残缺情形を民政部に報告資料を残すという立て前である。また、保存すべきものとしては①碑碣、石幢、石磬、造像など、②金石、書、絵、陶器など、③古代帝王陵寢、先賢祠墓、④古廟名人壁画、彫刻の優れたもの、⑤非陵

寝祠墓の古跡、が掲げてある。

これは中国で最初の保存制度である。新聞もこのことを報道している。⁽⁴⁾

関野が調査した山東省は民政部の要求に応じ、一九一〇年に『山東省保存古跡表』を刊行した。そのうち、各県が申告した古物古跡は、

歴代陵寢祠墓之属 千四百十二

名人遺跡 八百七十二

金石美術 二千四百九十六

その他古城邑器物 六百七十二

また、民政部だけではなく、学部（日本の文部省に相当する機構）は図書館の創立にも力を注いだ。図書館内に、金石保存所を設立することが奏議された。『山東巡撫袁樹勳奏東省創設圖書館併付設金石保存所折』⁽⁵⁾には「山東金石研究所を設立し、本省の新しい出土品と古い優秀な本を広く集め、山東の古い文明を表彰する」と謳^{うた}われている。

関野はちょうどその直前に（一九〇七—一九〇八年）山東に訪れている。一九〇六年、関野は西安踏査を行った際、瓦を大量に拾っていた。つづく一九〇七年、山東省調査の時、このようなことがあ

った。民家から後漢時代の画像石を買った。するとこのことが知県（地方官吏）の耳に入って、貴重な国宝なので、外国に持ち出すのは遺憾というので、売主を呼び出し、厳重に取り戻し方を命令した。しかし、関野は日本の帝国大学において、学術上貴重品の標本として永久に保存する考えであるということを懇々と説明したら、知県も終に不承不承諾した、という^⑦。結局、「此五十貫目もある石を、車に積み、……濟南府に着いてここで石の裏を削って、量目を軽くし、又今一つ漢の画像石を購入し、膠州湾まで汽車で運び、それから船に移して、無事に内地に持ち帰ったのである。」^⑧また、持って帰った画像石が東京帝国大学の卒業式で、天皇行幸の時、珍品として、「天覧」に供せられた。

この一件からも、清末の法律の不備なことが分かる。

民国期に入ると、更に社会状況が複雑になった。一九一八年まで古物、古碑などの盗掘事件がたびたび発覚した^⑨。盗掘の問題だけではなく、科挙の廃止以後、学校を振興する気運が高まった。しかし財力の不足で、「廟を廃止し、学校を振興する」という声が全国に広がった。ために、寺廟の財産を奪う事件が多くなり、寺廟の保存が急務となった。また、各都市に新しい市政建設が始まった。交通の問題を解決するため、道路の開発はますます進んでいった。都市の中の古跡や、城壁を障碍物として取り壊し、煉瓦を住宅や道路に流用するケースが見られた。北京では一九一六年前門の月城を取り

壊し、跡地を道路とした。

このような状況下、民国二年（一九一三）六月二十日「管理寺廟暫行規則」が制定される。これは最初の単項保存規則である^⑩。

この規則は当時寺廟の財産を奪う事件を防ぐために作られた「暫行」的なものである。全部で七カ条あり、中心的な内容は、寺院の財産はその住持により管理される、住持と寺院の関係者は寺院の財産を任意に処分することができない、また寺院の財産を奪うことはできない、というものである。

民国四年（一九一五）十月二十九日に、大統領の名義で正式に「管理寺廟条例」が公布された。この条例は、総綱、寺廟財産、寺廟僧道、寺廟注冊、罰則の五章からなる。合計三十一カ条で、寺院の境界、寺院の登録、及び処罰などを詳しく規定した。「管理寺廟暫行規則」より進歩した。この条例に基づいて、民国十年（一九二二）五月二十日に「修正管理寺廟条例」が作られた。

寺廟保存は中国の本格的な建築保存の第一歩と考えられる。このような状況は中国だけではなく、日本も朝鮮も同じである。一八九七年日本の「古社寺保存法」、一九一一年朝鮮の「寺刹令」の誕生は、東アジアにある宗教遺跡が危機に瀕していたことを証する。

ついで民国五年（一九一六）内務部は『保護古物暫行弁法』の五カ条を制定した^⑪。

一九〇九年の『保存古物推广弁法折』と比べると、『保護古物暫

行弁法』は陵寢（陵墓）以外の建築遺跡の保存を強調している。第②条に「古代城廓、関塞、壁壘、岩洞、楼觀、祠宇、台榭、亭塔、堤堰、橋梁、湖池、井泉など、名人遺跡に所屬するものをすべて保存すべき……」旨の規定が見られる。

具体的な破壊についても対応措置が取られた。民国五年（一九一六）『字林西報』は龍門の仏像が兵士に破壊されたと報道した。内務部は河南省民政長に命令し、破壊行為を止めさせる。一方、龍門の仏像を調査し、一つ一つ登録し、また、付近の廟僧に管理させた。同時に「保守龍門山石仏規條」を作った。⁽⁸⁾また外国の事例も紹介した。⁽⁹⁾

しかし、現実的には、先に引用した関野の指摘にもみられるように、清末民初の中国では古物流失が大きな問題となっていた。龍門などの古跡が世界に紹介され、それまで売り物にもならなかった仏頭などが商品となった。古物流失は世界の美術市場と連動し、保存の問題が緊急となった。国際社会も関心を寄せた。一九〇八年アメリカの亜洲文芸会書記マコーミック（馬克密、原綴不詳）は北京に中国古物保存会を作り、中国の古物保存を提唱した。この提唱は各国の公使、職員、欧米学者の賛同を得て、会員は三百人を数えた。その中には日本公使も入っている。彼らの活動は中国の保存政策を刺激した。⁽¹⁰⁾

（三）関野貞による中国遺跡保存策

日本人の関野貞も中国の保存状況を調査し、保存策を提案した。彼は陵墓、木造建築、石造建築、石窟、石碑、石仏、石獅、銅仏、銅鐘の破壊状況を挙げて、東洋文化の中心的地位をしめる中国の文化遺跡が年々自然破壊と人為破壊の犠牲となっている様を指摘した。もし保護しなければ、このような重要遺産は急速に失われていく。東洋建築の源流を見つけることも不可能になると警告した。最後に、建築保存について六項の提言を提出した。

一、日本当局者・学士院若しくは我が權威ある学会より支那当局者に古跡の保存に関する提議をなすこと。……

二、現在北京に旧清国皇室の御物を陳列せる文華殿武英殿の如きあり、濟南府や南京に形ばかりの古物保存所はあるも、是等は極めて不完全の者なれば重なる都市に博物館若しくは古物保存所を設けて、遺物の散逸を防止する策を立てしむること。

三、なるべく我が權威ある学界若しくは此方面に興味を有する我が学者は、支那の好古の学者と提携して古物保存に尽力すること。

四、古跡の破壊し古物の猶散逸せざる中に、我が学者は速かに支那に往き充分の調査を為し、且つ其の結果を報告するこ

と。これには無論国家的・団体的若しくは個人的補助の必要はあるであらう。

五、我が国の博物館になるべく速かに、なるべく多く、支那各時代の遺物を蒐集すること。此点に就ては我が帝室博物館は地勢上最も便宜の地にありながら、欧米の博物館に対し大いに遜色あるは遺憾の至りである。……

六、富豪若しくは有志の士は古物の蒐集に尽力し、なるべくは之を個人の楽しみとせず、之を公衆に縦覧せしめ、或は欧米の美風に倣ひ、之を博物館・大学若しくは公共の団体に寄贈すること。⁽⁸⁵⁾

この提言には、二つの意味が含まれている。一つは日本文化のルーツとしての中国文化への愛着である。もう一つは近代中国への軽蔑である。一番目について、関野は次のような見解を示している。

古来常に東洋文化の中心として世界の一角を其勢力範囲に置いて来たのであるから、其研究は特に我等東洋人にとって必要であるのみならず、欧米人にあつても大切であると言わなければならぬ。⁽⁸⁶⁾

と。また、もし中国建築を保存しなければ、「東洋文化の淵源終

に尋ねるに由なきに立ち至るであらう」ともいつている。

二番目については、

現今西洋の文化と対立すべき特殊の文化を有する者は実に我が大日本帝国である。⁽⁸⁷⁾

この二点とも日本文化を強調することと矛盾していない。つまり古代中国と近代中国を切り離し、その古代中国の本当の継承者は実は「わが大日本帝国」であることを示している。中国の研究者劉建輝は「中国を否定しながらも自分を正当化するという一石二鳥」の傾向が当時の日本人に見られることを指摘している。

その結果として、一九一八年の調査は保存措置策定を目的とする調査ではなく、あくまで研究のための調査であった。この提案は直接、中国側に働きかけるものではなく、もっぱら日本側に向けられているので、当時の中国側に直接的な影響を与えた様子は見当たらない。しかし、日本の研究には影響を与えている。一九四一年、興亜宗教協会により編纂された『河北省山東省における重要古跡古物』⁽⁸⁸⁾は関野の調査資料などを参考とし、保存を要する物件のリストを作成している。また、古物の収集では、一九二七年、関野は発見した天龍山の仏首四十五個を日本に将来した。他日、中国において安全の保障ができたとき、現地に返還して貰いたいと希望して

いた。⁽⁹¹⁾しかし、関野の動機はともあれ、この提案はその本質において日本と欧米が競合して中国の宝物を自分のものにすることを正当化するものであった。実際当時、欧米の収蔵家もまた決して自分たちに中国の宝物を掠奪する意図があったなどとは認めなかったであろう。

一方、清末民初の中国における保存制度が如何に不備であったかも窺える。文物の流失の重要な原因はここにあった。関野の指摘は中国側にも教訓となるべきものであった。

五 焼失した中国陵墓研究の復原

中国陵墓に関する研究は関野の中国研究中一番力を入れた分野と言える。しかし、空襲により焼失し、永遠に失なわれた。この研究がどのように行われたか、どのような内容であったのか。残されたわずかな資料から復原作業を行ってみる。

(一) 西安城へ——陵墓の踏査

幕末・明治期において、日本の古墳研究については蒲生君平（一七六八—一八一三）が『山陵志』を著し、日本考古学史上に輝かしい足跡を残している。また明治二十九年（一八九六）には、八木柴三郎が『日本の古墳時代』で古墳時代の編年を行っている。しかしながら、天皇陵は宮内庁が管轄し、厳しく管理されており、日本の

古墳、特に天皇陵の調査・研究は極めて困難な状況にあった。⁽⁹²⁾そこで、日本の古墳と韓国・中国との関連性が注目され、一九〇二年、関野の韓国調査には陵墓が含まれ、続く中国の調査において陵墓調査が行われたのは必然的なことであろう。ちなみに、一九〇九年の朝鮮楽浪郡漢代遺跡の発見は中国と朝鮮文化とを結び付ける契機となっている。

中国陵墓調査の重要性について、一九〇八年、彼は「支那の陵墓」で、以下のように述べている。

余は一昨年及び昨年の両回、各三四ヶ月間清国内地を旅行し、多少史的遺跡に就き研究する所ありしが、中に就き陵墓の制度は漢民族文化の性質及び変遷、他の国民との関係等に於て資する所極めて多かるべしと考ふるにより、見聞せし所を集録して識者の教を乞はんと欲す。⁽⁹³⁾

陵墓の研究への注目のさまが知られるが、ではなぜ、陵墓に注目したのだろうか。この点については、陵墓の文化遺産としての価値とともに、建築より資料が豊富であった点があげられよう。「支那文化の遺跡とその保存」では、次のように述べている。

現今西洋の文化と対立すべき特殊の文化を有する者は実に我

が大日本帝国である。而るに我が国の文化は古来支那に負ふ所多大であった。我が国の文化真相を知らんと欲せば先づ支那の文化を研究せねばならぬ。支那は周漢時代に於て早くも開明の域に達し、其後仏教の輸入に伴ひ、印度や波斯の思想や芸術を輸入して之を支那化し、六朝・隋・唐の燦然たる文化を作り出した。宋・元・明・清亦それぞれ其時代の思想や趣味を發揮して、それを朝鮮や日本や安南・暹羅・緬甸等の諸國へ輸出して、大いにそれ等の諸國の文化の發展を助けた。……（中略）

然らば此時代文化の証据となるべき実物が果たして満足に遺存しているかと言ふに決して然らず、惜しいことには其大部分は自然的に人為的に破壊されて既に敗滅に帰し、其僅かに残っている者は多く石か銅でこしらへた者である。此石や銅で作った者は、自然の破壊力に抵抗する力もあるし、格別保護を加へず捨て置ても、割合に保存されてゆく性質を持っている。支那で金石と併称するのは是等の遺物を指すのである。此外に最も多く資料を保存しているのは陵墓である。支那では周漢以来厚葬の風盛んに、貴重物品を埋葬する風があったから、此地下の富は極めて豊富である。実に支那の古物は地上よりは寧ろ地下に多く保存されていると言っても差支ない程である。⁽⁹⁴⁾

第一回目中国調査は彫刻以外に、陵墓も重要な内容である。陝西

には多く陵墓が分布している。河南で北宋の陵墓は鞏県の付近に太祖、太宗、神宗、定宗、仁宗、英宗の陵墓がある。「八陵」と称されている。交通と宿泊の不便のため、関野はそのうち、太祖の永昌陵と太宗の永熙陵の二カ所を訪れた。⁽⁹⁵⁾

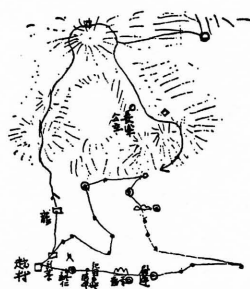
ところで、この調査旅行は岡倉天心の第二回中国調査とほぼ同時期、同路線であった。前述したように、一九〇六年関野の河南龍門の調査目的は彫刻であるが、そこで龍門石窟発見者の岡倉天心とは会えなかった。岡倉天心は明治三十九年（一九〇六）十月八日から四十年一月九日の日記によれば、十一月七日、洛陽の知県徐仁麟から、塚本、平子などが龍門に在り、関野と辻岡某（通訳）と共に洛陽から去って十日過ぎ、西安に赴いたと伝えられた。その後、岡倉天心は西安に至り、十二月三日になって漸く関野と会うことができた。⁽⁹⁶⁾

当時、西安にはかなりの数の日本人が滞在しており、その数は、二十八人にのぼった。その中には、お雇い鉄道技師・老田太文、阿部正二郎⁽⁹⁷⁾、教習の足立喜六⁽⁹⁸⁾、佐藤彌市（鉱務局）ら⁽⁹⁹⁾がいた。こうした状況もあり、日本人の情報はすぐに伝わった可能性がある。

岡倉天心と関野貞の密接な関係は東京美術学校時代以来のものであって、そのため関野の仏教美術の研究は岡倉とも直接に関係していると考えられる。

しかし関野の西安の調査の重点は陵墓と都市である。岡倉天心の

九曜山唐昭陵



唐陵寺 (三十三) 唐石幢あり
塔連し

↑
唐陽街

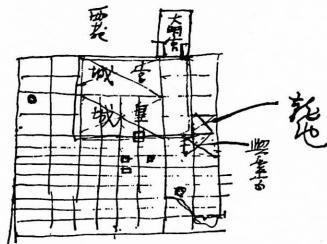


図6 岡倉天心の日記に閔野が残した下描き図
〔岡倉天心全集 5〕より

日記には、「閔野氏示ス所」と書いた閔野のメモが残されており、長安城と陵墓が示されている(図6)。ここからも、閔野の関心が都市と陵墓にあったことが証明できるであろう。

陝西で見たのは周の文王陵、武王陵、成王陵、康王陵、秦始皇帝陵、漢惠帝安陵、景帝陽陵、元帝渭陵、唐の太宗昭陵、高宗乾陵、德宗崇陵。そして、多くの瓦を標本として拾い、東京に持ち帰った。

閔野の影響かもしれないが、岡倉天心も閔野による紹介以後、陵墓を訪れている。当時各分野の研究者は相互に影響を及ぼしており、これは研究の推進に重要だったと論者は考えている。

(二) 周墓と漢墓の調査

第一回調査と同じく、山東調査のもう一つの目的は陵墓の調査の

継続にあったであろう。

山東省で彼は周の孔子墓(曲阜)、伯魚墓(曲阜)、子思墓(曲阜)、孟子墓(鄒県)、漢の魯孝王墓石人(曲阜)、武氏祠(嘉祥)、孝堂山石室(肥城県)、後梁の王彦章墓を調査した。前回の帝王の陵墓に対して、今度は哲人や貴族のものである。

この二回の調査にもとづき、閔野は一九〇八年五月『歴史地理』に「支那の陵墓」を発表した。また同年八月五日、『文芸週報』に「後漢の画像石」、「国華」に一九〇九年二月から「後漢の石廟及び画像石」を発表した。これらの文章はフィールドワークによる陵墓史の嚆矢である。その中で、陵墓の歴史記録、実際の形式、附属建築の配置などが時代順に考察されている。特に画像石について、孝堂山石室の場合は、「内部の壁全体には、日月星辰、樓閣人物車馬鳥獸等の彫刻がある。」、武氏祠の画像石の内容は「三皇五帝を始めとし、忠臣義士、孝子節婦等歴史上の事績や、樓閣、車馬、鳥獸龍魚の類」と記述した。

そして、彫刻の手法について、「彫刻の手法は三種ほどある。即ち一は孝堂山式の陰刻、一は武氏祠の陽刻、一は晋陽山式。晋陽山式と云ふのは、古代埃及の彫刻のやうに、輪廓を深く彫って、画像の全体に円味をつけ、面貌とか、衣文とか、細かな部分を更らに浅く彫りあらはすので、つまり陽刻と陰刻とを折衷したもので、画像以外の部分はあらく豎に鑿目を遺して居る。」と書いた。しかし、

その手法から漢代における外国との交流の有無についてははっきり特定しなかった。画像石の特徴については、「現今清国に遺れる総ての画像石の中で、最も古い者である。画題は前に話した通り、歴史上の事績や、楼閣、人物、車馬、其他種々の動植物で、特に歌舞讌飲の処や、遊獵嬉戯の処が多い。之を見れば、其当時の風俗習慣等を知ることが出来ると同時に、技術発達の程度をも知ることが出来る。」と述べ、画像石の歴史的価値を強調した。そして「此等の画像石の支那に存在せしとは、我國の学者間に早く知られて居る……」と注記を加えている。

南北朝以後、画像石はなくなって、彫刻は仏像が中心になった。彼が同時期に調査した北魏、隋、唐の仏像彫刻と比較すると、画像石は全く違うタイプのものである。だが、画像石は中国の彫刻史を研究するには欠くことができない。関野が陵墓というテーマを選んだのは、実に様式問題と離せない。また、それと同時に、中国陵墓の研究は、調査している朝鮮の陵墓、あるいは翌年に発見することとなる朝鮮の楽浪漢代古墳の研究に繋がってゆく。様式の相互影響から文化の流れを考察するのが関野の狙いではないかと考えられる。

(三) 東方文化学院時代の課題

1. 一九二〇—三〇年代日本における中国の文化政策と中国の学術研究概況

関野貞は一九一八年、中国から離れ、朝鮮、日本における研究と東京帝国大学の東洋建築教育に力を注いだ。一九二四年『東京帝国大学工学部講義要目』を見ると、関野は「東洋建築史」内の「朝鮮建築史」及び「工芸史」を担当した。翌年の一九二五年「支那建築史」、「朝鮮建築史」、「社寺建築」、「工芸史」を担当した。一九三〇年退官、藤島玄治郎（ふじしまがじろう）（一八九九—二〇〇二）が「建築史」を引き継いで教えた。退官後、中国調査が再開された。この間に日本の中国に対する政策は変わっていた。

日本外務省文化事業部の『対支文化事業ノ概要』（一九二七年）によると、次のように「対支文化事業局」の事業を解説している。

大正十二年五月五日対支文化事業局官制公布セラレ亜細亜局長ヲ以テ局長ニ充テ外務大臣管理ノ下ニ対支文化事業ニ関スル事務ヲ掌ルコトナリタルカ大正十三年ノ行政整理ニ際シ本事務機関モ幾分之ヲ縮小スルコトナリ同年十二月二十日外務省官制ヲ改正シ亜細亜局内ニ文化事業部（支那側ニ於テハ「対支」ナル冠詞ヲ好マサルニ付改制ヲ機会ニ之ヲ省クコトシタリ）ヲ設ケ引続キ本事業ニ関スル事務ヲ掌理スルコトナリタリ然ルニ亜細亜局ノ一部タルコトハ支那人ヲシテ種種ノ誤解ヲ抱カシメ之カ為事業遂行上尠カラサル支障アリ且事業ノ進展ニ伴ヒ現業的傾向次第ニ増加シ来リタルヲ以テ昭和二年六月二十二日再ヒ

官制改正セラレ文化事業部ヲ省内ノ独立セル一部トナシ部長ハ外務部内ノ高等官ヲ以テ之ニ充ツルコトナリタルカ同時ニ分課規定ヲ改メ文化事業部ニ第一課及第二課ヲ置き第一課ニ於テハ対支文化事業実施ニ関スル事務、第二課ニ於テハ庶務ヲ掌ルコトトシタリ^(四)

そして、東亜考古学会（一九二六年）、東方文化学院（一九二九年）が成立する。東亜考古学会が都市と建築遺跡の考古を中心として研究する学会であるとすれば、東洋学の全域的かつ組織的な研究は東方文化学院の創立をまつて着手されたといえるであろう。東方文化学院は東亜考古学会と同じく外務省文化事業部の後援によって、東京と京都に設置された。文化事業部の資金は義和団の賠償金及び山東関係の鉄道及公有財産補償国庫証券の元利、山東関係の鉾山の賠償金で構成されていた。東亜考古学会の主なメンバーは東方文化学院にも参画した。

一九二八年十月四日、東京・京都両帝国大学その他の東方文化研究者三十余名が発起人となり、東方文化学院創立を議した。一九二九年四月学院の事業を開始した。

同月、関野貞が東方文化学院東京研究所の研究員に就任した。東方文化学院の成立により日本の中国研究は更に一歩進んだと言える。資金問題を解決し、助手も付ける。物質面だけではなく、更に各分

野の優秀な研究者が集まり、いわば、学際的な環境を備えた。こうして当時中国の研究が急速に進んだ。日本政府は英国、米国の後を追いかけて、中国の賠償金で文化的な面で中国へ進出することを図った。

一方、中国側の様子を見てみよう。

関野が再度中国に赴くのは一九三〇年のことだが、社会状況には前回（一九一八年）と比較すると大きな変化が見られた。北伐以後、国民政府が南京で成立、統一国家として、各方面の制度も整備された。南京、上海を筆頭にして各都市では建設が進んだ。学術研究方面でも大きな進歩が見られた。科学用語を統一するため、訳名委員会が設立された。これまで外国人の中国視察は、無監督のまま行われたため、古物の外国流出が続いてきた。この問題について、教育部は中央研究院と相談し、中国研究者の随行、税関での検査強化などにより、古物の海外流出を防ごうとした。その間、様々な研究団体が創立された。教育部編『第一次中国教育年鑑』^(五)によれば、一九二七年以後に成立した研究機関は四十五カ所にのぼる。

そのうち、古物保護に関わっているのは考古学、建築学、歴史学など。一九一八年の時点で北平古物陳列所（一九一四年設立）、南京古物保存所（一九一五年設立）、濟南古物陳列所があった。さらに一九三一年の時点では、国立中央研究院歴史語言研究所（一九二七年設立）、中央古物保管委員会（一九二七年設立）、国立北平研究院史

学研究会（一九二九年設立）、古物保存委員会北平分会（一九二八年設立）、中国营造学社（一九三〇年設立）が加えられる。一九二七年—一九三七年は中国近代において學術調査が最も繁栄していた十年と言えるであろう。北京（＝北平）は長い歴史を誇り、清末、北洋政府時代以来の基礎があり、大学も多いので、研究と保存の重鎮となった。

関野が中国を訪れた一九三〇年現在、中国は保存研究の盛期を迎えていた。初めての法律『古物保存法』が一九三〇年六月七日、国民政府により公布された。『古物保存法施行細則』が一九三一年七月三日、行政院により公布された。一九三〇年三月—一九三一年十二月、北平の寺院調査が完成する。調査した廟宇は八百八十二カ所、平面図七百余枚、写真は二千余枚、拓本は一千二百余点、記録は八百余件にのぼり、民国初期と比べると大きな進歩が見られた。このような社会状況の下で関野は新たな中国研究を展開した。

2. 「支那歴代帝王陵研究」

東方文化学院における関野貞の最初の研究テーマは「支那歴代帝王陵研究」である。それは明治、大正時代の研究の継続である（付図3、付録3）。

東方文化学院時代の前の調査は周、秦、漢、唐、宋の陵墓、それから東北の清陵に着目していたが、東方文化学院時代には、対象と

なる時代範囲は大きく広がり、調査についてもより詳細なものとなった。

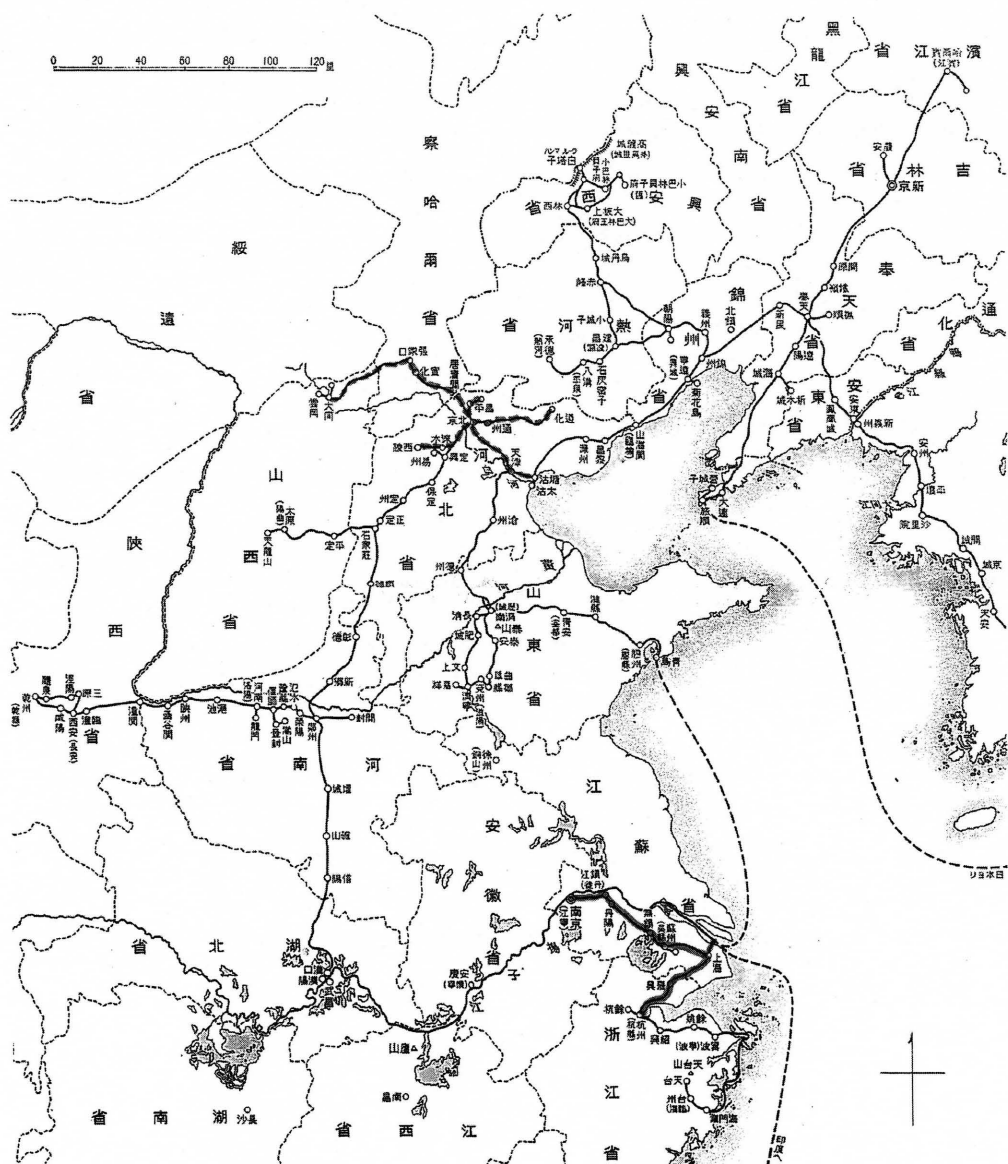
第五回中国調査は本格的に陵墓をテーマにした調査である。関野は助手竹島卓一（二九〇—一九九二）と共に、一九三〇年五月に一カ月ほど、中国南方の陵墓の調査に出かけている。同年、建築史家の伊東忠太は同じ東方文化学院の研究員として、山西大同へ雲崗石窟の再調査に出かけた。

関野貞は南京（五月五日—十日、十四日）、句容（五月十二日）、丹陽（五月十八日）、蘇州（五月二十一—二十四日）、杭州（五月二十七日）へ出かけた。調査対象は南京の明墓、句容の梁墓、蘇州の呉越王墓と墓地周辺の獅子、石碑、石闕（せきけつ）などであった。

翌年、昭和六年（一九三一）五月十三日から七月十五日まで、約二カ月余をかけて北京周辺に現存している明十三陵、清東西陵を調査した。第六回目の中国調査が行われた。もともとこの調査で河南省の後漢、北魏時代の陵も調査する予定だったが、国民政府からは、匪賊が多く危険であるという理由で護照の発行が得られなかった（^⑧）。

陵墓問題も寺廟と同じく保存の焦点となる問題であった。清末から民国へと、制度も変更され、旧清朝皇室の財産が危機に瀕していた。

例えば、清朝の時、皇室の陵墓の保管のためには、内務府、八旗、綠營、礼部、工部から各一名を派遣し陵墓に駐在させた。だが、清



付図3 五〜六回目（1930—31年）の調査（『支那の建築と芸術』、調査帖などにより作成）
 （——は第五回目調査線路（1930）；-----は第六回目調査線路（1931））

朝崩壊以後その制度は廃止された。陵墓は荒廃するままに放置された。

一九二八年、北京政権を握った張作霖が、北伐軍の進撃に屈して、北京から撤退し奉天に引き上げ、その所属の軍隊もまたそれぞれ撤退して、関外に退いた。

八月上旬、数千名におよぶ匪軍は爆弾で東陵の西太后の寝宮（陵墓に棺を置く地下室）を開き、宝物を盗んだ。

翌一九二九年、河北省政府は東陵陵寝古跡保管委員会を設立した。民政庁、実業庁、県政府、林務局及び清室の後嗣各一名を委員とする。護陵警の二十人を組織し、陵墓を守る。易県の

付録3 関野貞の中国調査詳細表（1930—1931）（凡例は付録1を参照）

回数	期間	調査地内訳	目的	備考
第五回目	昭和5年5月 (昭和5年3月31日東京帝国大学嘱託、 東方文化学院)	南京：5.5南京購得拓本・5.6大鏡亭大鏡・5.7明中山王徐達墓、中山王墓、蕭景墓、忠武王蕭愴墓、梁安成康王・5.8棲霞山、棲霞寺石仏嶺・5.10宋文帝長寧陵『江寧府志』、梁臨川靖惠王蕭宏墓 句容：5.12梁南康簡王蕭績墓 南京：5.14侯村石闕及石獅一對、宋樹村石闕、梁蕭正立墓、石馬村石獅、梁朝陵墓及び『大清一統志』、『江寧府志』 丹陽：(?)客舍簡図・5.18丹陽中和鐘、丹陽公園内古物、劉宋太祖文皇帝陵 蘇州：5.21開元寺無梁殿、蘇州孔子廟、瑞光寺七重磚塔・5.22吳越王墓・5.23保聖寺宋經幢及幢支柱・5.24双塔寺、虎丘、蘇州古跡 杭州：5.27吳越王碑	・南方の陵墓	・調査帖より
第六回目	昭和6年5月13日から7月15日（東方文化学院）	北京：5.20故宫、明惠宗玉冊、歴史博物院・5.21故宫博物院、玉石（武英殿）・5.25北京大学壁画、北魏陵墓（『山西通志』）、北京大学中庭所置黄腸石（洛陽出土）、漢石扉（画像石）、北京大学・5.26仏宮寺（『応県統志』）、西太后陵（盗掘後実際に調査した徐鴻宝氏談話）・5.27太和殿、文華殿、武英殿・5.28先農壇、祈年殿、玉石 東陵：5.29独楽寺（『薊県独楽寺』より）・5.30定陵・6.1順治孝陵・乾隆裕陵・6.2昭西陵、順治孝陵・6.5独楽寺 北京：6.7十三陵永樂長陵・6.8十三陵嘉宗德陵、世宗永陵、定宗景陵・6.9英宗裕陵、明憲宗茂陵、孝宗泰陵、明武宗康陵・6.10毅宗恩陵、神宗定陵・6.11明光宗慶陵、明仁宗獻陵・6.12東陵・6.13長陵、長陵神功聖德碑（闕鐸氏から資料を受け）・独楽寺（闕鐸氏から資料を受け） 西陵：6.18光緒崇陵・6.19雍正泰陵・6.20道光慕陵、慕東陵、西陵・6.21嘉慶昌陵、昌西陵・6.22雍正泰陵、泰東陵、泰妃陵 山西：6.26大同上華嚴寺大雄宝殿、北魏文明太皇太后陵（『水経注』）・6.27下華嚴寺薄伽教藏・6.28南寺 北平：7.?北平家具廠所用尺度 西陵：7.31道光帝慕陵	・北方の陵墓 ・遼金時代の建築と其仏像	・調査帖より

西陵も同様に西陵陵寝古跡保管委員会を設立した。⁽¹⁸⁾

清陵の盗掘事件は日本にも伝えられ、小林胖生は「東陵発掘の真相」を発表し、被害状況を紹介した。また関野は『国聞週報』や『東陵案』なども読んでいた。⁽¹⁹⁾ しかも、陵墓調査の二十日程前には、太宗の皇后（康熙の母）の昭西陵が盗掘され、中のものが全部盗まれた。

関野は陵墓をテーマにして研究しているので、むしろ、多大な関心を示している。彼の残した調査帖によれば、一九三一年まず北京に着くや、北京故宫、歴史博物院、故宫博物院の武英殿、北京大学などで文献史料を調べた。明惠宗玉冊、『山西通志』の北魏陵墓、などに当り、特に東陵の被害に注目し、五月二十六日に盗掘後実際に調査した徐鴻宝（xu hong-bào）を訪ね、詳細に陵墓中の状況を聞いて、メモした（図7）。三日後の五月二十九日、竹島卓一、荒木清三、写真家岩田秀則と共に東陵に赴いた。一週間で東陵の調査を行った。

当時、東陵陵寝古跡保管委員会の保護活動が

既に始まっており、陵墓を厳しく監視していた。それは一九一八年に関野が中国で見た保存状況とは大きく違っていたであろう。委員会は関野らの調査を「他分日本で陵を造るため参考に見に来たのであらうと考へたらしく、少しも妨害を受けずに到る処誠に気持よく調査いたしました。」と帰国後の関野は語っている。

関野らは河北遵化のホテルに泊まって、毎日実測調査を行った。実測図は百枚以上にのぼり、撮影した写真は乾板ガラスで三十打

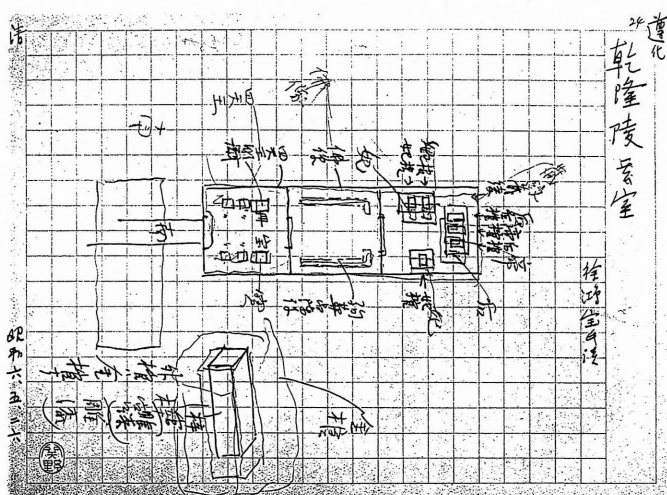
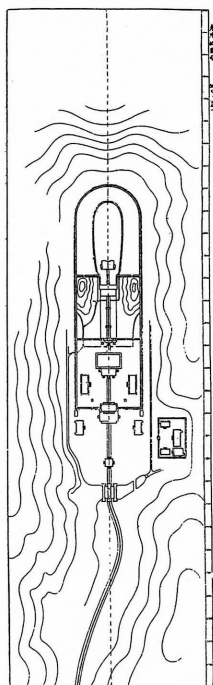
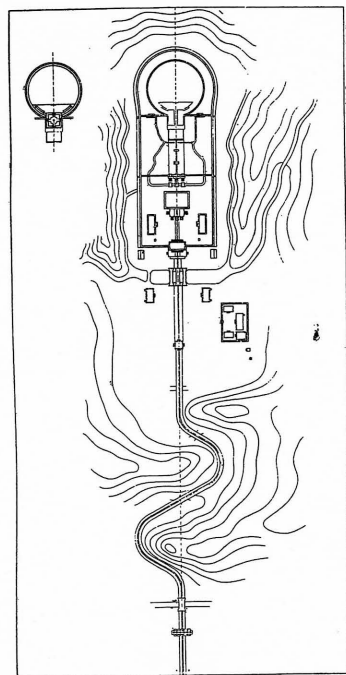


図7 関野が徐鴻宝を訪問した時の記録（東京大学生産技術研究所蔵）



（帝治順）祖聖帝 圖九第
圖置配門殿陵孝



圖置配門殿陵裕（帝隆乾）宗高清 圖十第

図8 東陵実測図2枚（『東亜学』第2号、1940年2月、より）

（三十×十二）となっている。これらの図面が竹島卓一により保存されていたが、一九四五年に彼が所属していた名古屋工専校舎が空襲を受けた時灰燼に帰した。このとき彼の『营造法式の研究』の原稿も失われた。幸い、一九四〇年に彼の「風水説と支那歴代の帝王陵」に二枚東陵の実測図が登載されており、そこから実測図の様子が窺える（図8）。

残った四十枚の調査帖からも当時の調査内容が窺える。例えば、

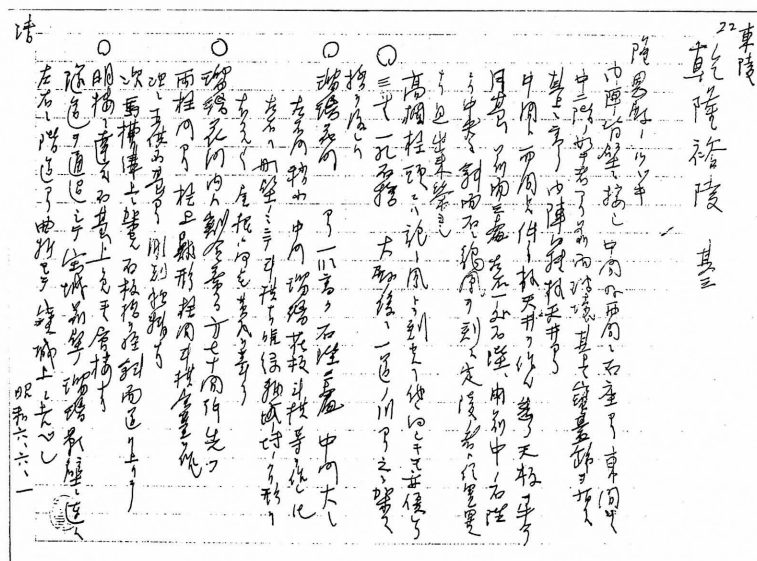


図9 乾陵陵についての記録（東京大学生産技術研究所蔵）

六月一日調査した乾陵（*qian long*）陵について、碑閣の碑文、高さ、亀趺等装飾、石橋、碑閣前の東西にある下馬碑、東西朝房、隆恩殿の配置、瑠璃花門、両柱門、明楼、宝城、宝城外壁など詳しいデータを収集した（図9）。関野一行は六月七日―十三日、明の十三陵を調査した。十八日から清の西陵調査に向かった。本としては出版

されなかったが、調査帖から関野が執筆しようとした内容が推定できる。

この調査により、図版九冊（写真、実測図三百余）、本文七冊（六百字詰め原稿用紙千余枚）に及んだ膨大な研究報告が竹島卓一によって整理され、帝王陵の大型配置図面や建築平面の実測図が製図された。だが出版の運びに至らず、図面は上述のとおり惜しくも戦災で焼失してしまった。

予定成果から見ると、陵墓の調査は関野が一番に力を注いだ研究である。この研究の結果が注目される。現在、関野の調査帖は、当時の調査内容を窺うことができる貴重な資料となっている。論者は調査帖から陵墓の編年順で関野の調査全容の復原作業を行った。表2をご参照いただきたい。

このリストから見ると、関野の調査が各時代の陵墓のほとんどすべてに関わっていたことがわかる。遼の陵墓は鳥居龍蔵が先駆者として調査した以外は、ほぼ関野の先駆調査である。遼の慶陵も一九三四年九月、竹島卓一を同行して、調査した。一九三七年、関野が亡くなった後、竹島卓一はついに撮影を完了し、陵墓研究は一応の完成を見たと言える。

また、陵墓研究の焦点が何であったかを推測してみる。まず第一に、陵墓の形、プランと関係文献史料を考察したのではないかと推測される。これは「支那の陵墓」（二九〇八年）から見てとれる。調

表2 関野貞の中国陵墓調査表（『支那の建築と芸術』、調査帖などにより整理）

朝代	調査内容	調査期間
史前	紹興禹廟及禹墓	1918年調査
周	文王陵、武王陵、成王陵、康王陵、孔子墓、伯魚墓、子思墓、孟子墓	文王陵、武王陵、成王陵、康王陵は1906年調査 孔子墓、伯魚墓、子思墓、孟子墓は1907年調査
秦	秦始皇帝陵	1906年調査
漢	惠帝安陵、景帝陽陵、元帝渭陵、魯孝王墓石人、武氏祠、孝堂山石室、牧城子漢代古墳	惠帝安陵、景帝陽陵、元帝渭陵は1906年調査 魯孝王墓石人、武氏祠、孝堂山石室は1907年調査 牧城子漢代古墳は1932年調査
南朝	梁墓石物、張家庫梁墓石獅、梁蕭侍中神道石柱、忠武王蕭儋墓、梁安成康王墓、梁靖惠王墓、淳化鎮梁建安敏侯蕭正之墓、句容梁南康簡王蕭績墓、句容梁陶宏景墓、梁臨川靖惠王蕭宏墓、侯村石闕及石獅一對、宋樹村石闕、梁蕭正立墓、丹陽吳越王墓、丹陽劉宋太祖文皇帝陵、蕭景墓	梁墓石物、張家庫梁墓石獅は1918年調査 その他は1930年調査
北魏	文明太皇太后陵	1931年史料調査
唐	太宗昭陵、高宗乾陵、德宗崇陵、唐孝敬皇帝恭陵（河南）	太宗昭陵、高宗乾陵、德宗崇陵は1906年調査 唐孝敬皇帝恭陵（河南）は1918年調査
後梁	王彥章墓	1907年調査
宋	東方南陵（太祖陵、永昌陵）、西陵（太宗陵、永熙陵）、太宗皇后陵、南宋孝宗永阜陵	太祖陵、永熙陵は1906、1918年調査 太宗皇后陵、南宋孝宗永阜陵は1918年調査
遼	慶陵、農安遼石棺	農安遼石棺は1932、1935年調査 慶陵は1934年調査
金	金陵（房山）等	1906年調査
明	十三陵（北京、永樂長陵、熹宗德陵、世宗永陵、定宗景陵、英宗裕陵、明憲宗茂陵、孝宗泰陵、明武宗康陵、毅宗恩陵、神宗定陵、明光宗慶陵、明仁宗献陵）、孝陵（南京）、中山王徐達墓	孝陵（南京）1918年調査 その他は1931年調査
清	清太宗昭陵（北陵）、太祖福陵（東陵）、東陵（定陵、順治孝陵、乾隆裕陵、昭西陵、順治孝陵）、西陵（光緒崇陵、雍正泰陵、道光慕陵、慕東陵、西陵、嘉慶昌陵、昌西陵、雍正泰陵、泰東陵、泰妃陵）、紹興会稽山清墓	清太宗昭陵（北陵）、太祖福陵（東陵）、紹興会稽山清墓は1918年調査 その他は1931年調査

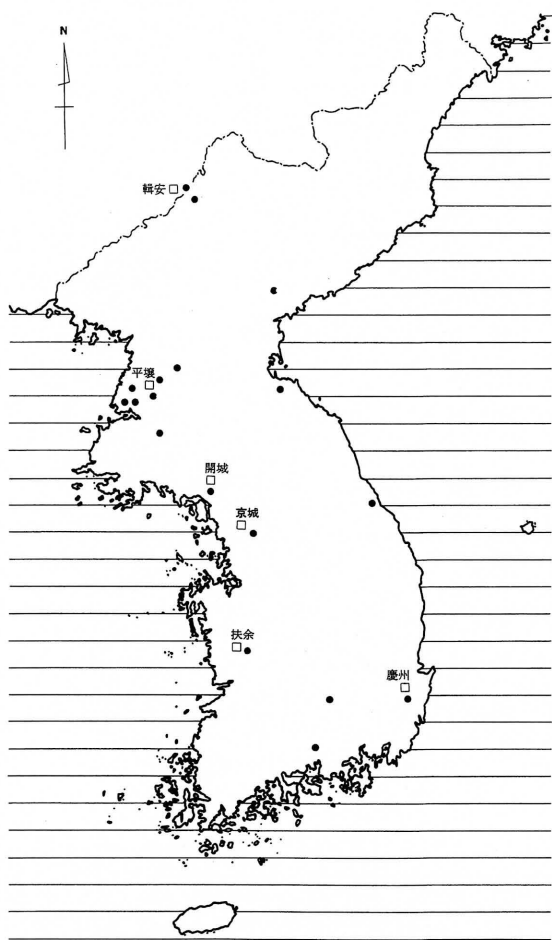


図10 1909年から1915年までの発掘調査地点（内田好昭「日本統治下朝鮮半島における考古学的発掘調査」より）

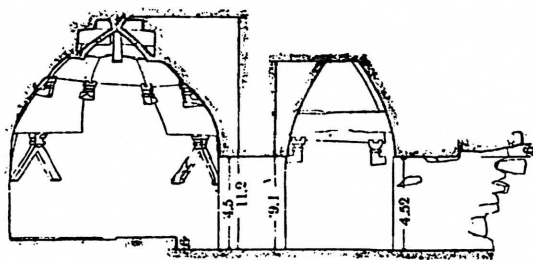


図11 天王地神塚実測図（関野貞「満洲輯安県及び平壤付近に於ける高句麗時代の遺跡（二）」『考古学雑誌』第五巻第四号、1914年）より）

査帖にも細かい記録を残している。第二に、陵墓の装飾文様には特別な興味を抱いていたのではないかと推測される。漢画像石の研究はその証明である。第三に、輯安高句麗陵墓に関する研究では、東アジアの美術、建築文化の相互影響を考察しており、中国各時代の陵墓と朝鮮、日本との関係を考察しようとした可能性を指摘できる。関野貞は近代における中国陵墓研究の先駆者といえるが、現在の視点から見ると、彼の特徴はフィールドワークにある。つまり、陵墓の制度をはじめ、形態を成立させた諸要因については深く言及しておらず、表面的な形態論に止まっていた感がある。

関野は中国の陵墓の調査とやらんで朝鮮の楽浪、高句麗などの陵墓調査に従事した⁽¹⁰⁾。以下、彼の朝鮮の陵墓研究と比較しながら、両者の違いを考察してみよう。

朝鮮の木造建築については高麗時代以前のものが存在しないので関野は石造建築、陵墓に注目した。同様に中国でも遼時代以前の木造建築は当時は発見できなかったもので、石窟や陵墓に注目した。

朝鮮の古墳は早くも一九〇二年から悉皆調査にとりかかったが、これも日本との対比を念頭に置きながら行っていることが次の引用からも見て取れる。

此等墳墓ノ内部ノ構造終ニ調査ノ機ヲ得サリシヲ以テ断言ス
ヘカサルモ或ハ我国ノ古墳ニ於ケルカ如ク石槨石棺等ヲ蔵シ
タリシモノカ更ニ後日ノ調査ヲ待ツ。

朝鮮の古墳調査の進捗状況が分かる報告である。また中国陵墓調査について、関野は「他の国民との関連性」に注目していた。つまり東アジアの墓を総合的に研究し、陵墓を通して、文化の相互影響を解明しようとする姿勢が貫かれている。

しかし、可能な調査深度、調査手段は国によってさまざまだった。加えて陵墓の調査は容易なものではなかった。いうまでもなく発掘調査は関野を含む日本の研究者が望むところであった。中国では満洲及び一九三七年以後の華北、華中地区以外に、一九〇九年以来、陵墓を含め古跡の保存に関する措置が施行されたため、自由な発掘はできなくなった。それに対して、「日韓併合」した朝鮮及び日露戦争後駐留権を得た満洲では、事実上の「植民地状況」を利用して、日本主導により多くの考古学調査が行われた。関野個人も数多く発掘に参加した。

内田好昭の「日本統治下朝鮮半島における考古学的発掘調査」によれば、一九〇九―一五年に、平安南道大同郡大同江面石巖洞所在地の大同江面古墳と慶尚北道慶州郡府内面皇南里南塚及び西岳里石

枕塚をスタートとして、関野は四十件の古墳の発掘（露出、開口を含まず）に参加した（図10）。

その成果には中国の一九〇七年の調査以来、陵墓研究の大きな進歩の跡が認められる。発掘により内部の構造、装飾など詳しい情報を入手し、総合的な研究がなされた。例えば、朝鮮の人字形の墓股は中国の雲崗石窟と、日本の法隆寺を繋げるものだった。このような人字形の墓股は朝鮮の地下の陵墓に見られるが（図11）、地上に残る建築遺構には見当たらないものだった。一九七五年韓国は慶州の雁鴨池（六七四年）を発掘調査し、その後復原したとき、人字形の墓股を利用した。復原の根拠とされたのは出土した墓股であった。

関野の中国の陵墓研究は、朝鮮の発掘調査と対照的である。というのも、中国には歴史史料が豊かで、フィールドワークと共に多くの史料を参照できたからだが、しかし発掘なくしては、実証的裏付けが得られないケースが多い。日中戦争勃発以後、日本の考古学者はますます華北へ進出し、さかんに発掘調査が行われ、日本人主導の「植民地考古学」の性格が顕著になった。

日本による陵墓の研究は中国の陵墓研究を刺激した。中国中央古物保管委员会の陵墓の調査者の朱希祖（Zhu Xi Zu）は『六朝陵墓の調査報告書』の序に次のように書いている。

私は日本の今西龍（二八七五―一九三二）が書いた高麗諸陵

墓調査報告（日本大正五年古跡調査報告）を見た。亡国の痛みを深く感じていた。朝鮮人はその祖先の墳墓を保存せず、野草が生え、無視している。結局、国は滅ぼされた。他人がその国を支え、逆に大事にして、国から貴重な経費を捻出させ、学者が集まり、悉皆調査を行い、巨著をなし、世界に貢献する。

朱希祖の六朝陵墓調査は、一九三四—三五年に閔野が六朝陵墓調査を行った後に実施された。しかし、閔野の調査報告が発表されなかったため、朱は閔野の調査を参考にすることはできなかった。

六 究極的な建築様式の視点 ——中国の最も古い木造建築の追跡

（一）独楽寺の発見

一九三一年六月、閔野は東陵の視察途中で偶然に独楽寺を発見、中国で当時現存する最も古い建築と判断した。当時、発見の状況について閔野は次のように述べている。

昨昭和六年五月二十九日余は工学士竹島卓一氏と共に、北平在住の建築家荒木清三氏同道の下に写真師岩田秀則氏を同伴し、自動車を駆りて東陵（清の順治・康熙・乾隆・咸豊（*Xian Feng*）・同治諸帝の陵在る所）に往く途次、薊県の城内を過ぎし

時、偶ま路の左方磚牆を隔てて単層門の立てるを見た。余は一瞥其古建築物たることを知り、自動車を停め、旁の小門より入れば先づ単層四柱の山門に「独楽寺」と題する額を掲げ、門内左右に金剛力士が対立している。次に重層の大建築、観音閣が巍然として聳え、其内に高さ五十余尺の十一面観音の立像が安置されていた。建築の様式は明らかに遼時代の者たることを語り、其彫刻亦建築と同時のものたることを知り、図らずも支那現存最古の木造建築たる遼時代の遺構を発見せしことを喜んだ。

しかしなぜ、閔野は独楽寺を遼代（九一六—一二二五）の建築と判断したのだろうか。

実際、閔野貞らはこれまでも多くの日本の建築を調査し、中国建築と対照して研究をすすめていた。彼らは独楽寺を見ると、「日本の鳳凰堂と大体年代が似ておらうかと思ひます」と推測し、また、「我が宇治の平等院鳳凰堂を見るが如き極めて雄大なる木割を備へ、繊弱なる明清の建築とは凡そ懸絶した様式のものであった。閔野研究員は一見直ちに其遼代の遺構たるべきことを断言せられたのは蓋し卓見として敬服措く能はざる所である」と、竹島卓一が述べている。

早くも一八九六年に閔野は「鳳凰堂建築説」を書いていて、そこでは、鳳凰堂（一〇五三年）の沿革、建物の配置、平面、立面、勾

欄、斗組、虹梁及び臺股、鬚さらには構架法、軒廻り及び屋根、妻飾り、内外装飾などを綿密に論述していた。関野の後の分類から見ると、鳳凰堂は「和様」に所属し、「唐様」(禪宗様、南宋以後導入)の影響を受けておらず、寧楽式から発展してきた様式であるとされていた。つまり、鳳凰堂を独楽寺と同じ南宋の影響を受ける前の様式と推測した。

なお、独楽寺の「初重は二手先の斗拱を用ひ、周圍に勾欄を繞らしているが、一種雷文形欄子^{れんじ}を容れたるは、其手法我法隆寺金堂・五重塔及び東大寺法華堂仏壇の勾欄を想起せしめる。」⁽⁹⁾法隆寺金堂なども当然南宋よりずっと前の様式であり、独楽寺と同時代とは言わないが、日本の「唐様」を基準にして、独楽寺の様式から年代が見て取れる。これは彫刻において推古式と寧楽式の区別判断をした場合と全く同じ方法である。

なぜ関野は独楽寺を遼の建築であり、北宋の建築ではないと判断したのだろうか。考えてみると、地理的な場所からみても、北平は遼の五京の一つ南京であり、北平付近の薊県も遼の領土となっていた。こうした地理的条件からも遼建築の可能性を考えたのではないかと推察される。

この様な総合的な判断には豊富な知識が欠かせない。関野は日本でも著名な年代判定家である。関野は奈良での五年間におよぶ修理経験を経て、その「様式に対する炯眼はまさに驚異というべき」⁽¹⁰⁾も

のであったという。そのなかでもこの独楽寺の判断は重要な意味を持っている。もしこの判断が正確ならば、これは中国で現存している最も古い木造建築となるからである。これは彼が一九一八年初祖庵を発見して以来の、新発見である。

当時、関野はこの発見に相当の衝撃を受けたらしく、東陵から北京に戻る途中、六月五日再び独楽寺を調査した。東陵調査のために用意した写真原板三十打^イを全部使ってしまったため、東陵の馬蘭峪にある写真館と交渉し、一打^イを得た。半打は東陵のため、もう半打^イは独楽寺のために使った。竹島は実測を担当したが、短時日に、しかも少人数の状況下では、満足のいく実測も出来なかったに違いない。

(二) 大同華嚴寺との比較

独楽寺を遼時代の作例と判断した時、関野の脳裏には、より日本建築に近い遺構として、大同華嚴寺のことが点滅していたはずである。実際、関野の遼建築研究の最初の焦点は、大同華嚴寺の建設年代問題であった。それは中国に現存する最古の建築の決定と関係し、建築様式の編年とも関係していた。しかし、日本の中国建築調査の歩みを考察すると、大同華嚴寺よりさらに早く、伊東忠太により発見された遼時代建築がある。

明治三十五年(一九〇二)伊東忠太は山西省応県仏宮寺の八角塔

を訪れている。これが当時、中国で発見されていた最も古い木造建築で、遼の清寧二年（一〇五六）に建立との記録がある。伊東忠太は仏宮寺の八角塔を見て日本の薬師寺東塔（七三〇）を連想した。その連想の契機は様式の類似性である。

伊東忠太は一九〇二年、大同華嚴寺の調査も行ったが、年代の判断はしていない。関野は一九一八年、中国の古物古跡保存制度を調査した時、「余の見た木造建築で最も古い性格の者は河南省登封県少林寺の初祖庵で、宋の宣和七年（西紀一二二五）の再建である」と述べている。彼は山西省応県仏宮寺へ行ったことがないため、自分が見たうちで一番古いのは、初祖庵だと語った。当然、全体的に見ると、応県仏宮寺が当時発見されていた一番古いものである。果して大同華嚴寺は仏宮寺の八角塔より古いかが問題となる。

一九二四年関野は『遼史』（巻四一「地理志」）の「清寧八年（西紀一〇六二）建華嚴寺。奉安諸帝石像銅像」との記載を確認する。さらに一九二六年『大同府志』の『祠祀』から「遼清寧八年建寺、奉安諸帝銅石像者也」との記述を見つけた。しかし、一〇六二年は必ずしも寺の創立をいうのではなく、石像銅像の設置年代ではないか、と関野は考えていた。この疑いが生じたのは同じ『大同府志』に、下華嚴寺薄伽教藏が遼重熙七年（一〇三八）に建立されたとの記録があるためである。注意すべき点は、華嚴寺（大華嚴寺とも称える）が上華嚴寺と下華嚴寺により構成されていることで、そのた

め、それぞれを区別した年代判断が必要となる。

一九三一年六月に独楽寺を発見するや、関野は年代問題への対応を再び迫られた。独楽寺と大同華嚴寺とではどちらが早いのか。

一九三一年六月二十六日以後、関野は再び華嚴寺を訪れた。二十七日、驚くべき発見があった。下華嚴寺の薄伽教藏天井の梁下に墨銘を発見、遼重熙七年（一〇三八）の建物と確認できたのである。つまり、仏宮寺の八角塔より早いものだった。当時の調査帖が保存されている（図12）。

「中間ノ右ノ梁下墨銘

維重熙七年歲次戊寅玖月甲午朔拾五日戊申午時建

左ノ梁下銘

（略）

日本の法隆寺の再建・非再建議論と同じく、当時中国で現存している最も古い木造建築についても議論があった。一九三三年村田治郎は「支那山西省大同の大華嚴寺」を発表、薄伽教藏が清寧八年（一〇六二）に建てられたと判断した。村田治郎は後に中国の宗教建築史に大きな貢献をした人物である。薄伽教藏の問題について、結局、関野は発見した墨銘を有力な根拠にして村田に反論した。

また、上華嚴寺の別の建築である大雄宝殿について、村田は「金

大同

下華嚴寺薄伽教藏

中ノ国寺簿言墨銘

維摩經卷五藏次成實政月甲午朔拾五日
伏申午時建

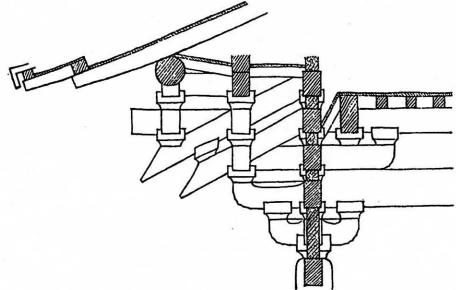
左ノ梁下銘

推誠竭節功臣大同軍部度雲弘徳等州觀
客寮置等使崇祿太夫檢校不尉同政等門
下平倉寺使持節雲州諸軍事行雲州刺史
上柱國弘光即開國公食邑肆千食實封
肆佰之揚文玄

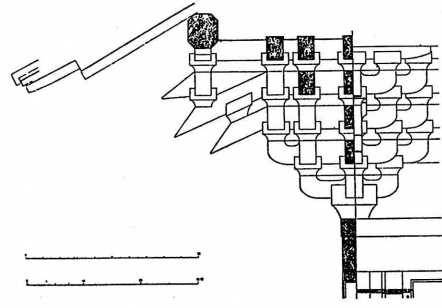
遠

昭和廿七年

図12 下華嚴寺の薄伽教藏天井の梁下の墨銘記録（東京大学生産技術研究所蔵）



観音閣上層斗拱見取圖



薄伽教藏内部經部斗拱實測圖

図13 観音閣の上層組み物と下華嚴寺薄伽教藏内部經閣の組み物（『遼金時代の建築と其仏像』本文より）

の天眷三年以後数年間の再建ではなからうか」と判断した。その根拠は薄伽教藏の金の碑文である。碑文に「金の天眷三年から数年の中に旧址により九間七間の殿をはじめ若干の楼閣が重建せられたこと」がある。しかし関野は「様式上矢張り遼代に属すべき者であらう。」と自説を堅持した。

この問題は、一九五三年に至り、上華嚴寺の大雄宝殿で墨跡が発見され、金の天眷三年（一一四〇）に建てられたことが中国人の考察により証明され、ようやく決着がつく。結果は村田治郎が正しかった。

上華嚴寺については、関野が亡くなった後も村田治郎は研究を続けた。一九四三年に図集『大同大華嚴寺』を出版、大型図版八十八枚を収録し、ディテールも紹介している。しかしながら、付属している考察報告書は大阪印刷所で戦火のため焼失してしまった。様式については、関野は独楽寺を下華嚴寺薄伽教藏と比較した。類似点として、関野は次のように纏めた。

- ① 二つの建築の肘木の手法がよく似ている。
- ② 両方の組み物には四手先が採用し、第三、第四の手先は其の端を斜めに切られる二重尾垂になっている（図13）。
- ③ 両方とも柱の間に二手先斗拱を採用した。

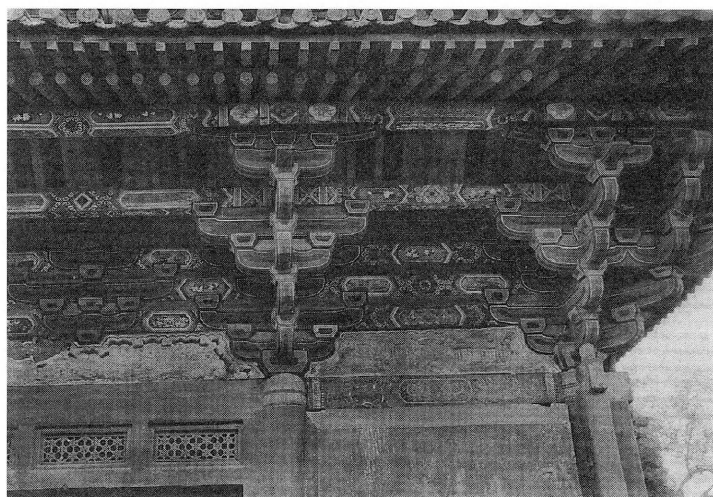


図14-1 独楽寺観音閣の柱の上には台輪がないため、唐以来の制度を踏襲したと考えられる（『遼金時代の建築と其仏像』図版より）



図14-2 下華嚴寺薄伽教蔵の柱の上には台輪がある（『遼金時代の建築と其仏像』図版より）

台輪は柱頂部にある水平材で、日本の飛鳥時代の建築中、法隆寺金堂、五重塔等にはなく、法起寺の三重塔、法輪寺三重塔などには存在しているから、中国では南北朝時代より、台輪を使用した建造物も使用しない建造物もあったのである。台輪の有無により時代の前後を決定することはできないが、関野は「観音閣に台輪の無きは唐以来の制度を襲用せし者である。」と考えた⁽¹⁴⁾。

また、格天井は角材（格縁）を縦横に組み格子とし、格間に裏板を張った天井を指している。天井の組み入れとなっているのは、日本では主として飛鳥、寧楽時代より藤原時代に及んでいる。関野はこの観音閣の

④ 勾欄の雷文様（直線が直角に折れ曲がって連続するもの）が同じ。

以上四点から両者の年代が非常に接近していると判断した。しかし、違う所もあると関野は分析した。

① 観音閣の柱の上に台輪がなかったが（図14-1）、薄伽教蔵にはある（図14-2）。

② 観音閣には組み入れ天井を使ったけれども（図15-1）、薄伽教蔵には格天井を使っている（図15-2）。

台輪は柱頂部にある水平材で、日本の飛鳥時代の建築中、法隆寺

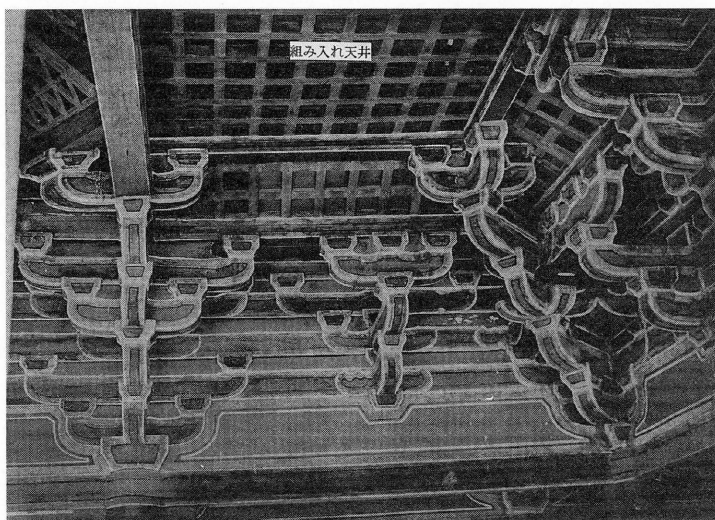


図15-1 観音閣の組み入れ天井（『遼金時代の建築と其仏像』図版より）

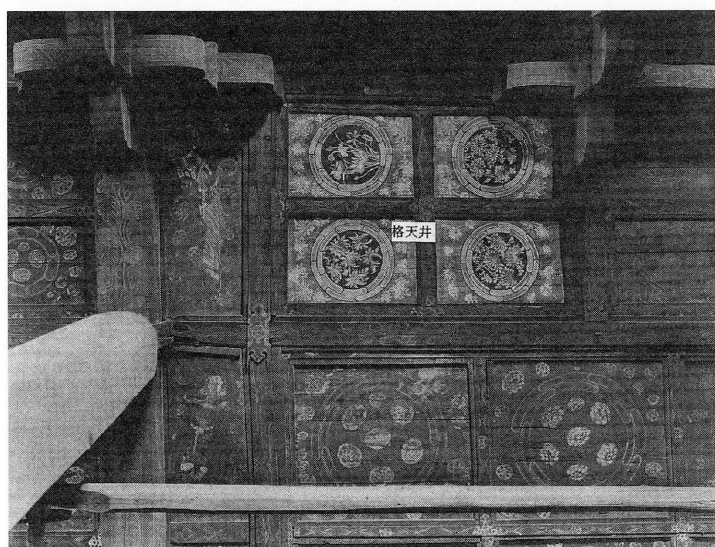


図15-2 薄伽教蔵の格天井（『遼金時代の建築と其仏像』図版より）

組み入れ天井も南北朝、隋、唐より伝統的手法であり、中国で宋、金以後ほとんど建造物は格天井を使っているから、「薄伽教蔵の格天井よりも観音閣の組み入れ天井の方が寧ろ古制を示せる者である。」と考えた^(註)。

しかし様式の方法は万能ではない、関野は以下のように文献調査によって補強している。

曰。故尚父秦王。請談真大師入独楽寺。修観音閣。以統和二年冬十月再建。上下兩級東西五間南北八架。大閣一所。重塑十一面觀世音菩薩像。」これで統和二年（九八四）に談真大師により建造されたことが分かった。

こうして関野は、観音閣は薄伽教蔵より先に統和二年に建てられたと解釈した。遼の観音閣の年代問題を解決し、これが中国に現存

独楽寺について、闕鐸 (Kuan) の抄本『順天府志』によれば、「順天府志二十五、薊州独楽寺、在州治西南、寺不知何時創建、遼時沙門円新居之、統和二年僧談真重修、有統和四年翰林院学士承旨劉成撰碑、盤山志中有傑閣、設大士像、相伝盤山舍利塔神灯、自塔而下、先独楽而後及諸仏刹云」とあり、独楽寺の再建年代は遼の統和二年（九八四）と記載している。『日下旧聞』の「盤山志」によれば、「独楽寺。不知創自何代。至遼時重修。有翰林院学士承旨劉成碑。統和四年孟夏立石。其文略

することが確認される最も古い木造建築たることを主張した。独楽寺の建設年代を九八四年とする説は今も変わらず、定説となっている。

結局、独楽寺が法隆寺よりは遅く、鳳凰堂よりは早く建設されたことが判明した。

様式の判断と文献調査は、日本の建築史教育においてずっと教科書のように教えられてきた方法である。その伝統は関野貞、伊東忠太から始まっていたものであろう。伊東忠太と比べると、関野はさらに様式を好んでいる。様式の視点から建築を考察するのはもともと西洋的な方法で、それに中国の文献調査、拓本の方法を融合してユニークな方法が形成された。特に中国では県志、府志、碑文が非常に豊富で、この方法が有効である。その後、中国の研究者は同種の方法で更に探索を進め、一九三七年、山西省五台山に唐代の仏光寺（八五七年）の所在、一九五三年には山西省五台县でも同じ唐代の南禅寺（七八二年）の所在を発見し、それらに建築史的な位置付けを与えた。つまり、南禅寺は今日までに発見された最も古い木造建築である。

独楽寺と華嚴寺調査の後、関野の遼金建築研究はさらに満洲へ拡大していく。なぜ満洲へ行くかといえば、遼金の主な領土が満洲にあつたためであらう。もちろん、このテーマの選択そのものは一九三一年の「満洲事変」以後の政治状況と無関係ではないであらう。

七

中国建築史学研究の「近代化」問題 ——一九三一年の日中交流を巡って

一九三一年以後の状況を考えるに際し、建築史研究の「近代化」とは何か、とまず問わなければならないだろう。論者は、フィールドワーク、様式の視点から建築を考察し、ならびにそれに伴う実測、撮影などの科学的方法が導入され、これに伝統的な文献史料、拓本などの方法を加えた方法の確立をもって、近代的研究方法が成立したものの、と考えている。

明治以後の日本の建築史研究の特徴とも言えるが、このような西洋的な方法論の応用は、日本の法隆寺研究でも見られた。

中国で、清朝考証学派の代表である戴震は乾隆朝半ばごろに『考工記図』を刊行した。彼は典型的な考証学の方法で建築に関する『考工記』を研究した。一九〇三年『京師大学堂章程』で『建築学』を、中国に導入したが、本質的な建築研究は行われなかった。中国建築史学における「近代化」がいつ起こったか、については、論者は中国营造学社の成立からと考えている。中国营造学社は一九二九年に創立されている。一九三一年の満洲事変までの間に、日本との交流が意外に多いことが分かってきた。

(一) 日中学術交流の縁起

注目すべきは一九二〇年代後期からの外国研究者との共同研究の傾向で、早いのは東方考古学会である。この学会は一九二六年に北京大学考古学会と日本東亜考古学会とが提携して「東亜諸地方」の考古学的研究調査を発展せしめるために結成された。一九二六年六月北京大学第二院に於いて第一回の総会を開催した。中国の考古学調査は日本より後れていたが、一九二〇年代後半から一九三〇年代に至って多くの成果を挙げ、これが共同研究の基礎を作った。留学生の交換も始まり、中国側の留学生莊嚴(zhuāng yán)後に台湾故宮博物院院長、日本の駒井和愛が第一回目の交換留学生として留学した。

建築史学の分野では、一九二九年中国研究の専門機構として中国营造学社(日本側では中国营造学会と称える)が設立された。社長の朱啓鈴(zhū qǐ lín 一八七二—一九六四)は積極的に外国との交流を提唱した。「今世界は同一方向へ発展し、物質的にも進化した。これは重要なことである。科学的な視点から、体系的な研究をしなければ、世界的な著名研究者と公開の議論をすることもできない。」「もし中国が外国の専門家と学術交流をできるならば、それこそ期待しているところである。……」

この精神に基づいて、外国人も積極的に受け入れた。日本の『建築雑誌』に「中国营造学会創立」に関する記事が掲載された。その

なかで、伊東忠太、関野貞、東京美術学校校長の正木直彦⁽¹⁵⁾の入会が紹介された。伊東忠太、関野貞が入会した以外に、橋川時雄⁽¹⁶⁾、荒木清三、松崎鶴雄⁽¹⁷⁾が入会した。また、一九二九年から一九三一年の中国营造学社の文献部主任関鐸⁽¹⁸⁾は日本留学経験を持っている。中国建築研究は新たな段階に入った。

どのような経緯が、日本人研究者と中国营造学社とを結び付けたのだろうか。ここには荒木清三(？—一九三四)が関係している。荒木清三は一九〇二年に日本の工手学校(現・工学院大学)を卒業、一九〇六年北京の大倉洋行工程局に勤務の後、一九〇七年に北京の第二代目の日本公使館の設計製図に参加した。一九一〇年には大清国学部技手として雇われ、中国の京師大学堂の設計製図に参加した。ちなみにそのとき、お雇い日本人技師として参画していた真水英夫⁽¹⁹⁾(一八六六—一九三八)は伊東忠太の同級生であった。辛亥革命以後荒木清三は中国に残り、土木建築請負業及び諸建築材料販売業の沢山工程総局で建築関係の業務に従事した。⁽²⁰⁾荒木清三は中国古建築に深い興味を持ち、中国古建築と資料を大量に蒐集した。これらの資料は今、東京大学東洋文化研究所に収蔵されている。彼は一九一八年に関野貞と会って、工匠の値段を教えたことが関野の調査帖に記録されている。彼は中国营造学社の創立初期に入社、校理となった。後に満洲で関野の調査に多大な手助けをした。一九三四年満洲で亡くなっている。

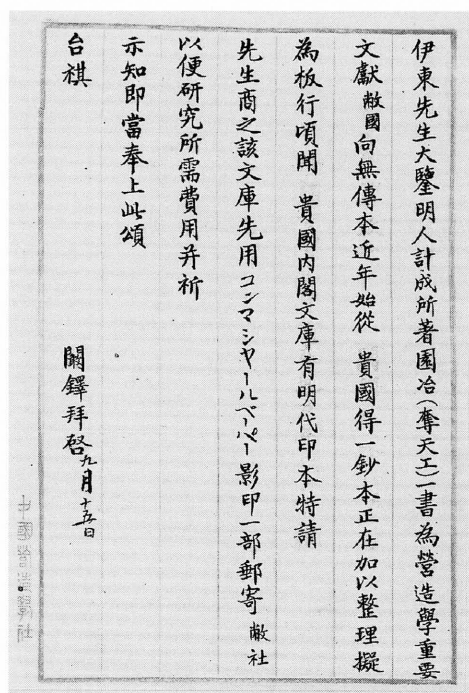


図16 関鐸が朱の命令に応じ、伊東忠太へ送った手紙の一部分（伊東知恵子氏提供）

一九三〇年、この荒木清三の案内で、伊東忠太は初めて北京で中国营造学社の社長、朱啓鈴と出会った。この会見について中国側が次のような記事を残している。

朱は伊東と長い時間話し合い、逢うのが遅かったのが残念だと朱は思った。会談後に伊東が故宫博物館に特別招待され、朱先生が伊東を案内して故宮をすべて見学し、本社（中国营造学社）は中山公園で宴会を開き伊東などを招待した。朱は伊東を紹介し、出席した名流に面会させた。それから朱は伊東忠太に依頼して『支那の建築研究』を講演してもらった。

伊東も、「中日学者がお互い援助し、日本の名考古学家及び學術団体に紹介させ、共同研究をすすめる。そこで双方が望んでいたのは東洋文化を發揚することである。」と共同研究の意識を表明した。共同研究は両方が望んでいたからであろう。後日、交流の具体的な内容の相談がなされた。伊東忠太の遺品中、この時期に橋川時雄、関鐸、荒木清三からの手紙がある。これらの手紙では圖書資料の交流、留学生の交流、辞書の編纂などについて検討している。

一九三〇年に関鐸が朱の指示に応じ、伊東忠太に手紙を送った。三通の手紙には日中交流の内容と計画が述べられている。

一通目の手紙は一九三〇年七月十日の日付で、内容は伊東忠太の講演を翻訳し、『中国营造学社彙刊』の第一巻に登載することを報告、さらに日本の関係研究者のリストを求めており、資料寄贈を予定していたようである。内容から見ると、伊東忠太は中国营造学社を訪問した帰国途中で、奉天で「葉書」を出した後、返事を待たず、東京でもう一度「葉書」を出している。中国側も「不勝依恋」である。日中研究者が共同研究を求める気持ちが表れている。

二通目の手紙は一九三〇年九月十五日の日付で、内容は、①日本側が中国へ留学生を派遣すること、②伊東は故宫博物館古物陳列所で撮影することを依頼、③营造学社が伊東忠太に『園冶』をコピーすることであった。④また、手紙の末に、北京隆福寺、智化寺の所在地と年代表を付している。伊東が必要としたものであろう（図

六月十三日 關澤氏所藏

中國書畫博物館藏

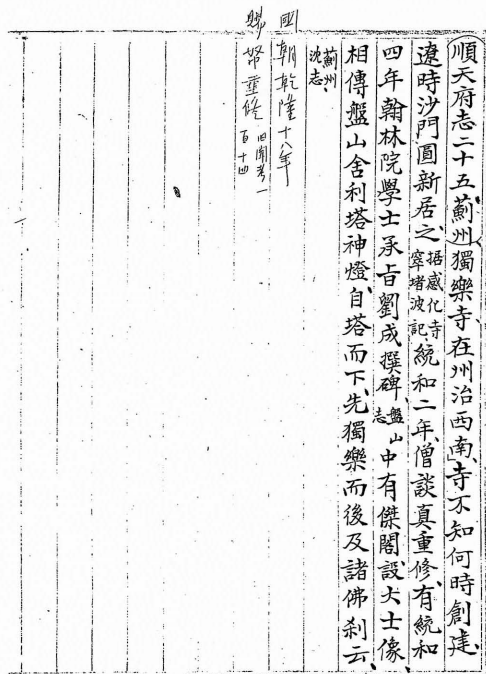


図17 關澤から贈られた独樂寺史料(東京大学生産技術研究所蔵)

16。

①について、留学生の派遣は考古学では既に行われていた。建築学も同様に進みたいと伊東は考えていたのである。②について、朱は一九一四年に皇帝の宝物を故宮に移転し、古物陳列所を設立した。その資料の撮影を伊東が望んでいた。③について、『園冶』は明代の計成（一八五二―？）の造園指導思想、敷地の選択、建築の配置及び建築の設計についての重要な著作である。『園冶』の最初の引用は大村西崖の『東洋美術史』（一九二五年）に見られる。中国人に注目され、日本から手書きの一冊を得た。また中国で収集し

始めた。しかし、北平図書館で二巻を見つけたが、日本からの手書きとつき合わせて見ると、食い違が多いので、伊東忠太に複写を頼んだ。

ここから見ると、二通目の手紙から本質的な研究交流が行われ始めた様子が窺われる。

三通目の手紙は一九三〇年十月十日の日付で、内容は①営造辞書を編纂すること。朱は日本同文館で『工業大辞書』を出版したことを知り、非常に嬉しく、営造学社の研究に有益な参考品として、伊東に購入を依頼。②新刊の朝鮮図版の購入。この図版は関野貞の『朝鮮古蹟図譜』を指していると論者は推断している。③新刊の『支那建築』を購入することである。

辞書の編纂は営造学社にとって重要な事業である。国際学術交流と共に、辞書が欠かせないので、まず日本の経験を参考とすることにした。一九三一年四月、営造学社文献部主任の關澤は辞書編纂のため日本を訪問し、伊東が彼を『工業大辞書』の術語委員会長の笠原敏郎と委員の大熊喜邦、佐藤功一、森田健介、田辺泰などに紹介した。後に営造学社は営造辞書を編纂するが、そのとき、日本の『工業字解』、『日本建築字彙』、『工業大辞書』、『英和建築語彙』などを参考にした。

ここから、営造学社の創立初期（一九三〇年の時点）、日中建築交流はスムーズに進んでいたことが分かる。

(二) 関野貞と中国营造学社との関係

関野が初めて中国营造学社を訪ねたのはこの年のこと。そこでは独楽寺の発見が重要な話題となった。なぜ関野は独楽寺が遼時代建築と判断したのか、中国側の注意を引いた。

この問題について、助手の竹島が当時の状況を回顧している。関野一行は独楽寺から北平（北京）に帰って中国营造学社社長の朱啓鈴の自宅で朱氏と文献部主任の闕鐸と面会、会談のなかで関野は自分の発見と疑問を話した。しかし最初はさして注目されなかった。ところが翌日、再び訪問したとき、闕鐸は『日下旧聞』及び他の地方誌にある独楽寺に関する史料を関野に見せた。

また、闕鐸は手書きで『順天府志』の独楽寺に関する史料を関野に贈った。もちろんこれこそ関野が望んでいた史料である。関野は欄外に「六月十三日 闕鐸氏所贈」と書き込んでいる（図17）。こうして関野と中国の研究者との交流が始まった。

一方、朱と闕にとって疑問だったのは、関野が史料を読んでいないのにどうして遼代の建築と判断できたのかという点である。関野は自分の推察を述べている。一九一八年関野は大同の華嚴寺を調査し、一九二六年『大同府志』によって華嚴寺が遼代の建築であることを知った。華嚴寺の様式が独楽寺の観音閣とよく似ている。ここから独楽寺の観音閣も遼代建築と判断した、というのである。

中国側もこの発見から実物考察の重要性を痛感し、中国营造学社の最初の実物調査は一九三二年、ほかならぬこの独楽寺から始められた。

一九三二年、梁思成 (Liáng Sì-cheng) をリーダーとして中国营造学社は初めての現場実測調査を行った。一九三一年に、関野らは营造学社と接触するとき、後に营造学社の重要人物になった梁思成、劉敦楨 (Liu dun-zhen) と会ったことが竹島卓一の文章から判明する。「梁思成、劉敦楨氏には、北京の西北部にある円明園を荒木清三氏と調査にいった時に案内していただいた記憶がある⁽⁸⁾」。梁はアメリカで留学時代（一九二四—一九二八年）に、既に関野貞の名前を知っていた。彼は欧米及び日本の研究状況を調べ、欧米各国とも自国の古建築をきちんと刊行物にまとめて報告しているが、中国だけ東洋の古国でありながら自らの建築史を編んでいないことに気付いていた。当時西洋学者はまだ中国の建築発展と技術にさほど注目していなかったが、日本の学术界はすでに中国に注目していた。例えば大村西崖、常盤大定、⁽⁹⁾ 関野貞などがある程度中国建築芸術の研究をすすめていた。もし私たち中国人が自国の建築史を整理しなければ、いつかこの領域を日本の学界に占められることだろう。中国建築士として、このような状況は堪らない⁽¹⁰⁾。

帰国後、梁思成は北京の鼓楼で独楽寺の写真が展示されていると聞いて、ただちに見に行った。「薊県の写真中の、巨大な組み物は

日本の考古学家常盤大定と関野貞が中国旅行の後に発表した写真と似ていることを思い出す。」

その後、彼が纏めた「薊県独楽寺観音閣山門考」^(註)は中国内外の注目を浴びた。梁思成は『营造法式』を構造方法から分析し、アメリカで習った力学的方法も使い、厳密な実測図を描き上げた。独楽寺調査以後、大同の上下華嚴寺も実測した。この二つの建築群は関野の発見によるものであるが、その後まもなく、自ら行ったフィールドワークで梁はもう一つ遼の建築広濟寺（一〇二五年）を発見した。このように独楽寺調査は中国营造学社の記念碑的な研究となったのである。むろん、フィールドワークや実測は当時の欧米の考古学からの影響も無視できないが、独楽寺の調査を契機として、营造学社の研究方針はそれまでの文献調査一本鎗から脱却して、文献とフィールドワークを併行して行うようになった。

独楽寺をめぐる意見交換の後、関野は本格的な中日共同研究を行う計画を立てた。

同年九月、伊東忠太、朱啓鈴、関野貞、今西龍、闕鐸、富田晋二、何遂（He Su）が「古瓦研究会」を創設した。古瓦研究会設立の沿革は「古瓦研究会縁起及約言」に次のように書かれている。

古今の瓦は建築の唯一の材料として、つねに金石の後に置かれる。近年あいついで発見され、収蔵された。古物好きな人は

独立研究の個性を持っている。文字以外に、模様、または寸法、材料、重さ、形式はすべて考察に値する。考古学者にとって新しい科目というだけではなく、营造学者にとっても研究上重要な意味がある。だから古瓦研究会を発足し、中国、日本及びベトナムなど瓦を使用する国を対象に、現存物を列挙し、拓本を取り、鑑別し、重複物を削除し、戸籍を参照し、出典を標明し、本を出版し、図録を作成し、世界に提供し、公開研究を進めることとする。

しかしながら、メンバーのなかで本気に古瓦研究に力を注いだ人は、関野と何遂だけであろう。

関野は一九〇〇年に「古瓦模様沿革考」、一九二五年に「支那の瓦及び磚」を発表し、日本のみならず、周秦から明清までの中国の瓦及び磚の編年問題を基本的に解明した。これは中国古代瓦及び磚の最初の編年史と見られている。

中国との交流により、この研究をさらに深化される機会を得た。

特に何遂は古瓦に興味をもち、三十二冊に及ぶ拓本を所有しており、中国の古瓦研究の第一人者と見なされていた。

私見でも、この研究会の成立は日中建築共同研究にとって、重要な進歩であった。

『中国营造学社彙刊』には関野貞が一九二九年、万国工業会議で発

表した「日本古代建築物之保存」が翻訳されている。⁽⁸⁸⁾ 日本建築保存の先駆者である関野貞の理念も交流により中国に伝えられた。

なぜ、このような交流活動が行われたのだろうか。

日本側も中国の文献読解の力を借りたいと考えた可能性が指摘できる。独楽寺の場合、中国側の史料提供と日本の独自の判断とが結びつき、迅速な解明が可能となった。「北平营造学社」といふのがありますが其処の朱啓鈴さん、闕鐸さん其他の方々から色々有益な援助を受けたのであります。」と関野自らも書いている。⁽⁸⁹⁾

竹島卓一も「また結成までもない中国营造学社の朱啓鈴、陶湘、闕鐸さんをはじめとして、現地の方々から種々有益な援助を受けたことは、いまでも忘れない。」と述べている。⁽⁹⁰⁾

さらには、中国側にとって、創立したばかりの营造学社の研究者はまだ若かったため、先行研究の内容や方法を習得する必要があり、積極的に各国の中国研究を蒐集した。中国营造学社の機関誌『中国营造学社彙刊』により、一九三七年以前には、日本との資料交換が頻繁に行われていたことが知られる。論者の統計によれば日本から交換あるいは寄贈を受けた書籍と雑誌の点数は八百十七冊にのぼった。そのなかには、日本の最新研究『支那建築』、『支那建築史』、『朝鮮古蹟図譜』、『東洋建築系統史論』などのほか、『日本標準規格』、『建築用語新辞典』、また設計に関する資料も含まれている。

伊東の助手を務めた飯田須賀斯の回顧を引こう。

(伊東が)北京で中国側の学者とも面接された。特に中国营造学社(日本建築学会に相当する研究団体)を建てた朱啓鈴氏は、日本語を知らないのに東洋建築史講座に収める先生の支那建築史を先生から贈られて、我々が雲岡に行って来るまでに通読し非常に感嘆した。营造学社設立には先生の従来の研究が大いに与って力あったと言う。⁽⁹¹⁾

日本との共同研究により、入手可能な資料の範囲も大きくなった。例えば、『園冶』の様な貴重な史料が日本で発見されたが、これは後の中国園林史の研究にとって無視できない発見である。

交流が行われたもう一つの要因には、中国現地にあって古跡、古物、書籍の管理がますます厳しくなり、外国人の中国での活動が制限されたため、共同研究しかできなくなったことも指摘されよう。これは民国初期とは大きな違い、と考えられる。

「満洲事変」以後、中国人のナショナリズムはピークに到達した。対日感情の悪化は学術問題を凌駕した。その結果、中国側の研究者はいっせいに中日共同研究から撤退した。⁽⁹²⁾ 建築方面では古瓦研究会にはもはや活動の機会は残されていなかった。辞書編纂についても、一九三一年闕鐸は营造学社から離れ、辞書の編纂は中断した。⁽⁹³⁾ この

ようなナショナリズムの対決は戦後の歴史研究にも及び、具体的に学術における外来からの影響の如何を評価することは「禁句」となった。それは、現在注目されるポスト・コロニアリズムによる研究課題となっている。

中国の近代化が如何に形成されたかについて、溝口雄三は「縦帯」と「横帯」の視座から分析した。^⑧「横帯」の視座は外来からの影響を指している。もし中国の近代化は縦軸の「内在的」変化と横軸の「外来的」影響により構成されていたとすれば、近代的な中国建築史学の形成における「外来的」影響の論述は回避しがたいだろう。一九三一年以前に、日本との交流が他の外国との交流と同様に活発だったことは事実である。建築史学の方面で、日本の影響が一番大きいのは、フィールドワークとその調査成果であろうと考えられる。もちろん欧米から考古学の方法論も受容されているが、日本の建築フィールドワークとそこになされた諸々の発見とは中国营造学社を直接刺激したものであろう。

中国营造学社が本格的な研究をスタートしたのは一九三一年以後のことになる。そして、营造学社による研究は、現在の中国建築史学にとって重要な基礎を提供した。

八 満洲建築の「独自性説」——遼金建築調査

(一) 日本における満洲研究の推進

一九三二年以後、関野の研究重点は満洲に移った。その理由として考えられるのは、山海関内における反日運動の高まりや、関野にとっては満洲はまだ未調査のところを多く残していたことがあげられよう。

日本における満洲研究の皮切りは鳥居龍蔵である。一八九五年に最初の日本人研究者として遼東半島を調査した。その後「満鮮歴史地理調査部」^⑨は満洲の歴史・地理の重要な研究を行った。東亜考古学会の満洲調査も活発になる時期である。一九二七年、北京大学と共同して、貔子窩(貔子窩)の先史遺跡を調査し、「貔子窩」(一九二九年)を発表した。その後、「牧羊城」(一九三一年)、「南山裡」(一九三三年)、「宮城子」(一九三四年)、「東京城」(一九三九年)などが公刊された。建築史家による満洲建築史研究に関する本格的な研究は、南満洲工業専門学校の建築史担当者の手で始められた。関野の調査について述べる前に、他の建築家、史家が既に行っていた建築研究を紹介しておきたい。

三橋四郎(一八六七—一九一五)の「清国建築談」^⑩は大連、金州、旅順等における家屋を紹介した。建築家の立場から満洲の建築を分析したもので、歴史的な研究ではなかった。

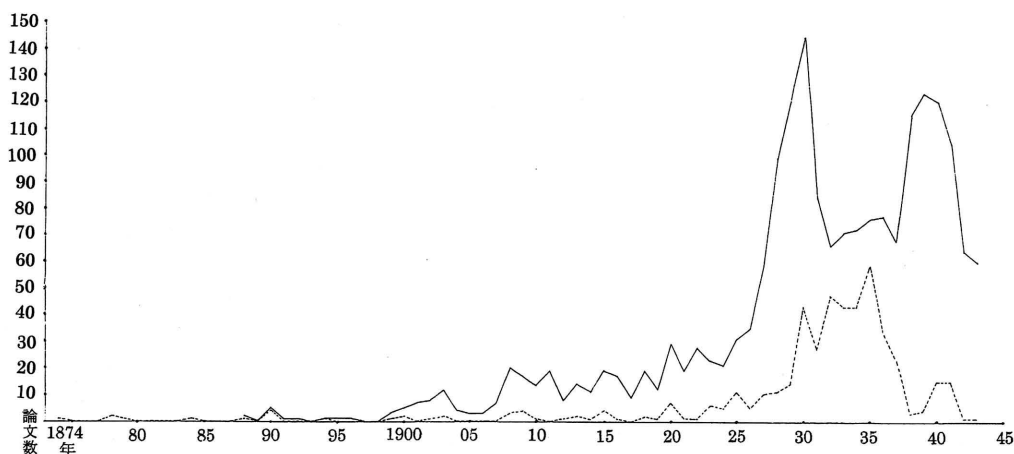


図18 中国研究に関する論文数統計 (『大東亜建築論文索引』に基づいて作成)
(—は総論文数；-----は日本以外の論文数)

塚本靖の「遼東の建築」は遼東の地勢、人情風俗、歴史、建築、都市(奉天、遼陽、興京、東京城、鉄嶺、開原など)、陵墓、宮殿、住宅を紹介した。塚本の研究は既存の文献に基づいたもので、フィールドワークがまだ不十分であった。

伊東忠太は一九〇五年六月に中国、印度、土耳其、欧州にまたがる大旅行をなし遂げたが、

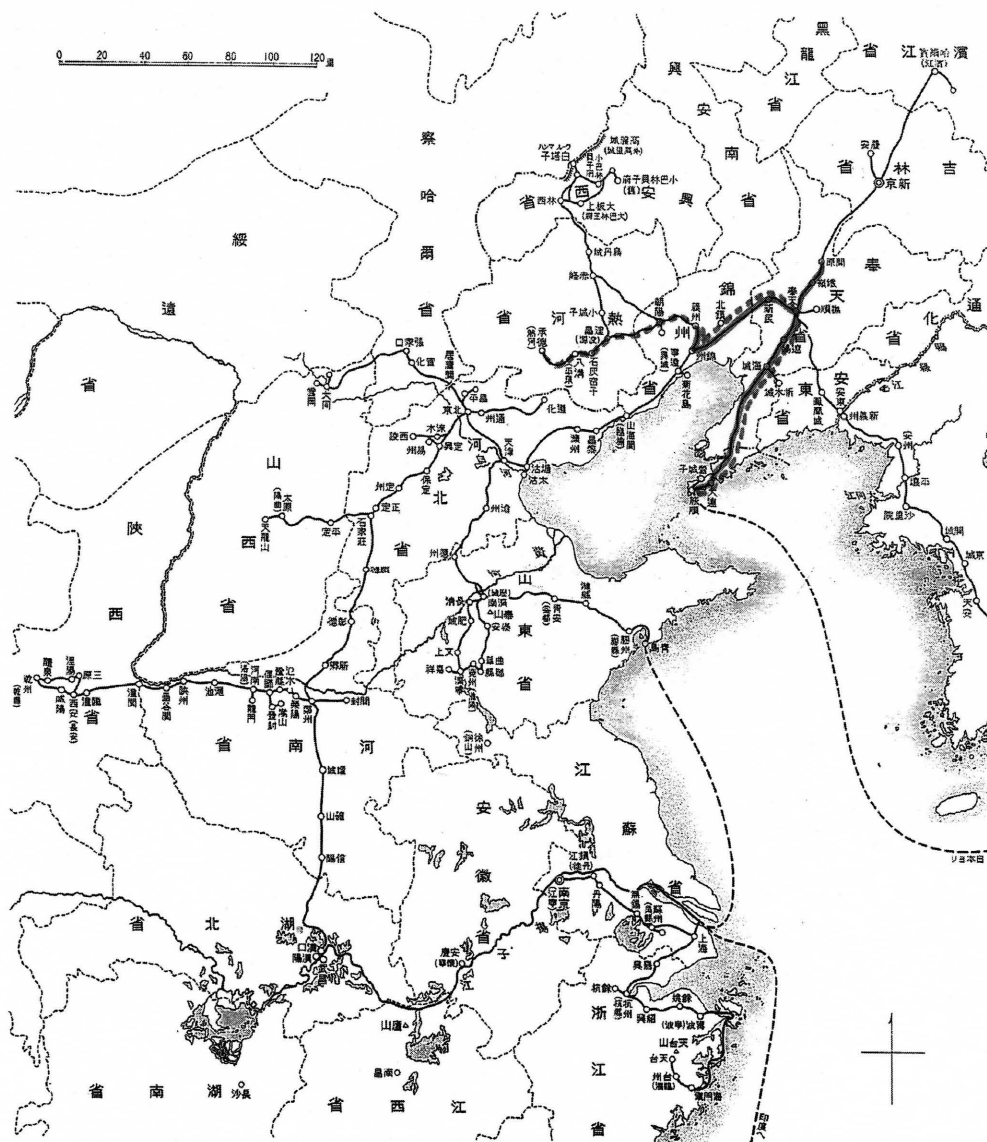
その後、休む間もなく、一九〇五年八月―一九〇六年二月の間、満洲調査を行った。この調査の中心は仏教建築であったが、同年十二月の『歴史地理』に「満洲の仏塔」を発表し、一九〇九年「満洲の仏寺建築」をテーマとして纏めた。伊東忠太の研究中心は満洲ではなく、中国及び東洋建築であり、その後、一九三五年まで満洲の調査には従事していない。

また満洲に在住した建築史家伊藤清造(？―一九三三)や村田治郎(一八九六―一九八六)が多くの研究成果を挙げている。

論者は『大東亜建築論文索引』に基づいて、中国研究に関する論文数を統計した(図18)。その結果、一九二〇年代後半から論文が急増したことが明確に認められる。考えられる理由としては、その一、東方文化学院の創立と満洲に関する研究の隆盛。その二、中国人による研究の一九三〇年代における勃興。その三、一九三七年以後日本の満洲及び華北、華中に関する研究の増加、などを指摘する。

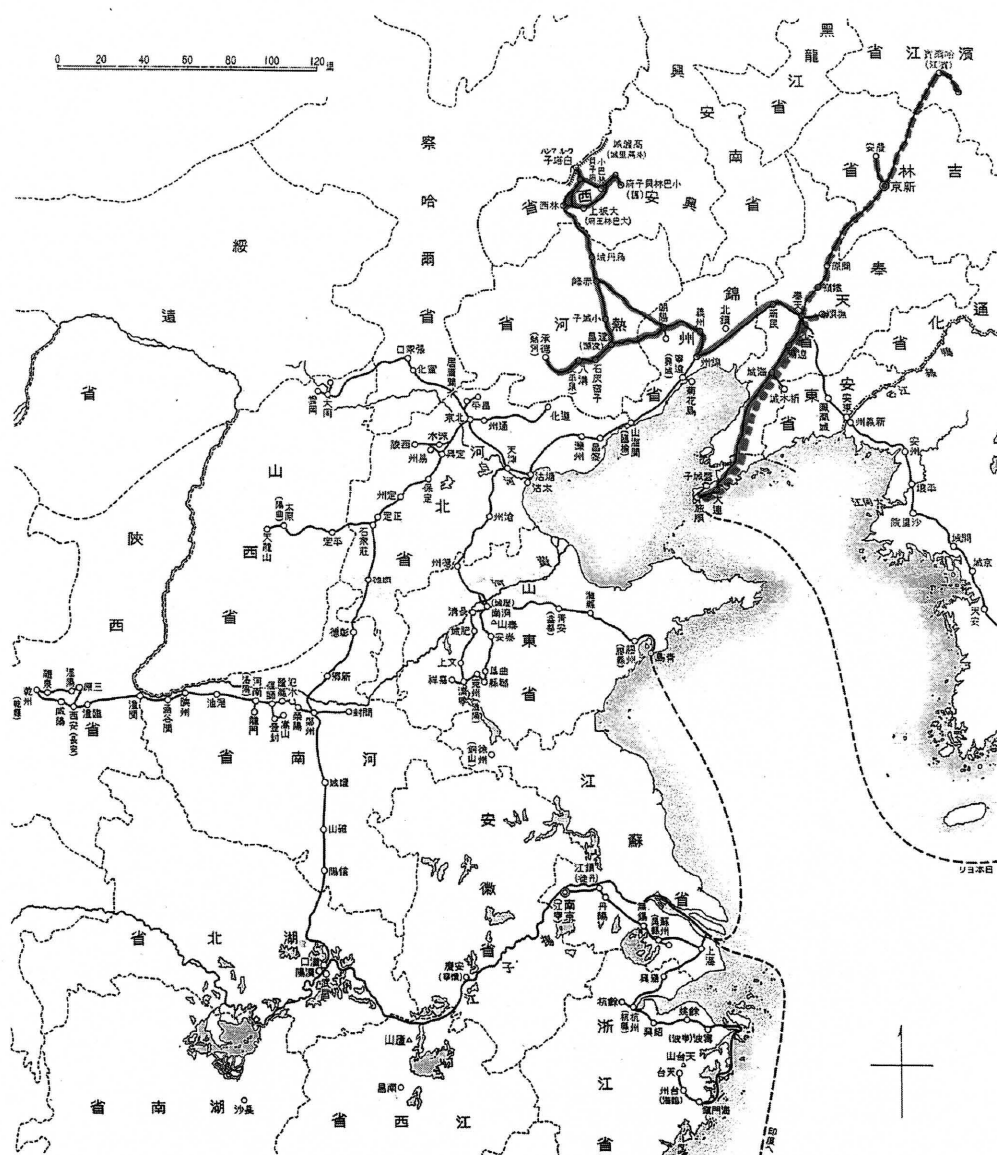
東洋及び満洲を研究する動機について、日本における東洋史学創立者白鳥庫吉は、一九一三年に以下のような二つの理由を述べていた。⁽¹⁷⁾

一つ目の理由としては、



付図4 七～八回目(1932—33年)満洲の調査(『支那の建築と芸術』、調査帖などにより作成)
(——は第七回目調査線路(1932); ·····は第八回目調査線路(1933))

半島国(朝鮮及び満洲)
我が国に對して密接の
關係あるは、今と古と異
るなく、而して半島に於
ける風雲の動揺が、常に
満洲の曠野より起り、從
つて満洲も、また直ちに
我が国運の消長に關する
ものあること、古もまた
今に同じかりしを思へば、
此の間に於ける民族的競
争の真相を究明して、現
時の形勢が由來するところ
を知悉するは、經世家
の決して等閑視する能は
ざるところなるに、史学
の狀態の此の如きは真に
憾むべし。思ふに一般の
學術界、また之に似たる
ものなきにあらざるべし。



付図5 九～十回目(1934—35年)満洲の調査(『支那の建築と芸術』、調査帖などにより作成)
(——は第九回目調査線路(1934); - - - - -は第十回目調査線路(1935))

二つ目の理由としては、

西欧の学者が東方の研鑽に努力せること多年、自然界の現象より人種、言語、宗教、学術、文芸等諸般の人事に至るまで彼等によりて其の幽の闡かれ、其の微の顕はされしもの甚だ多く、而して其の地域は波斯、印度の如きは言を俟たず、中央亜細亜より支那の老文明国に至り、西比利亜の曠野より、安南の半島に及び、亜細亜の各地を通じて彼等が試みたる学術的研究の功績、真に驚嘆すべきものあり。我が国の学者、また実に之を依頼し、東洋のこと西人の教

付録4 関野貞の中国調査詳細表（1932—1935）（凡例は付録一を参照）

回数	期間	調査地内訳	目的	備考
第七回目	昭和7年10月から11月7日（東方文化学院）	大連 ：10.10大連着・10.11鞍山満鉄内出土画像石（大連資料館内陳列）・10.12牧城子漢代古墳 旅順 ：10.13旅順博物館 奉天 ：10.14奉天着・10.15白塔寺・10.16北塔法輪寺、西塔、延寿寺、東寺（永光寺）、南寺（広慈寺）・10.17北陵・10.27清宮殿、遼王祠、故宮博物館 錦県 ：10.28錦県 義県 ：10.29義県・10.30万佛洞（「満洲義県万佛洞」より）・10.30—11.1奉国寺（「満洲義県奉国寺」より） 開原 ：10.21石塔寺（旧崇寿禅寺）、開原真武廟、開原石塔寺図 鉄嶺 ：10.22鉄嶺白塔寺白塔・10.23鉄嶺龍首山九重塔 遼陽 ：10.25生田友次郎氏藏品、遼陽白塔寺 鞍山 ：10.26鞍山中学校所蔵遺物	・遼金建築とその仏像	・調査帖より ・関野克『建築の歴史学者関野貞』（上越市立総合博物館 1978.10） ・「満洲義県奉国寺大雄宝殿」（『美術研究』No.14 1933.2）
第八回目	昭和8年8月8日から11月4日（日満文化協会）	昭和8.8から：神戸—旅順—奉天—新民—錦県—義県—朝陽—凌源—平泉—承德（「承德—清代の文化」） 奉天 ：10.2旧湯玉麟（熱河省主席、1930年）邸遺石 承德 ：10.8避暑山荘、承德佛寺（資料）・10.9避暑山荘乾隆三十景、五台山金閣寺（資料）・10.12殊像寺、羅漢堂・10.13普陀宗乘廟・10.15普陀宗乘廟・10.16須弥福寿廟・10.17普寧寺（大佛寺）・10.18溥仁寺、溥善寺、普樂寺、安遠廟、普陀宗乘廟 赤峰 ：10.10「承德府志卷二十一 古跡」	・熱河（承德）の保存研究 ・遼金建築とその仏像	・天津大学『承德—清代の文化』（中国建築工業出版社、毎日コミュニケーションズ 1982.7） ・調査帖より ・関野克『建築の歴史学者関野貞』
第九回目	昭和9年9月（日満文化協会）	承德 ：9.19須弥福寿廟・9.20承德離宮・9.21離宮広元宮、離宮永佑寺・9.23普寧寺・9.24離宮中宮、正宮、東宮 林東白塔子 ：9月末に赤峰、慶陵（「満洲の古建築と古墳」）	・熱河（承德）の保存研究 ・遼金建築とその仏像	・調査帖より ・「満洲の古建築と古墳」（東亜民族協会主催第一回日満文化協会講座 1934.6）
第十回目	昭和10年6月（東方文化学院）	撫順 ：6.2撫順山城、撫順金明堂碑 農安 ：6.6農安磚塔、農安出土石棺 白城（金上京） ：6.9南城南門、白城 ハルビン ：6.11ハルビン博物館 柞木城 ：6.13鉄塔、金塔、柞木城地図	・遼金建築とその仏像	・調査帖より

に、満洲は日本と旧帝国主義の戦場となったのみならず、研究

白鳥の証言からもわかるように、吾人は西欧の学者に對して甚深なる尊敬と感謝との念を抱くと共に、東洋の国民が世界の學術に對して為すところの勤を思ふて慚愧に堪へざるものあり。ただ満洲及び朝鮮に至りては、其の地の僻遠なるため、西人の研究尚ほ未だ及ばざるところ多きが如し。（中略）此の機を逸することなく、此の地方に於けるあらゆる事物の研究に力を尽し、其の成績を擧げて世界の學術に貢獻せざるべからざるにあらずや。

者の戦う場所にもなった。日本の研究者は朝鮮に引き続き、満洲に集中し、満洲はとりわけ一九三一年の満洲事変勃発以降、日本における東洋学研究の拠点となっていた。さらに同年末「満洲国」の「建国」以後、調査研究は満洲全域に展開した。

関野貞は「満洲国」「建国」以後、研究の重心を満洲に移した。研究テーマは「遼金時代の建築」と「熱河」の研究、前者は東方文化学院の研究の第二番目のテーマであり、後者は満洲国文教部より依頼された研究である。

(二) 満洲の遼金建築

渤海国、遼、金は唐を真似て同じく五京制^⑧を設立した。それぞれ五京^⑨の場所を見ると、渤海国、遼金建築は満洲に集中している。渤海国の研究は早く進み、松井浪八^{なみはち}は一八九九年に「渤海五京考^⑩」を発表した。一九一一年「満鮮歴史地理調査部」の調査により、上京城址が確認された。一九一五年鳥山喜一^{うやまきいち}は『渤海史考^⑪』を出版した。その後渤海国の研究が盛んとなった。遼文化研究の先駆者は鳥居龍蔵である。彼は民族学の視点からアジア各民族を調査し、フィールドワークに一生をかけた。一九一一年「遼の上京と其遺品^⑫」を発表、一九二九年彼も東方文化学院の研究員になり、後に『考古学上より見たる遼之文化図譜^⑬』を纏めた。

渤海国の建築で発見された例は非常に少ない。一九三三年に確認



図19 奉国寺（『遼金時代の建築と其仏像』図版より）

表3 関野貞が調査した遼金時代の建築 (1931-35)
 (『遼金時代の建築と其仏像』(図版二冊)より整理)

木造建築	磚塔建築
一、独楽寺観音閣。二、同山門。三、奉国寺大雄宝殿。四、下華嚴寺薄伽教殿。五、同海会殿。六、上華嚴寺大雄殿。七、普恩寺(善化寺)大雄殿。八、同普賢殿。九、同三聖殿。十、同天王殿。	一、林東南塔。二、林東北塔。三、白塔寺の白塔。四、大名城大塔寺の塔。五、大名城小塔。六、大名城半截塔。七、朝陽の北塔。八、朝陽の南塔。九、鳳凰山の大塔。十、鳳凰山の小塔。十一、鳳凰山の山頂磚塔。十二、五家子の磚塔。十三、黄花堂の磚塔。十四、塔子山の磚塔。十五、錦県広濟寺の磚塔。十六、義県嘉福寺の磚塔。十七、北鎮崇興寺の双塔。十八、遼陽広祐寺の白塔。十九、析木城の磚塔。二十、鉄嶺圓通寺の磚塔。二十一、龍尾山の磚塔。二十二、慈清寺の磚塔。二十三、開原石塔寺の磚塔。二十四、農安の磚塔。

築に限らないけれども、満洲では遼金建築も重要な存在である。そして、満洲の遼金建築調査は関野が中国内陸の悉皆調査に引き続いて取り組んだ東方文化学院の第二番目の課題となった。

一九三二—一九三五年の間に、関野は交互に熱河と遼金建築の研

できたものは一つでしかなかった。渤海国上京龍泉府にある石灯籠である。⁽¹⁸⁾しかし、遼金建築はまだ多く残っている。建築の研究は当時まだ未開拓の領域だった。

一九三二年に「満洲国」が成立し、翌年、満洲国文教部は宗教行政の先鞭として満洲国宗教調査を始めた。一九三三年には「古跡古物天然紀念物の保存に関する件」が公布され、古跡古物天然紀念物の保存調査が行われた。この調査は遼金建

究に励んでいた。調査帖によれば、一九三二年十一月第七回目の調査の目的は遼金建築、一九三三年八月八日—十一月四日、第八回目の調査は熱河、一九三四年九月下旬、熱河、赤峰、林東、一九三五年六月、亡くなる一カ月前の第十回調査は遼金建築であった(付図4・5、付録4)。

関野の第七回中国調査は一九三二年十一月に行われた。この時の調査は本格的な遼金時代の調査である。調査帖によれば、まず大連に向かい、そして、旅順、奉天、開原、鉄嶺、遼陽、鞍山、錦県、義県、万仏洞、奉国寺などの調査を展開している。随行した人は前述した荒木清三と数名の警務員である。この調査により、満洲で現存する最古の木造建築は奉国寺であることが発見された。遼の木造遺構として、奉国寺は当時中国で発見された二番目に古い、しかも最大の建築である(図19)。

関野が奉国寺に関する情報を得たのは八木契三郎の『統満洲旧蹟志』⁽¹⁹⁾からである。寺内の碑文に寺院は遼の開泰九年(一〇二〇)に創立と記入されているが、建築の建設年代がはっきりしていない。十月三十一日、十一月一日奉国寺調査が行われた。奉国寺の「大雄宝殿の宏壮なる雄姿を仰ぎ、一見その遼代の者たることを知り」、⁽²⁰⁾碑から大雄宝殿は開泰九年に開創したことが分かった。独楽寺の場合と同じく様式を分析し、史料と実物両方から建築の年代を確定した。この方法により、従来の文献上の混乱を整理し、より正確を期

した。また、写真と見取図を並置し、文字資料を図像化した。遼金建築の研究成果として、『遼金時代の建築と其仏像』（図版二冊）を出版した。細密な調査分析は、関野ならではの実証的な研究方法である。

遼金の建築調査が主な目的であったが、決して遼金建築に限らなかった。それは満洲国の古跡古物天然記念物の保存リストの制作と関わるためであろう。『東方学報』で東方文化学院の講演会の概要から見ると、当時所内講演会を頻繁に開き、関野は何回も満洲の各朝代の建築をテーマとして講演した。今回調査した万仏洞は東西二区に分かれ、東区は六窟、西区は七窟よりなる。北魏時代の石窟で、満洲国における最古の石窟である。

万仏洞については、満鮮歴史地理調査部の稲葉岩吉（二八七六一九四〇）、松井等（二八七七—一九三七）、やないわたり箭内互（二八七五—一九二六）が明治四十二年（一九〇九）北魏の碑を発見、初めて世に公表したが、⁽³⁰⁾建築文化史的な意味での発見は関野に帰される。石窟の発見は、雲崗石窟——下花園石窟——万仏洞という系統で、石窟の東漸に重要な証明を与えたということにある。

その後関野は更に三回遼金建築調査をした。一九三三年八月、一九三四年九月、一九三五年六月、熱河の研究に並行して満洲へ行った。調査場所は、一九三三年には熱河途上沿線。一九三四年に赤峰、林東白塔子周辺。一九三五年に撫順山城、撫順金明堂碑、農安磚塔、

農安出土石棺、金上京の白城。足跡はハルビン博物館、柞木城鉄塔、金塔に至る。

奉国寺の調査以後、関野の調査重点は磚塔に移行した。満洲で遼の木造建築は少なく、しかし煉瓦塔が多く残存していたからである。重点調査した遼金建築は、表3に掲げたように二十四件を数える。そこでは、年代の判断しにくいものが多く、特に満洲の磚塔については記録が少ないため、難しかった。しかし、関野の見事な判断能力により、遼金建築の輪郭が四年の調査ではっきりした。それは以下の要約にも見られる。

まず木造建築について、「遼の建築は一般に極めて雄健にして構造にも素朴な所が見られ、宋の建築に比して古制が多く見られる。而も遼時に属する個々の遺構について見れば、時の移るに随って進歩改良の跡が見られ、それ自身相当に独自の発展を遂げていることが察せられるのである。」⁽³¹⁾としている。

一方、磚塔については、「之を唐や五代・宋等の遺構に発見することは出来ぬ。（中略）建築的細部が全く遼代の木造建築に見る所と同様の様式を備へていることによって殆ど疑ふ余地はないが、其木造建築が遼より金に移るに従って、新たに宋の巧妙なる構法を学んで截然たる差異を示しているのに引かへ、磚塔の様式は殆ど其儘金によって継承せられているといふことは特に注意を要する所である。」⁽³²⁾とある。

ここまで、関野による遼金建築の調査は東北、河北省、内蒙古、山東、山西、河南など各省に及んだ。それにより、彼は竹島卓一と一緒に遼金時代の建築物遺存地略図を完成した(図20)。彼の研究の特徴は、なによりまず緻密な現地考查に立脚していることにある。遼金建築調査の成果は、図集と文字解説部分に分け、一九三四年三月、まず木造建築に関する資料を収録して『遼金時代の建築と其仏像』図版上冊を刊行し、一九三五年三月、磚石造建築に関する資料を収録して図版下冊を刊行した。上冊には木造建築十棟、写真百四十枚を収録した。下冊には磚塔、幢、碑など三十六件、二百九枚の写真を収録した。そして最後の努力で本文を完成しようとしていた矢先、関野は突然この世を去ることになる。

関野は遼金建築について陵墓調査にも匹敵するその最後の成果を世に示すことはなかった。遼金建築について彼の執筆したまとめも読者の目に触れる機会はなかった。しかし、一九三四年六月、東亜民族協会が主催した第一回日満文化講座で遼金建築についてこのような評価を示している。

かう云ふやうに遼の造りました建築物は木造建築でも亦磚築のものでも頗る特色を持ったもので、支那本部に決して退けをとらない立派なものでありますから、遼の文化と云ふものは必ずしも宋の模倣ではなかったと云ふことがわかるのであります^(註)。

助手の竹島卓一は『遼金時代の建築と其仏像』を完成し、その中でさらに補足して説明した。

遼が直接北宋の影響を受くるに至ったのは比較的遅く、聖宗の統和二十二年に行われた壇淵の役以後に於て初めて活潑になったものと考へられ、遼はそれ以前に既に渤海や五代の文化を繼承して相当の文化を造り上げて居ったのである。建築技術の如きも立派に基礎が出来て居った。……遼の遺構遺物に莊重なる古制を比較的多く存し、唐代の余影を多く認めるのは蓋しがためにして、渤海や五代の建築に猶多分に唐の優れた性質が保持せられて居ったのである。古式を多く存することによって北宋の進運に伴はなかったと見るのは必ずしも当を得たものではない。

遼の建築は之を渤海と五代に承け之に契丹人の嗜好が加味せられたものが其基礎をなしたものと考へられる^(註)。

関野はフィールドワークから遼金文化の独立的個性を強調した。この問題は当時の熱い関心事であった。満洲の建築史家伊藤清造は「新満洲国建国史^(註)」を發表、満洲建築は直接に中原(つまり黄河流域)の影響を受けたと考えていた。高句麗の古墳も漢代の影響を受

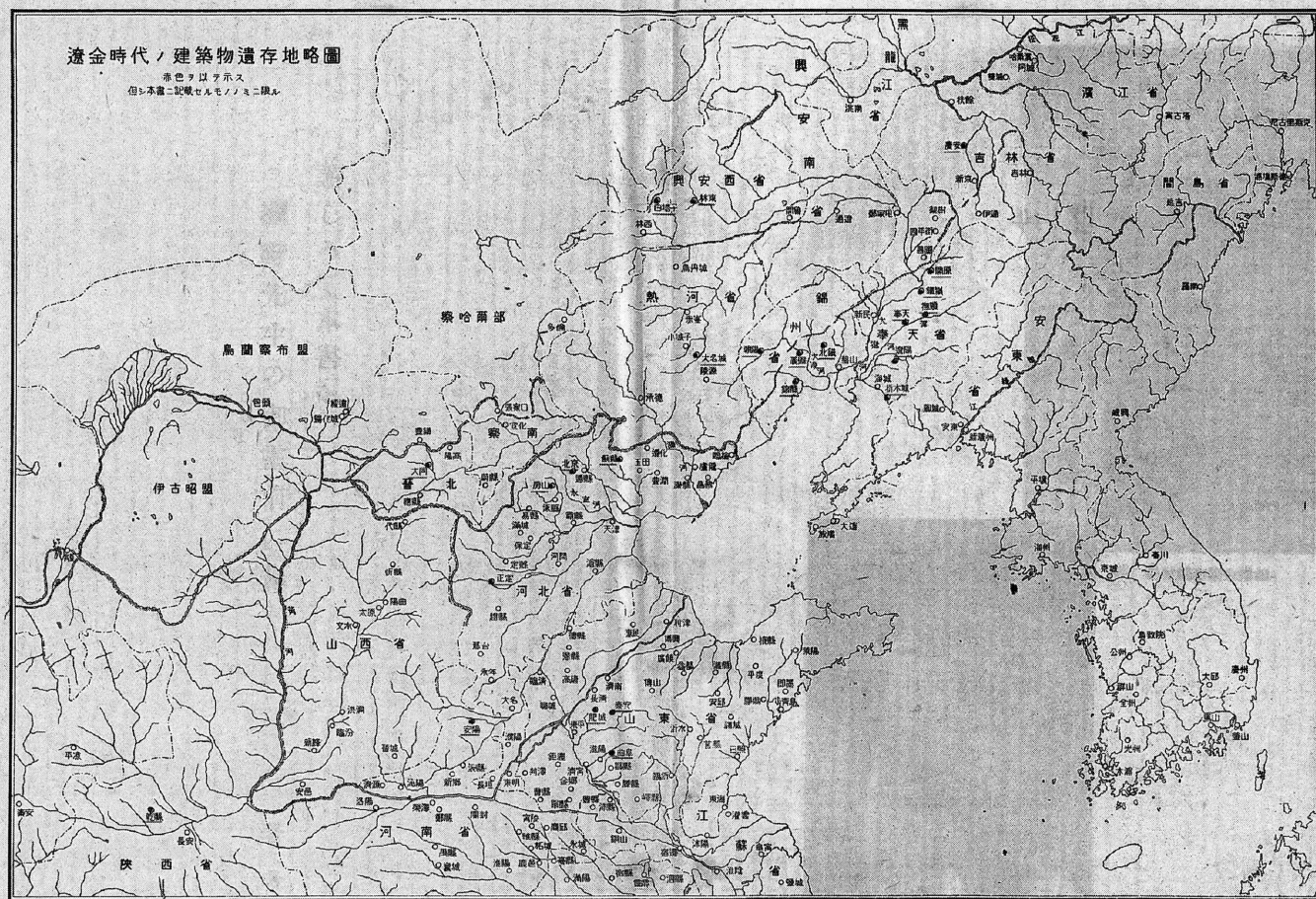


図20 関野貞らが調査した遼金建築の位置（『遼金時代の建築と其伝像』本文より）

けたと考えていた。一方、村田治郎は満洲建築は単純に中原の建築史から発展してきたのではなく、独立の立場を前提にしていると考えていった。そして支那系、チベット系の存在も否認しない^⑧。彼らの解釈は満洲建築史について対立した構想を示している。関野と竹島は、「唐代の余影を多く認める」と共に、「必ずしも宋の模倣ではなかった」と満洲建築の中原に対しての独自性を強調した。

一方で、遼の建築と日本との関係について、竹島は以下のようにべている。

結局日本と遼との事情が異り、同一線上を辿ったものではないといふことに帰せらるべきものであるが、之と全く同様のことが營造法式によって代表せられる宋の建築と遼のそれとの間にも当然考へ得るものと見なければならぬ^⑨。

このような論説には当時の満洲の政治上の三角関係も表れている。一九二八年以後関東軍は日本政府の表向きに不同意にもかかわらず、独走して、満洲の実質上の支配者となった。そして中原と満洲とは分離した状態となった。さらに関東軍は満洲で一定の独立性を確保し、日本内地では実現できない実験にのりだした。このような背景で満洲建築の独自性を強調するのは時局便乗ともみえる。ただ全体的に考察すると、関野のアイデンティティーは満洲人ではなく、日

本人であり、日本建築と中国建築との関係を中心に行っていることが分かる。遼金建築研究とほぼ同時に、一九三四年『日本建築に及ぼせる大陸建築の影響』が発表された。その中では、「日本建築に及ぼせる中国の影響」、それから日本の進化を論述した(後述「ナショナリズムの循環―大陸建築の影響の考証から日本建築進化理論まで」を参照)。並行してすすめられた関野貞の他の中国研究と比べると、遼金建築研究は全体的な構図の中で、どのように位置付けられるだろうか。遼金時代において中原建築は満洲を通してではなく、南宋經由で日本へ影響を与えたことを証明したかった、というのが間違いないところであろう。

九 幻の熱河保存事業

(一) 保存研究の提起

熱河は河北省の北部に位置する。清の聖祖(康熙)は一六七七年、塞外巡幸したが、一六八一年よりこれが例となり、ほとんど毎年滞在するようになった。皇帝はこの山川を見、その幽静なるを愛し、しかも、北京に近く往復二日に過ぎず、万機を綜理するに便なるのみならず、夏時涼しくなるを以て、この地を選んだ。一七〇三年に工を起し、一七〇八年に壮大な建築群が竣工した。これが避暑山荘と名付けられたのである。

一九一一年、清政府が倒れ、山荘は使われなくなり、荒廃状態に

陥った。一九一四年に朱啓鈴は一部分の財宝を北京へ持ち帰り、故宮に保管した。一九三一年、日本軍部は清の最後の皇帝溥儀 (Pǔyǐ) を扶持し、満洲国を創立した。一九三三年三月、熱河作戦の完了とともに熱河が満洲国の版図に編入された。

熱河についての研究は、一九〇六—〇八年、熱河の赤峰、シラムシン河流域を踏査した鳥居龍蔵による日本人類学、考古学の調査をもって嚆矢とするだろう。その後、満鉄の依頼で、「満鮮歴史地理調査部」が成立し、その主な人物である白鳥庫吉と他の部員、また八木槓三郎などが熱河を訪れた。ヨーロッパ人では、フランス人宣教師リサン (Jicent, E.) がフランス天主教が天津馬場道で設立した北疆博物館を拠点にして、一九一九年から中国北部で古物採集を始めた。彼は熱河南北を探查し、中国北部新石器時代に関する論文を発表した。スウェーデンの地質学者アンダーソン (J. G. Andersson) 八七四—一九六〇) は朝陽県で石器を蒐集した。その他にベルギー人宣教師ムーリー (原綴不詳) が熱河に駐在して多数の土器、青銅器、鉄器を発見した。また、アメリカから帰国した中国人の考古学家で前述した梁思成の弟の梁思永 (Liáng Sī-yǒng) も一九三〇年十月に承德へ調査に赴いた。目的は発掘調査であるが、実現出来ず、結局地面採集にとどまった。探検家スウェン・ヘディン (Hedin, Sven Anders) 八六五—一九五二) は一九三〇年六月熱河を訪れ、『熱河——皇帝の都』^(註)を書いた。彼らの研究により、熱河省内の新

石器時代の研究の基礎が築かれた。

満洲国成立以後、満洲方面の歴史学、考古学を専攻する日本の研究者が頻繁に熱河流域を訪れた。日本の東亜考古学会や、早稲田大学の徳永重康^(とくながしげやす)を団長とする第一次満蒙調査団が新石器時代の遺跡、遺物を発見した。一九三六年、満洲医科大学の黒田源次^(くろたげんじ)が、一九四〇年、池内宏がそれぞれ契丹遺跡の調査を行った。また一九三七年には、浜田耕作^(はまたこうさく)などが承德付近十七カ所の遺跡、遺物を発見した。熱河の研究はますます注目されるようになった。

そうした研究者の中、関野は建築史家として初めて熱河の建築を研究した。どのような関係で熱河の仕事が始まったのだろうか。

一九三二年三月に、満洲国国務院が創設され、民政部、外交部、軍政部、財政部、実業部、交通部、司法部が設置され、民政部の中に文教司が置かれた。同年七月文教部と改称され、満洲国の国務院総理であった鄭孝胥 (zhèng xiào-xū) が文教部総長を兼任した。文教部のなかに満洲古跡保存協会を設置、清の祖先の住んでいた古跡を保存する方針が固められた。

当時、満洲国の創立の初期にあつては、研究者は極めて少なく、若者が中心であった。弱冠三十歳、しかも旅順師範学堂を卒業した三宅俊成^(とけなり)が文教部古跡保存協会の主事となった。

一九三三年、鄭孝胥は文化事業を起こす目的で、日本側の協力を求めた。日本も満洲国との文化提携の必要を感じていた。そこで日

本外務省の文化事業部長から東方文化学院東京研究所所長服部宇之吉（二八六七—一九三九）に相談があり、日本側の人選を依頼されたので、白鳥庫吉、市村瓊次郎、関野貞、伊東忠太、池内宏、原田淑人、溝口貞次郎、狩野直喜（二八六八—一九四七）、内藤湖南（一八六六—一九三四）、羽田亨（一八八二—一九五五）、浜田耕作、服部宇之吉を推薦し、新京（現長春）で満洲国文教部所属の日満文化協会が創立した。鄭孝胥を会長に、副会長二名のうち、満洲側は宝熙、日本側は岡部長景である。服部は理事の一人になった。

この協会の事業は清朝実録の複製、奉天博物館の設立（一九三五年）、奉天図書館の整理、熱河離宮並喇嘛八大寺の修理などであった。この組織は東方文化学院を模倣して、満洲で建てられたにもかかわらず殆んど中国の研究者はおらず、東方文化学院の研究者の協力によってできた組織である。評議員は服部宇之吉、伊東忠太、関野貞、白鳥庫吉などである。

満洲国における文化施設に関する会議が開かれ、その議題に供するために熱河における遺跡遺物の調査が関野に依頼された。

（二）熱河調査

熱河の調査がいかに困難であったかは、中国人梁思永の論文からも分かる。一九三〇年梁思永が調査したとき、熱河は三年にわたる災害と、地方官吏の暴政、兵隊の横暴から、人々は土地を捨てて逃

げた。人手不足に、匪賊が出没と、調査途中で一日たりとも困難がない日はなかった。

関野と竹島の熱河調査は、日本軍が熱河を占領した後、一九三三年のこと。竹島は当時の状況について次のように語っている。

昭和八年の八月、日本（神戸）を船で出発、旅順に上陸し、奉天（瀋陽）に調査の拠点を置いた。そこで北京から来られた荒木清三氏と合流し、奉天を出発、鐵路で新民、錦県、義県と遼金塔の調査を行いながら朝陽に到着した。朝陽からは鐵路もなかったので、やむをえず日本軍の車両に便乗しなければならなかった。車両に便乗するといっても道なき道を走破する車（トラック）にしがみついているのはひと仕事であった。そのうえ、調査用のカメラ等をもっているのが気がでなかった。また、ひと雨降れば道は泥沼と化し、車は動かなくなり、近くの村の人たちに馬やロバを借りて引っ張ってもらったりもした。河を渡るにも橋は架けられていないし、一度停車すれば泥中に埋没してしまうので、水の浅いところをさがして、向こう岸まで途中で停車しないように一目散に走り抜けるのであった。

このような苦勞をしながらも凌源、平泉を経て、承德に入つたのは十月の始めであった。関野先生は写真撮影や資料の収集につとめ、荒木清三氏と私はもっぱら各建物の実測に異常なほ

どの努力を重ねたが、二週間の承德滞在期間にはあまりにも短く、対象の建物はあまりにも大きすぎた。実測は二百尺の鋼尺を使用した。時間的な制約の中ですべての部分まで実測するのはいへんなので、中国建築の特性を利用し、門から順次奥に並ぶ中心建物の間隔や大きさ、中心軸線に左右対称に配された配殿までの距離等を測定した。個々の建物は基壇部分の見込寸法、見付寸法を測定した。平面図の柱間隔は直接実測する時間が取れないので、建物の写真を対角線方向から撮影しておき、透視図法を応用して机上作業で求めた。こうした略測法は昭和五年に調査旅行を始めて以来、経験的に取得した方法で、中国建築のような建築群を小人数で略測するのにやむをえない方法であり、精密なものではないけれど、大きな誤りはないものと思う。普陀宗乘の廟や須弥福寿の廟などは大規模で山腹に後上がり建立されている。そのような配置図のみでは的確に把握できないので、等高線を入れることにした。等高線を入れるためには、現在ではハントレベルを使用すれば簡単に行えるが、当時はなかったもので、中学校の地理の先生に地図の扱い方などの指導を受けたことや、高等学校の山岳部での経験などが役立った。翌九年にも約十日間滞在し、前年度残った部分について補足調査を行った。

関野の調査帖を見ると、さらに調査の内容が明らかになる。十月八日に調査を始め、まず避暑山荘、承德仏寺、避暑山荘乾隆三十景、五台山金閣寺に関する資料を調べた。十月十二日から十八日まで一週間の間に、殊像寺、羅漢堂、普陀宗乘廟、須弥福寿廟、普寧寺（大佛寺）、溥仁寺、溥善寺、普樂寺、安遠廟などを調査した。時々二回調査したものもある。以前の中国建築調査と同じく建築に関する情報を細かく記入した。竹島と荒木の参加が実測方面の力になったことは間違いない（図21）。

一九三三年の調査は外八廟を中心に行われたことが調査帖から分かった。文教部の締め切りが迫ったので、急いで戻り、関野は帰途に新京に立ち寄り、文教部に調査結果を報告した。ちなみに、熱河遺跡の保存の緊迫性と保存方法に関する関野の当時の考え方は、東方文化学院の講演で表明されている。

以上離宮並びに寺廟は比類なき貴重なものであるが、頗る荒廃している故に、速かに修理保存の道を講じなければならない。其の方法としては離宮を有料の公園とすること、宮殿の建物を博物館とすること、動物園植物園を其中に設けること、各種運動の機関を設けること等が考へられ、喇嘛寺廟は之を修理し喇嘛の本山たらしめること等の案がある。

さらに、朝鮮を経て十一月四日帰国した後、保存に関する意見書を航空便で送った。

満洲国文教部に提出した意見書⁽⁸⁾は、調査した熱河離宮と外八廟の被害状況を報告し、保存の重要性を強調した。具体的には、一、建物の破損の状態。二、修理の方針。三、離宮の保存。四、寺廟の保存。五、全部の修理費。六、保存事業となっている。

まず、建物の破損の状態について程度により五種類に分け、それぞれ対応して修理方針を出す。保存内容について、離宮を修理して将来に博物館または公園として再利用することを提案した。ラマ廟について修理と最低修理費を提案した。溥善寺(約二万円)、普樂寺(約六万円)、安遠廟(約三万円)、普寧寺(約十万円)、須弥福寿廟(約十五万円)、殊像寺(約八万円)、羅漢堂(約三十万円)、普陀宗乘廟(約十万円)、合計八十四万円とある。離宮と合わせて百万円となっていた。保存事業は修理計画(実測図+修理設計書)と修理工事の二つに分けて、十年を要する。修理計画が三年で、一つの建築には平均三カ月かかる。

伊東忠太の息子伊東祐信によると、昭和九年(一九三四)八月伊東忠太に依頼して、予算案を提出となった。この予算によれば、修理費総額で五百万円、十年―十五年で完成するという巨大な計画である。当時、戦争のため資金はなかなか調達できなかったが、廟の重修費は十年計画で百万円とみて年次計画を出した⁽⁹⁾。伊東忠太と関

野貞とが同時に提案したと考えられている。

また関野の調査帖のなかには満洲建築の保存に関する下書きが一通残っている。そこには予定していた調査者の名前も挙げられ、更に熱河以外の建築も保存することを計画していたことが判明する。調査帖によればこの保存計画の内約は、建造物踏査費六千円、踏査者は伊東忠太、関野貞、村田治郎、竹島卓一である。各人五十日で合計二〇〇日を踏査し、一日二十五円で、合わせて五千円とする。通訳は二人、各五十日で、一日二十円で、合わせて千円とする。保存計画費は二万五千円、修理費は十六万九千円で、そのうち、保存建造物は奉国寺、万仏洞、熱河離宮、喇嘛廟、朝陽塔であった。合計二十万円である。

このように調査帖からは、本格的な満洲全域建築遺跡の修理がスタートしようとしていた様子が浮かびあがる。

一九三四年九月、二回目の熱河調査に入った。調査帖によれば、九月十九日から二十四日まで、須弥福寿廟、承德離宮、離宮広元宮、離宮永佑寺、普寧寺、離宮中宮、正宮、東宮などを調査した。前回調査の補足として離宮を重点にした。二回目の調査以後、ますます応急修理の必要が感じられた。急がないと、「他日之に十倍し或いは百倍する費用と労力とををかけても或は到底所期の目的を達せられない」状態に陥るのではないかと考えた⁽¹⁰⁾。本格的に離宮と満洲建築の保存が推進されようとする矢先、一九三五年七月二十九日、関野

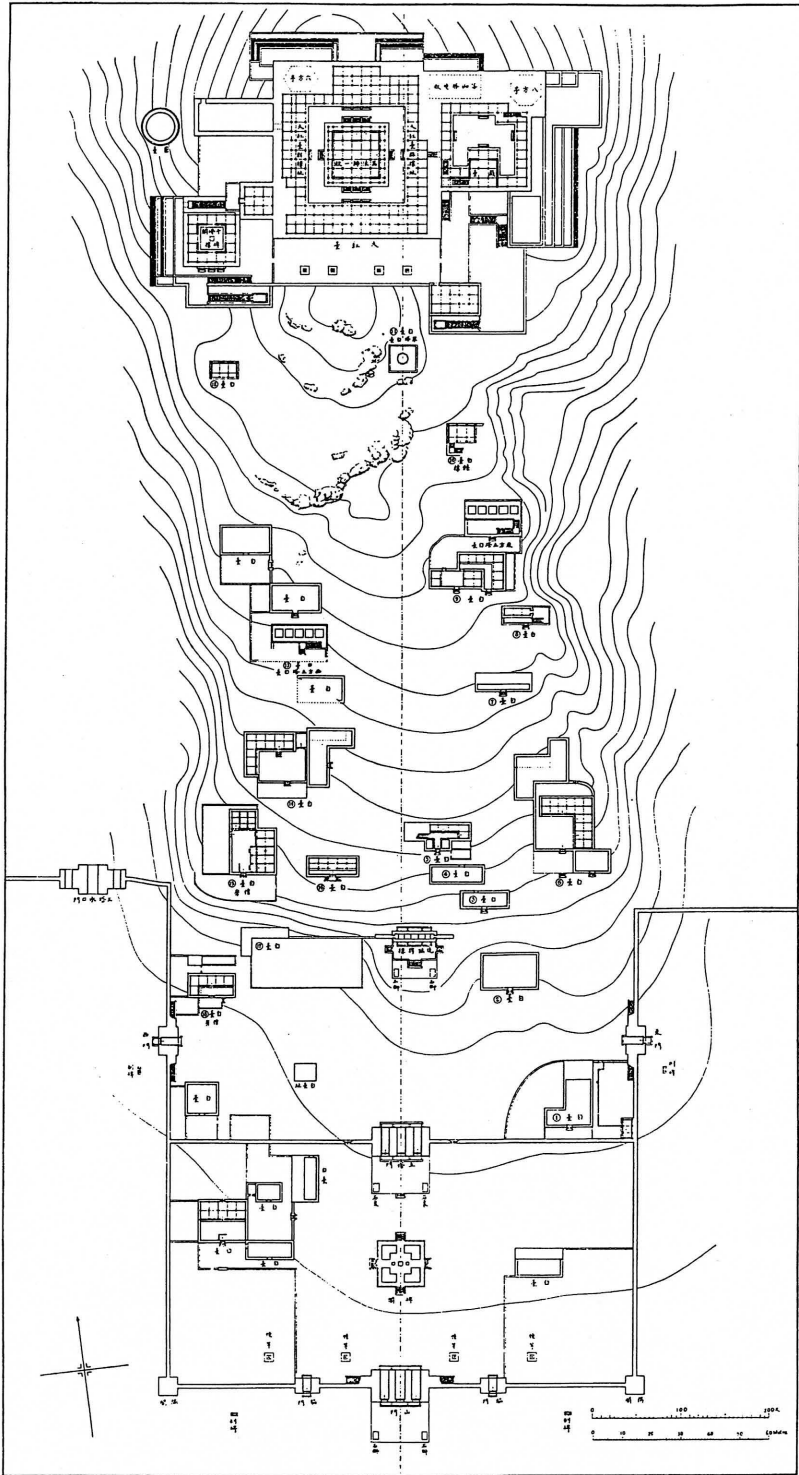


図21 熱河調査の実測図（『熱河』本文より）

貞は急逝した。残された研究成果として、六百枚の写真が収録された『熱河』(図版)、および助手の竹島が関野から引き継ぎ完成した『熱河』(解説^⑧)がある。

熱河遺構の保存について一九三五年伊東忠太を最高顧問とする技術者の一団六人が渡満した。その中には伊東忠太と彼の息子伊東祐信がいた。文教部熱河重修工務所が現地に設置され、五十嵐^{いがらしまた}牧太が所長となった。しかし、経費の問題から半年たらずで重修は無期限延期となった。

一九三六年、伊東は極力その実施を満洲国へ進言したが、役に立たなかった。理由は熱河遺跡は貴重であるには相違ないが、その保存事業は不急なことである、それは芸術や歴史に興味のある人の満足を買うに過ぎないものである、それよりもっと重大緊要な仕事の方へその経費を向けるのが今の急務であるといった主張だった^⑨。

一九三七年満洲国文教部が廃止され、元の民政部へ統合、民生部と改称した。その後「文教部熱河重修工務所」を「民生部熱河古跡特別調査所」と改称した。各廟建築について、立面実測製図をはじめ、配置図、平面図等が作製された。この図面は五十嵐牧太の『熱河古蹟と西藏芸術^⑩』に収録された。

結局、熱河の修復は調査段階のまま終戦を迎えた。

保存事業は文化入植の一環として朝鮮と同じように、「植民地」の満洲で進められた。一九三三年(大同二年)七月文教部は「古蹟

保存法」を公布、九月「古蹟保存法施行規則」を公布、一九三四年、古蹟の統計が纏められた。『第二次文教年鑑』(一九三四年)には調査の成果が記載されている。これによれば、満洲国の古蹟は五百七十一件にのぼり、古蹟、古物、名勝、天然記念物を合わせた総数は千五十四件であった^⑪。後に、『満洲国古蹟古物節録』と『選編満洲国名勝天然紀念物彙覽^⑫』が出版された。

一九三七年には重要古蹟の仮指定が行われ、一九三八年末までに古蹟百十三件ほか総数百八十二件を数えた。満洲国の古蹟修理について奉国寺大雄宝殿、熱河古蹟、輯安高句麗遺蹟、遼陽壁画古蹟、吉林永吉県円通寺が対象に挙げられた。

満洲で行われた保存事業の方法や、保存対象の選択基準は日本の影響を受けたもの、と田中禎彦が指摘している^⑬。それは植民地に典型的な特徴である。関野の一九一八年の保存提案と比較すると、植民地における保存事業が、より日本人主導になったことが指摘できよう。満洲の保存事業について、結果だけを強調するのは不十分で、植民地化の過程との関連を強調しなければいけない。

ここで、再び関野のアイデンティティーについて検討してみる。一つは、ナショナル・アイデンティティーが存在している。熱河の場合は英仏聯軍の円明園の破壊を例にして、

彼等(英仏聯軍)が自ら以て任ずる文明国人の行為として拭

ふべからざる汚点を史上に印すると共に、永く漢人の憎みをかったのである。余等は先年其址跡を調査して大いに義憤を感じざるを得なかった。然るに昭和九年三月、熱河肅然の軍を起すや皇軍の勇猛果敢なる行動は、幸にして他の一つの至宝を救ふことが出来た。

と関野は書いている。

日本の「勇猛果敢」、「至宝を救ふ」を讃美することは、関野の日本人としてのアイデンティティーを示している。それは一九一八年の保存提案の時のアイデンティティーと変わらない。

同じく熱河の保存に力を注いだが、関野のナショナル・アイデンティティーは、満洲国の皇帝である溥儀のアイデンティティーとは違う。伊東忠太は溥儀に拝謁したとき、「殿下も熱河の遺跡保存と云ふことは極めて大事なことであるから、宜しくやつて呉れと仰しやつたことは忘れない」と回顧し、保存に対する溥儀の熱意を伝えてきた。溥儀は清王朝を復興する夢を抱いていたが、黄色い龍袍を着るや、祖先の離宮を修復するのは王朝の復興の一つの象徴として考えたのであろう。

関野のアイデンティティーについてももう一つは、日本帝国主義の植民地進出と共に、文化面で日本の保存理念を積極的に満洲へ応用しようとしているという点である。彼には多くの日本人研究者と同

じく、本質的に植民地主義者の道具となっている面もある。

しかし論者は、関野は植民地の政策の制定者ではないと考えている。それゆえ、戦時には、研究者の無力さを露呈する。熱河の保存の問題について、満洲国当局は、それよりさらに重大かつ緊要な仕事へとその経費を振り向けるのが今日の急務であると主張した。関東軍は保存のために経費を支出する必要はないと考えていた。満鉄は満洲国は誠意がないため、お金を出しても、遺跡保護に使うとは限らないと拒否した。結局、熱河の保存事業は幻の計画で終わった。悲劇的なのは、一九四四年日本軍が熱河の珠源寺主殿宗鏡閣を取り壊し、軍需物資として使ったことである。宗鏡閣は重さ二百七トンの銅殿であり、木造様式を細かく刻んだ非常に珍しい建築である。それが戦禍によって失われたのは、この上なく遺憾な事態であった。満洲の保存事業は、各方面の政治的立場の対立が表れる場になった。関野は植民地を温床に大きな夢を育んでいたが、その夢も戦火で破れた。ちなみに、一九九四年、熱河離宮と外八廟は世界文化遺産に指定された。

十 ナショナリズムの循環

——大陸建築の影響の考証から
日本建築の進化思想まで

関野貞には体系化された研究は見当たらない、と故東京大学教授稲垣栄三博士は指摘している。確かに関野はもっぱら細かい様式の

問題や、寸法などに拘泥するが、しかし関野の亡くなる前年の一九三四年には『日本建築に及ぼせる大陸建築の影響』が出版されている。そこから中国建築研究、日本への影響そして日本建築の進化に関する関野の思想が見えてくるのではないかと論者は考えている。

(一) 日本建築に及ぼす大陸の影響

前述のように関野の中国建築研究の目的は一九〇八年に発表された「平城京および大内裏考」に明言されている。それは日本建築を解明するためであった。果たして日本建築と大陸建築との関係はどのようなものだったのか。それをこの本ははっきりと解明した。

そのため、関野は綿密な調査を行い、以下のような、朝鮮・中国の古建築に関する膨大なデータを集積して世に出している。

『支那歴代帝王陵の研究』（東方文化学院報告書）

『支那仏教史跡』（全六冊 解説付）

『支那文化史跡』（全十二冊 解説付）（後に再版『中国文化史跡』

（全十三冊 解説付））

『東洋建築』（伊東忠太共著）

『支那建築』（伊東忠太 塚本靖と共著 全二冊 解説付）

『熱河』（図版四冊）（竹島卓一と共著）

『熱河』（解説一冊）（竹島卓一と共著）

『遼金時代の建築と其仏像』（竹島卓一と共著 図版二冊）
『遼金時代の建築と其仏像』（竹島卓一と共著 本文）

これは中国の古来の史書、県志、府志、碑の建築の記録と異なり、中国古建築に関する最初の、図像化されたデータである。

現在、東京大学総合研究博物館には、関野らの調査による将来品として朝鮮・中国の古瓦、一千二百三十点、土器七百三十点、石碑百四十六点、拓本・模写などの巻物六百三十点、写真乾板二百九十箱、その他三千枚が収蔵されている。正確な史料の蒐集とその不断の検討により、自ずから歴史の全体像が見えてくることを考えての蒐集だったであろう。

結論として、関野貞は日本建築に大陸の及ぼす影響を以下のように纏めた。

・ 飛鳥時代…第一回 南朝式（梁式）の導入

・ 寧楽時代…第二回 唐式の導入

・ 鎌倉時代…第三回 宋式の導入

・ 江戸時代…第四回 明式の導入

まず、「我飛鳥時代の建築様式は百済の直系であって、百済の様式の源流は梁に在ったのであるから、我飛鳥時代の様式が百済を介して梁の系統に属することは明白である。」⁽⁴⁾その理由として関野貞は百済と高句麗との外交的対立の中に、中国北部様式が高句麗を経

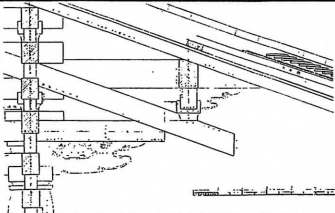
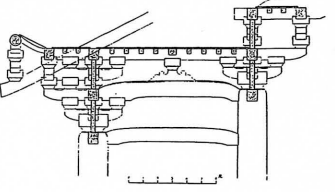
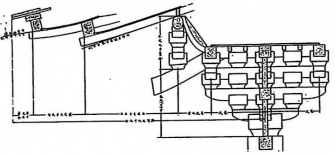
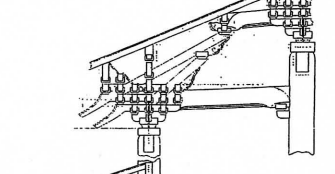
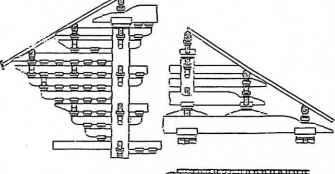
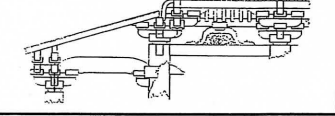
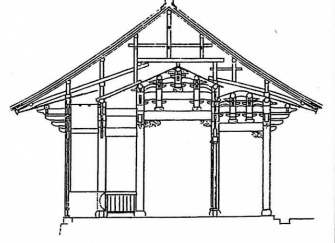
中国の影響を受けた時期	中国	日本	図版	組み物特徴
第一時期	南朝（梁）→	飛鳥式（飛鳥）→		飛鳥式：「斗に皿板の在ることと雲形肘木雲斗の在ることが飛鳥建築の特色である」①
第二時期	唐 ↓ 北宋	寧楽式（寧楽）→ ↓ 平安 ↓ 藤原 ↓ 和様（鎌倉）→	 	寧楽式（天平易）：「斗拱は前代と著しき相違を呈することになった。即ち最早雲形肘木・雲斗を用ひずして専ら普通の斗肘木を使用し、三手先の斗拱が十分の発達を遂げた、是は亦唐式の影響である」① 和様：「則藤原式建築は他の事実と共に全く天平易と同一系統に属する者にして唯其各部の発達整頓して完全の域に近きたる者」②
第三時期	南宋 ↑ 北方派 → ↓ 南方派 →	唐様（鎌倉）→ 天竺様（鎌倉）→ 和様新派（鎌倉）→	  	唐様：「肘木の削形は圓の一部となりて端に圓みを生じ、又尾垂木に鼻こき及びしのきを生じ」① 天竺様：「柱より挿肘木を幾手先も通出して軒を承くるのである。又其斗が悉く一種の削形を有するもの、従来のものと相違する」① 和様新派：「藤原系の和様に天竺様の細部を摂取し、更に固有の発展をなせし……和様建築に唐様の細部を加味した」①
第四時期	明 →	黄檗様（江戸）→		黄檗様：「天竺様の如く挿肘木を用ひ、巻斗には底辺に削形を作っている、又縦横に対角線に肘木を幾手先も出した極めて複雑した斗拱を用ふることもある」①

図22 日本木造建築の組み物における中国の影響（関野貞の『日本建築に及ぼせる大陸建築の影響』により作成：
注①『日本建築に及ぼせる大陸建築の影響』より、②「鳳凰堂建築説」より）

て日本に伝えられることはあり得ない、と判断した。日本の飛鳥時代の法興寺、四天王寺などの巴瓦にある蓮花文様は百済で発見された作例と完全に一致し、高句麗の旧都平壤から出土するものとは異なる。一方、百済の瓦は新羅の瓦と類似している。ここから関野は、百済の様式は新羅に伝えられたものと判断した。

梁と飛鳥との関係について、従来三つの説が立てられてきた。一番目は梁から北魏、そして高句麗、百済、日本へという経路。二番目は梁から百済、そして日本へという経路。三番目は梁から直接日本へという経路。一九七一年、百済の武寧王陵の発掘により、梁と百済との関係がさらに確認された。それにより、二番目の梁から百済、そして日本へという道筋が現在では有力な説となった。これは関野の説と一致している。ただ、現在の研究はより深化したものである。つづく寧楽時代の様式について、関野はこう述べる。

寧楽時代の初頭制度文物皆唐に倣ふと共に彼の建築様式を盛んに輸入し、為に飛鳥時代の様式は忽ち其影響を没することとなった。当時大陸建築の我建築界に及ぼせし重なる現象は主要左の如くである。(一) 唐式の輸入、(二) 平城京の経営、(三) 宮殿建築の発達、(四) 仏寺建築の興隆、(五) 百済式の山城。

第三に鎌倉時代の様式について、関野は中国の影響を二つに分け

る。天竺様(大仏様)と唐様(禪宗様)である。天竺様は中国の南方系建築であり、重源が中国南部の天童育王兩寺及び天台山から持ち帰った様式である。唐様は中国の北方系建築であり、栄西が入宋して持ち帰った様式である。

第四に江戸時代に黄檗様が明より長崎に輸入された。元和六年頃中国江西の劉寛が長崎に来て僧となり万福寺を創立した。

こうして日本建築と大陸との関係を考察した。彼の論説は基本的に現在建築史の定説になっている。

大きな時代区分だけではなく、様式的な細かい編年研究も行われた。関野は建築の配置、平面、組み物、屋根、窓、柱、装飾、瓦などの編年を纏めた。図22に挙げたのは、関野の理論に基づいて木造建築の組み物の変化を纏めたものである。このように細かい編年研究が得意なのは関野であろう。勿論、一九三三年、伊東忠太と飯田須賀斯は「支那建築における日本建築の影響」を東方文化学院の研究テーマとして研究を行ったが、正式の研究成果『支那建築の日本建築に及ぼせる影響』(飯田須賀斯著)を出版したのは一九五三年、関野の十九年後のことである。しかも緻密なディテールの分析からも関野の研究の影響を垣間見ることができる。

(二) 日本建築の進化思想

ここで重要なのは、日本が中国の文化を受容するとともに、それ

に続いて、中国文化を「日本化」して、日本文化を生み出したことを関野が強調し、評価した点である。

明治時代の進化主義の建築方面への浸透は、伊東忠太が明治四十二年（一九〇九）に発表した「建築進化の原則より見たる本邦建築の前途」から窺える。彼は建築のスタイルの変遷を三つのパターンに分類し、進化主義、折衷主義、帰化主義と名付けた。彼が言う「進化主義」というのは、思想が自然と進化発達するようなもので、他の文化の感化も受け、「善悪邪正を取捨する能力がある」とするものである。進化論の影響を受けたのであろう。折衷主義は二つのスタイルをつき交えてできたものを指すが、見識がない人が甲乙の説を半分ずつ取ったものを指している。帰化主義は圧制的に他のスタイル（影響源）に帰依することを指している。

この三つのパターンの中で日本建築をどのように位置付けるかについて、日本は中国建築を模倣したが、「出藍の誉れ」あり、と伊東は強調した。つまりは、進化主義のタイプであることを論じた。建築の進化主義を緻密に証明しようとしたのが関野貞である。

関野は結論の部分でこのように書いた。

我国の建築界は古来幾たびかは大建築の輸入により停滞頽唐の弊を免かれしのみならず、我国民は其新たに入り来りしものを忽ち消化して新しき血液を作るに成功した。是れが即ち

所謂日本化にして、彼と趣味精神を異にせる我固有の特質を十分に發揮したのである。

また、彼は『日本建築史』の中でも日本建築についてこう書いている。

また日本建築の表現するところの特質は、優雅・洒脱・簡淨にしてかつ自由なれども、シナ建築・西洋建築は雄麗・厳正・濃厚で我と著しくその趣味を異にしている。要するに日本建築はその構造において、その性質において、西洋建築と相反する両極端にありて、世界の建築界に一異彩を放ち、特殊の地位を占めむものである。

このような論説は一九三三年、日本が国際連盟から脱退し、アジア主義を唱え、軍国主義の台頭を招いた経緯と奇妙にも一致している。明治以後日本はナショナリズムと西洋主義との間で動揺し、ナショナリズムの頂点は日清戦争の後と一九三一—一九四五年に見られるが、特に第二回目が突出している、と日本の研究者は指摘している。興味深いのは関野貞の東洋建築史研究の起点と終点が、この二回のナショナリズムの頂点に符合することである。

終わりに

本稿では、関野貞の前後十回にわたる中国調査の内容を解明した。さらに、この解明作業を通じて、中国側との関係、ナショナル・アイデンティティーの問題、植民地問題などを取り入れて、総合的に関野の中国建築研究を考察することを試みた。

これまで近代の日本の植民地人類学史、考古学史、建築学史に対して、一方で純学術的な面を強調した評価が定着してきた。関野貞についても「明治末年から昭和初めにかけて、日本のみならず朝鮮中国、インドなど東洋各地を実地に精査して、建築史、美術史、考古学など幅広い学問分野において多くの優れた業績をのこし、近代的な研究基礎を築いた碩学である。」と評価している。もう一方の極として、政治的な判断から、アカデミックな学術成果をも忌避し、かつて存在していた中日学術交流の実態に目をつぶり、言及を避ける、という傾向もあった。これでは日本による東洋建築史研究など、存在していないと同然である。しかしメディア時代の到来とともに、歴史認識の中韓日間のズレが、対話の最大の困難として意識されるに至っている。また、こうした傾向は、植民地時代の研究者の人物及び仕事を正面から評価することを妨害する。さらに近年、ポスト・コロナル研究は世界的な反響を呼んで、各国の植民地研究を推進した。建築史学史にもまた新たな局面が開かれることが期待出

来る。

実は建築においても、ポスト・コロナル現象は既に起こっている。韓国の総督府は取り壊されたが、対照的に、上海のバンドでは植民地建築を利用して、APEC首脳会議の開催のため、盛大な花火セレモニーが行われた。かつての植民地建造物を再利用し、二十一世紀中国を世界にアピールし、中国伝統の花火と「九・一一」の爆発を重ねあわせ、いわゆる「和平」と「戦争」との対比を訴える等、様々な意味が含まれていた。中韓両国政府の方針の違いは、すでに植民地時代の建築についてポスト・コロナルな対応が迫られていることを示している。同じように、植民地時代の建築研究者と建築研究をいかに批判的に再評価し、その再利用の可能性を探るのかについても、避けられない議論を呼ぶことだろう。

ここでこのような問題意識に立って、関野貞の中国研究について私見を述べる。

関野貞は複合的な側面を持っている、と論者は考えている。彼は著名な建築史家、美術家、考古学者であると共に、明確なナショナル・アイデンティティーを持つ民族主義者である。彼は植民地政策の道具であり、犠牲でもある。彼は東洋芸術に対して情熱と献身的精神を持つ研究者だった。ただその「情熱」と「献身的精神」は、日本文化の優秀性を証明するための努力に向けられる傾きがあった。彼の中国建築研究は、日本の植民地政策によって輝いたが、最も重

要な研究成果が植民地戦争によって失われもした。彼自身がこの時代の悲劇を体现している。

関野の中国建築研究は先駆的な成果と言える。まず、関野貞は美術史的観点から建築を見ていたことが指摘できる。特に究極的な様式論から建築を考察するのは、関野に独自のものである。伊東忠太と比較してみると、関野は大きな理論構図よりも個別的なものを考察する点により秀でている。また、膨大な中国建築資料を作製して、貴重な資料を残した。もし植民地時代のものを再利用するについて、歴史認識上の障碍さえ克服できるならば、このような二十世紀前半の建築に関する図像データを、将来において古建築の修復、復原作業に応用することも、充分可能だと論者は考えている。

研究方法についても、従来の伝統的な文献的研究に加え、新たにフィールドワーク、写真撮影、実測、発掘などを併用したのが関野貞の研究の特徴であろう。彼の研究方法は日本や中国、韓国の近代考古学にも影響を与えた。この点について、日本のある考古学史家は最新の研究で高く評価している⁽⁸⁾。

関野の時代は日本の学問ジャンルの近代における再編成の時代であり、彼の研究の影響は中国にも及んだので、中国建築史学史に欠かせない一頁である、と考えている。ただ、なぜこの一頁が書かれたか、どのような時代背景で書かれたかなどの問題を、膨大な業績とワンセットで問い直してゆく必要があると考えている。

注

- (1) 柳沢遊・岡部牧夫編『帝國主義と植民地』（東京堂出版、二〇〇一年）は、その一部に帝國主義と植民地研究に関する文献目録を掲載している。
- (2) 劉建輝「精神の「脱亜」―近代日本におけるナショナル・アイデンティティの成立とその射程」（園田英弘編著『流動化する日本の「文化」―グローバル時代の自己認識』日本経済評論社、二〇〇一年）八二―八三頁を参照。
- (3) 日本建築学会『近代日本建築学発達史』丸善、一九七二年、一六九二頁
- (4) 関野貞「平城京及大内裏考」（『東京帝国大学紀要工科第3冊』一九〇七年六月）
- (5) 注（4）前掲論文、一六二―一六四頁
- (6) 注（4）前掲論文、一七五―一七八頁
- (7) 関野貞「北支那古代文化の跡」（『禪宗』第二十五卷第二八一号、一九一九年八月に初出）『支那の建築と芸術』（岩波書店、一九三八年九月）所収、六二五頁
- (8) 注（4）前掲論文、一六四頁
- (9) 注（4）前掲論文、一七八頁
- (10) 東洋文庫近代中国研究委員会編『明治以降日本人の中国旅行記』東洋文庫、一九八〇年三月
- (11) 足立康『法隆寺再建非再建論争史』（龍吟社、一九四一年）を

参照。

- (12) 塚本靖『東洋学芸雑誌』第二十五卷第三二一、三二二、三二四、三二五号、一九〇八年六、七、九、十月
- (13) 塚本靖『東洋学芸雑誌』第二十五卷第三二四号、一九〇八年九月、四〇五頁
- (14) 関野貞『地学雑誌』第十九卷第二二二号、一九〇七年六月、三六八—三六九頁
- (15) 関野貞「薬師寺金堂及び講堂の薬師三尊の製作年代を論ず」『史学雑誌』(第十二編四号、明治三十四年四月に初出)、『日本の建築と芸術』下(岩波書店、一九九九年十月)
- (16) 注(15) 前掲書、三七三頁
- (17) 大橋一章「白鳳彫刻論」『仏教芸術』二二三号、一九九五年十一月、三七—五六頁
- (18) 注(15) 前掲書、三七四頁
- (19) 岡倉寛三著「支那旅行日誌(明治二十六年)」隈元謙次郎ほか編集『岡倉天心全集』五、東京、平凡社、一九七九年、五一頁引用は原文通り。漢文調カタカナ表記にひらがな表記が混在する。
- (20) 注(19) 前掲書を参照。
- (21) 調査帖がないため、日付は「後漢の画像石」『文芸週報』(第一一七号、一九〇八年八月五日)を参照した。
- (22) 関野貞「山東省における南北朝及び隋唐の彫刻」『国華』第二十六編、第三〇八、三一〇、三一三号、一九一六年一、三、六月
- (23) 注(22) 前掲書、五六〇頁
- (24) 注(22) 前掲書、五五一頁

- (25) 注(22) 前掲書
- (26) 注(19) 前掲書を参照。
- (27) 吉田千鶴子「大村西崖と中国」『東京芸術大学美術学部紀要』第二十九号、一九九四年三月
- (28) 大村西崖『支那美術史彫塑編』仏書刊行会図像部、一九一五年、四二三頁
- (29) 注(28) 前掲書
- (30) 関野貞「飛鳥時代の彫刻」平安考古会編『聖徳太子論纂』(平楽寺書店、一九二一年三月) 所収。関野貞「奈良時代の彫刻」太田博太郎編『日本の建築と芸術』下(岩波書店、一九九九年十月) 所収、二七六—三〇九頁
- (31) 原題「寧楽時代の彫刻」朝日新聞社編『天平の文化』(朝日新聞社、一九二八年) 所収。注(30) 前掲『日本の建築と芸術』下、三三—三三四頁
- (32) 岡倉天心の『日本美術史』講義は、東京美術学校開校の翌年、明治二十三年より三年間に亘って行われた。この講義の六種の筆記録が発見されているが、さらに活字化されたものとして、日本美術院編『天心全集』所収「日本美術史」(大正十一年九月)が初めて出版された。
- (33) 注(17) 前掲書、四〇頁
- (34) 八木槇三郎(一八六六—一九四二)は、江戸(東京)で生まれた。一八九一年東京帝国大学理科大学人類学教室に奉職。一八九八年『日本考古学』を出版。一九一三年李王職博物館の嘱託として勤めている。同年には『朝鮮古墳壁画写真集』も彼に負うところがあった。

- たが、同年七月には咸鏡北道の石器時代の遺跡を調査した。また陶窯跡などを調査、朝鮮考古学に貢献した。一九一八年に満鉄總裁室弘報課に勤め、満洲考古学の研究に多数業績を残した。一九二四年『満洲旧蹟志』上巻、一九二六年に下巻を満鉄弘報課で出版した。一九三二年満鉄弘報課で『支那住宅誌』を出版した。
- (35) 関野貞は開城、黄城、平壤、義州、安州、寧辺など現在朝鮮側の地域を調査し、同時に、京城、広州、楊州、江華、水原、公州、恩津、扶余、大邱、永川、慶州、蔚山、梁山、釜山、などの地域も調査した。調査対象は宮殿、城郭、官衙、寺廟、書院、陵墓、塔、仏像、銅鐘、刹竿、碑、香炉、書画などを含めている。彼は建築を四類に区分した。
- (36) 関野貞「楽浪郡治遺址」『建築雑誌』第四三五号、一九二二年九月、三五九—三六五頁
- (37) 今日の北朝鮮との国境付近に位置する吉林省集安、通溝、洞溝とも称える。
- (38) 鳥居龍蔵「南満洲調査報告」(一九一〇年)『鳥居龍蔵全集』十、朝日新聞社、一九七六年、九八—九九頁
- (39) 朝鮮総督府編『朝鮮古蹟図譜』一—三を参考
- (40) 内田好昭「日本統治下の朝鮮半島における考古学的発掘調査(上)」『特集 関野貞と朝鮮古蹟調査』『考古学史研究』第九号、二〇〇一年五月、六九—七四頁
- (41) 関野貞「満洲の建築と古蹟」『支那の建築と芸術』岩波書店、一九三八年九月、三六九頁
- (42) 注(41) 前掲書、三七—三七二頁
- (43) 注(41) 前掲書、三七—三七二頁
- (44) 注(41) 前掲書、三七二頁
- (45) 鳥居龍蔵「鴨緑江上流に於ける高句麗の遺跡」『南満洲調査報告書』東京帝国大学、一九一〇年初出、注(38) 前掲書、九五—一〇三頁
- (46) 鳥居龍蔵「丸都城及び国内城の位置に就きて」『史学雑誌』第二十五編第七号、一九一四年七月、三六—六二頁
- (47) 那珂通世「朝鮮古史考」『史学雑誌』第五編第九号、一八九四年、三五—四八頁
- (48) 松井等「国内城の位置に就きて」『東洋学報』第二卷第二号、一九一一年、七四—七七頁
- (49) 那珂通世「朝鮮古史考」『史学雑誌』第五編第九号、一八九四年、三五—四八頁
- (50) 小川柳波「丸都古碑考」『日本及び日本人』第四六一号
- (51) 注(48) 前掲論文、七四—七七頁
- (52) 田村晃一「楽浪と高句麗の考古学」同成社、二〇〇一年四月、二三五頁
- (53) 関野貞「満洲輯安県及び平壤付近に於ける高句麗時代の遺蹟」『考古学雑誌』第五卷第三、四号、一九一四年、第三号、一—三五頁、第四号、一—二二頁
- (54) 関野貞「国内城及丸都城の位置」『史学雑誌』第二十五編第十号、一九一四年、一—三五頁
- (55) 注(54) 前掲論文、一三八四頁
- (56) 関野貞「丸都城考」(朝鮮総督府編『大正六年古蹟調査報告』

- 一九一八年三月に初出)、『朝鮮の建築と芸術』(岩波書店、一九四一年八月)所収、三〇九頁
- (57) 白鳥庫吉「丸都城及国内城考」『史学雑誌』第二十五編第四、五号、一九二四年、第四号、一八一—四二頁、第五号、三〇—五二頁
- (58) 注(54)前掲論文、一三七—一七頁
- (59) 池内宏『満洲国安東省輯安県高句麗遺蹟』日滿文化協会、一九三六年六月
- (60) 池内宏・梅原末治『通溝』日滿文化協会、一九三八年
- (61) 注(59)前掲書、九頁
- (62) 田村晃一『楽浪と高句麗の考古学』同成社、二〇〇一年四月、一三五頁
- (63) 中塚明『近代日本の朝鮮認識』研文出版、一九九三年二月、一四七頁
- (64) 注(63)前掲書、「近代日本史学史における朝鮮問題——とくに「広開土王陵碑」をめぐる——」一七四—一七六頁を参照。
- (65) 一九〇六年輯安を調査、E. Chavannes “Les monuments de l'ancien royaume Corée de Kao-Keou-li,” *Toung Pao*, (通報) 11-IV, 一九〇八年、に発表。
- (66) 旅行の状況は「西遊雑信」(『建築雑誌』第三八四号、一九一八年十二月。第三九三号、一九一九年九月。第三九七号、一九二〇年一月)に書いている。
- (67) 常盤大定と共著、全六冊
- (68) 伊東忠太、塚本靖と共著、全二冊
- (69) 関野貞「天龍山石窟」『支那の建築と芸術』岩波書店、一九三

- 八年九月、五一—八頁
- (70) 外村太治郎「天龍山石窟」金尾文淵堂、一九二三年
- (71) 関野貞「支那文化の遺跡とその保存」(『大観』一九二〇年七月初出)。「支那の建築と芸術」(岩波書店、一九三八年九月)、四二〇—四三二頁
- (72) 「敦煌石室書目及発見之原始」(『東方雑誌』第六卷第十号、一九〇九年十一月七日、雜纂四二頁)、「莫高窟石室秘録」(『東方雑誌』第六卷第十一号、一九〇九年十二月七日、雜纂五五頁)、「莫高窟石室秘録」(『東方雑誌』第六卷第十二号、一九一〇年一月、雜纂八一頁)を参照。
- (73) 内政部年鑑編纂委員会『内政年鑑』三、商務印書館、一九三六年、一四八頁
- (74) 「通飭查報保存古跡」『大公報』一九一〇年十二月十七日
- (75) 撫東使者錢塘孫宝、宣統二年歲次庚戌夏六日(一九一〇年七月)月
- (76) 袁樹勳「山東巡撫袁樹勳奏東省創設圖書館併付設金石保存所」、一九〇九年、原載は『京報』宣統元年二月初九日。李希泌、張淑華編『中国古代藏書与近代圖書館』(中華書局、一九八二年に転載)、一四三頁
- (77) 関野貞「後漢の画像石」『文芸週報』第一一七号、一九〇八年八月五日
- (78) 注(77)前掲書
- (79) 「關於中国古物被盜之談片及紀事」(『東方雑誌』第十卷第十二号、一九一四年六月一日)、『内外時報』三四頁)、「論中国古碑被盜」

- 『東方雜誌』第十卷第十二号、一九一四年六月一日、『内外時報』三六頁
- (80) 注(73) 前掲書、一一〇頁
- (81) 注(73) 前掲書、一四九頁
- (82) 注(73) 前掲書、一五三頁
- (83) 章錫琛「欧美天然紀念物之保護」(『東方雜誌』第十二卷第四号、一九一五年四月一日、八頁)
- (84) 外交部訳発「馬克密君保存中国古物弁法之函件」(『東方雜誌』第十一卷第六号、一九一四年十二月一日、『内外時報』一五頁、『外交部訳発馬克密君保存中国古物弁法之函件』(『国学雜誌』第五号、一九一五年十一月)
- (85) 関野貞「支那文化の遺跡とその保存」(『大観』一九二〇年七月に初出)、『支那の建築と芸術』(岩波書店、一九三八年九月)所収、四二五—四二六頁
- (86) 注(85) 前掲書、四一七頁
- (87) 関野貞、竹島卓一共著『熱河』座右宝刊行会、一九三七年、二二四頁
- (88) 注(85) 前掲書、四二四頁
- (89) 注(2) 前掲書、九一頁
- (90) 興亜宗教協会『河北省山東省における重要古跡古物』新民印書館、一九四一年八月
- (91) 関野貞『建築の歴史学者関野貞』上越市立総合博物館、一九七八年十月、二三頁
- (92) 高木博志「陵墓の近代—皇霊と皇室財産の形成を論点に」篠原徹編『近代日本の他者像と自画像』柏書房、二〇〇一年
- (93) 関野貞「支那の陵墓」(『歴史地理』第十一卷第五号、一九〇八年五月初出)、『支那の建築と芸術』岩波書店、一九三八年九月
- (94) 注(85) 前掲書、四一八頁
- (95) 注(93) 前掲書、九六頁
- (96) 注(19) 前掲書、二〇一頁
- (97) 二〇世紀初めころから、日本の鉄道技師も日本教習(清末に中国政府が中等、高等教育機関に雇った日本人先生を指している)と同じように中国に入り、北方鐵路、湖北鐵路、浙江鐵路、閩内外鐵路、安徽、江西、粵漢鐵路でお雇い外国人として勤めている。老田太文は東京帝国大学土木科を明治三十五年に卒業、一九〇三年粵漢鐵路技師、一九〇四年奉天で鐵路副工司、一九〇七—一九〇八年京奉線技師、西潼鐵路技師(西安)であった。西潼鐵路技師の時外工夫(助手と考えられる人物)一人、阿部正二郎は工夫と考えられる。
- (98) 高等学堂教習(お雇い日本人先生)、後に長安の都市を研究する。著書に、『長安史蹟の研究』(一、二、東洋文庫、一九三三年、東洋文庫論叢二十之一、二、東洋書林、一九八三年)、『考証法顯伝』(三省堂、一九三六年)、『大唐西域記の研究』(上巻、下巻、法藏館、一九四二年)、『法顯伝 中亜・印度・南海紀行の研究』(法藏館、一九四〇年)。その他翻訳は『讚觀音大士伽陀集』(足立喜六訳註、広島観音会、一九三三年)、『大唐西域求法高僧伝』(義浄著、足立喜六訳註、岩波書店、一九四二年)、『入唐求法巡礼行記』(円仁著、足立喜六訳註、塩入良道補註、一、二、平凡社、一九七〇年『東洋文庫』一五七、四四二)

(99) 外務省外交資料館資料による。

(100) 注(93) 前掲書、二〇二頁

(101) 関野貞「後漢の画像石」『文芸週報』一九〇八年八月五日

(102) 注(101) 前掲新聞

(103) 注(101) 前掲新聞

(104) 注(101) 前掲新聞

(105) 注(101) 前掲新聞

(106) 日本外務省文化事業部『対支文化事業ノ概要』一九二七年、三—四頁

(107) 台北、伝記文学社、一九七一年影印、丙編、一一二—一一五三頁、陶英恵「抗戦前十年の學術研究」中央研究院近代史研究所編『抗戦前十年国家建設史研究会論文集 一九二八—一九三七』上、

一九八六年、七三—七四頁

(108) 関野貞「支那内地旅行談」外務省文化事業部講演、一九三一年七月二十七日、『支那の建築と芸術』(岩波書店、一九三八年九月)所収。

(109) 注(73) 前掲書、二四三頁

(110) 小林胖生「東陵発掘の真相」『歴史と地理』第二十四卷第一号、一九二九年七月、六五—七八頁

(111) 注(108) 前掲書、八〇三頁

(112) 徐鴻宝、字は森玉、一八六九—?、浙江省興興県の人、举人。

山西大学堂を卒業、奉天將軍署で文案を担当、奉天測図局長、高等工業学校監督、江蘇工業学校監督、学部図書館編訳員、北京大学図書館館長、京師図書館主任、国立京師図書館部主任、国立北平図

書館採訪部主任。

(113) 注(108) 前掲書、七九三頁

(114) 竹島卓一による荒木清三の資料由来についての説明より。この説明は東京大学東洋文化研究所に所蔵。

(115) 竹島卓一「風水説と支那歴代の帝王陵」、『東亜学』第二号、一九四〇年二月、二〇七—二五〇頁

(116) 注(108) 前掲書、一〇二頁

(117) 関野克「建築の歴史学者関野貞」上越市立総合博物館、一九七八年十月、二三頁

(118) 「特集 関野貞と朝鮮古跡調査」(『考古学史研究』第九号、二〇〇一年五月)を参照、また、Hyung Il Pai, *Constructing "Korean Origins"*, Harvard University Asia Center, 2000 を参照。

(119) 「韓国建築調査報告」『東京帝国大学工科大学學術報告』第六号、一九〇四年、五八頁

(120) 注(93) 前掲書、四二頁

(121) 注(118) 前掲「特集 関野貞と朝鮮古跡調査」、五九—九〇頁

(122) 朱希祖ほか編『六朝陵墓の調査報告書』中央古物保管委員会、一九三五年、一頁(『国民叢書 第四編 八十七』上海書店、影印。今西龍(二八七五—一九三二)は、関野と一緒に朝鮮陵墓を発掘した人。詳しい履歴については、田中駿明の「今西龍」(『江上波夫』『東洋学の系譜』二 大修館書店、一九九四年九月、五八—六七頁)を参照。

(123) 関野貞「薊県独楽寺—支那現存最古の木造建築と最大の塑像—」(『美術研究』第八号、一九三二年八月に初出)、『支那の建築と

- 芸術「岩波書店、一九三八年九月」所収、二五三―二五四頁
- (124) 注(108) 前掲書、八一四頁
- (125) 竹島卓一『遼金時代の建築と其仏像』龍文書局、一九四四年、自序、一頁
- (126) 関野貞「鳳凰堂建築説」『建築雑誌』第一〇二号、一八九六年、一二二―一四一頁
- (127) 関野貞「日本建築に及ぼせる大陸建築の影響」『岩波講座日本歴史』第11、岩波書店、一九三四年、三六―三七頁。また、関野貞「鳳凰堂建築説」『建築雑誌』第一〇二号、一八九六年六月、一三四頁を参照。
- (128) 関野貞「薊県独楽寺―支那現存最古の木造建築と最大の塑像―」『美術研究』第八号、一九三二年八月初出、「支那の建築と芸術」(岩波書店、一九三八年九月)所収、二五九頁
- (129) 注(3) 前掲書、一六九七頁
- (130) 「北清建築調査報告と実測図」『建築雑誌』第一八九号、一九〇二年九月、二五三―二八四頁
- (131) 注(85) 前掲書、四二〇頁
- (132) 関野貞「大同大華嚴寺」『建築雑誌』第三十八輯第四六四号、一九二四年十二月初出、「支那の建築と芸術」(岩波書店、一九三八年九月)所収、二九四頁
- (133) 調査帖「大華嚴寺」大正十五年(一九二六)二月九日
- (134) 注(132) 前掲書、二九五頁
- (135) 村田治郎「支那山西省大同の大華嚴寺」『建築学研究』第五十四号、一九三三年七月、四一五―四三八頁
- (136) 日本建築学会『建築学の概観』日本學術振興會、一九五五年
- (137) 村田治郎「中国建築史叢考 仏寺仏塔篇」中央公論美術出版、一九八八年三月、四七頁
- (138) 注(132) 前掲書、二九六頁
- (139) 「文物參考資料」一九五四年二月
- (140) 注(128) 前掲書、二六四―二六五頁
- (141) 注(128) 前掲書、二六六頁
- (142) 注(128) 前掲書、二六六頁
- (143) 朱啓鈐「中国营造学社緣起」『中国营造学社彙刊』第一卷第一期、一九三〇年七月、一頁
- (144) 「建築雑誌」第五二〇号、一九二九年四月
- (145) 橋川時雄(一八九四―一九八二)は当時、中国营造学社の參校、詳しい履歴については、今村与志郎による「橋川時雄」(江上波夫『東洋学の系譜』二 大修館書店、一九九四年九月、一八六―一九五頁)を参照。
- (146) 松崎鶴雄(一八六七―一九四九)は、一九三〇年中国营造学社に入社、一九三四年退社、論文に「雲居寺の石經と房山諸碑」(『亜東』第四卷第四号、一九二七年四月)など。
- (147) 關鐸(一八七五―一九三四)の字は霍初、号は無水である。安徽省合肥の出身で、一九〇四年十一月に公費で日本留学、まず弘文学院で学び、それから東亜鉄道予科に進学、一九〇六年十月に正式に東亜鉄道学校へ進学。一九〇九年卒業した。なお東亜鉄道学校は一九〇六年に創設され、「中国人留学生のため設置された鉄道学の教育を主旨にして、高等工業専門学校も設置された」学校である。

関鐸はこの学校の最初の卒業生の一人である。帰国後、清学部卒業認定書を得る。番号は一二三九である。彼の留学期間は丁度、伊東忠太の中国調査の情報様々な雑誌で報道された時期であったし、関野の朝鮮に関する研究も影響力を持っている時期であった。民国後、北京政府交通部の秘書（一九一四年）、全国煙酒事務署秘書（一九二四年）、臨時参政院参事（一九二五年）、公民政府司法部總務庁庁長（一九二七年）を歴任した。朱啓鈴が『营造法式』の『陶本』を整理するとき、校訂に参加した。营造学社創立初期にあつて、関鐸は例外的な建築者と言える。彼は留学経験があり、日本語も上手で、日本との交流に欠かさない人物となった。

(148) 『建築学会會員住所姓名録』一九〇三—一九一六年

(149) 『中国营造学社彙刊』（第一卷第二期、一九三〇年十二月）。また『建築雑誌』（第五三七号、一九三九年九月）も掲載。

(150) 『中国营造学社彙刊』第二卷第三期、一九三一年十一月

(151) 伊東忠太の息子の妻、伊東知恵子による伊東忠太の手紙。この手紙は現在日本建築学会所蔵。

(152) 陳植『園冶注釈』中国建筑工業出版社、一九八一年十月

(153) 伊東忠太・関野貞・塚本靖共著、建築学会、一九二九年

(154) 注(114) 参照。

(155) 劉敦楨（一八九七—一九六八）は、湖南省の人、一九二一年東京高等工業学校を卒業、蘇州工業専門学校、湖南大学、中央大学の教授を歴任、一九三一年中国营造学社に入社、中国の著名な建築史家。

(156) 竹島卓一「熱河・承德を想う」尾島俊雄ほか編訳『承德古建

築』毎日コミュニケーションズ、一九八二年、二〇二頁

(157) 林洙『大匠の困惑—建築師梁思成』天津市科学技术出版社、一九九六年七月、二三頁

(158) 費慰梅著、曲瑩璞、関超ほか訳『梁思成と林徽因』中国文联出版公司、一九九七年九月、六六—六七頁

(159) 『中国营造学社彙刊』第三卷第二期、一九三三年六月

(160) 何遂（一八八七—一九六八）は福建閩侯の人、林覚民と一緒に革命に参加、陸軍大学第一期卒業、一九一三年袁世凱討伐に失敗、日本で政治経済を学ぶ。一九一六年第一次世界大戦の時、日、米、ドイツ、フランス、イギリス、など訪問。帰国後、陸軍第十五混成旅団参謀長、国民軍第三軍参謀長を歴任、一九二四年北京航空署署長など、北伐後黄埔軍官学校教育長、一九三一年立法院立法委員。

(161) 『中国营造学社彙刊』第二卷第二期、一九三一年九月、本社記事

(162) 関野貞「古瓦模様沿革考」『建築雑誌』第一五八号、一九〇〇年二月、三〇—三三頁、以下連載四回

(163) 関野貞「支那の瓦及び磚」『世界建築』第十九卷第一号、一九二五年一月、以下連載八回、注(85) 前掲書、一〇三—一四六頁

(164) 『中国营造学社彙刊』第三卷第二期、一九三二年六月、一〇—一二三頁

(165) 注(108) 前掲書、七九三頁

(166) 注(156) 前掲書、二〇一頁

(167) 『建築史研究』第一七号、彰国社、一九五四年十月、三四頁

(168) 東方文化学院東京研究所編『東方文化学院東京研究所開所式記

事」(一九三三年十一月十九日、一四頁)により、山東出兵の事件で北京の東方文化事業総委員会中国側の委員は全員脱退した。他の組織も共同研究を中止した。

(169) 林洙『叩開魯班的大門—中国营造学社史略』中国建筑工业出版社、一九九五年十月、五二—五三頁

(170) 溝口雄三の講演「中国近代を俯瞰する縦帯と横帯の視座」国際日本文化研究センター、二〇〇二年一月十八日

(171) 満鮮歴史地理調査部が一九〇九年一月に東京麻布区に創立された(鶴見祐輔『後藤新平』二、後藤新平伯伝記編集会、一九三七年七月)。後に一九〇八年九月に東亜経済調査局を設立した。白鳥庫吉は調査部を主宰し、部員は池内宏(一八七八—一九五二)、稲葉岩吉(一八七六—一九四〇)、瀬野馬熊、津田左右吉、松井等(一八七七—一九三七)、箭内互(一八七五—一九二六)、和田清(一八九〇—一九六三)らであった。その内に、稲葉岩吉、箭内互、池内宏、津田左右吉は文学博士の学位を得、箭内、池内、和田の三名は帝国大学教授に、稲葉、瀬野の二名は朝鮮史編修官に、津田、松井の二名は早稲田大学教授、国学院教授に任ぜられた。

(172) 『建築雑誌』第十二輯第一三五号、一八九八年三月、七二—八八頁

(173) 『建築雑誌』第十八輯第二一五号、一九〇四年十一月、三八—五三頁

(174) 『歴史地理』第七卷第十二号、一九〇五年十二月、一一—〇頁

(175) 『東洋報』第一号、一九〇九年十二月

(176) 京都帝国大学工学部建築学教室編、清閑社、一九四四年九月

(177) 『満洲歴史地理』(上 序)(南満洲鉄道株式会社歴史調査報告第一、南満洲鉄道、一九一三年九月、二—五頁)

(178) 唐は至徳二年(七五七)に五京を設置、中京は京兆府、西京は鳳翔府、南京は成都府、東京は河南府、北京は太原府であった。

(179) 渤海国の上京龍泉府(今黒龍江省寧安西南東京城鎮、中京顯徳府(今吉林省敦化市敖東城)、東京龍原府(今吉林省琿春市八連城、南京南海府(今北朝鮮咸鏡南道咸興付近)と西京鴨緑府(今吉林省渾江市境内)。遼の上京臨陽府(今内蒙古巴林左旗東南浪羅城、中京大定府(今内蒙古守城西南大明城)、東京遼陽府(今遼寧省遼陽)、南京析津府(今北京)、西京大同府(今山西省大同)。金の上京会寧府(今黒龍江省阿城市白城)、中京大定府(今内蒙古守城西南大明城)、東京遼陽府(今遼寧省遼陽)、南京開封府(今河南省開封)、西京大同府(今山西省大同)

(180) 『史学界』第一巻第四号、一八九九年五月、三四五—三五〇頁、第一巻第七号、一八九九年八月、六六一—六六七頁

(181) 鳥山喜一(一八八七—一九五九)、一九一一年東京帝国大学東洋史学科卒業、問題の論文は『渤海王国の研究』である。

(182) 『渤海史考』奉公会、一九一五年

(183) 鳥居龍蔵『遼の上京と其遺品』『国華』第二四八、二五三号、一九一一年一月、六月

(184) 鳥居龍蔵『考古学上より見たる遼之文化図譜』四冊、東方文化学院東京研究所、一九三六年

(185) 一九三三・三四年、東亜考古学会調査

(186) 八木英三郎『統満洲旧蹟志』満鉄弘報課、一九二九年

- (187) 関野貞「満洲義県奉国寺大雄宝殿」(『美術研究』第十四号、一九三三年二月初出)、『支那の建築と芸術』(岩波書店、一九三八年九月、二七三頁)
- (188) 吉川幸次郎『東洋学の創始者たち』講談社、一九七六年十月
- (189) 下花園石窟は張家口の万仏洞より三十一四十年ほど早い石窟
- (190) 注(125)前掲書、一四頁
- (191) 注(125)前掲書、一五九—一六〇頁
- (192) 関野貞「満洲の古建築と古墳」(東亜民族協会主催第一回日滿文化講座、一九三四年六月初出)、『支那の建築と芸術』(岩波書店、一九三八年九月、三八三—三八四頁)
- (193) 注(125)前掲書、五一六頁
- (194) 伊藤清造「新満洲国建国史」『満蒙』一九三三年四月より十一回連載
- (195) 村田治郎「満洲建築大観」『満洲建築雑誌』第十三卷第九号、一九三三年九月
- (196) 注(125)前掲書、三六頁
- (197) 梁思永「熱河查不乾廟林西双井赤峰等处所採集之新石器時代石器与陶片」『中国考古学報』第一号、国立中央研究所語言研究所專刊之十三、一九三六年八月、一—六七頁
- (198) スウェン・ヘディン著、斎藤明子訳『ヘディン探検紀行全集』十一(白水社、一九七八年十一月)所収
- (199) 王国魯『最近日本人研究中国學術之一斑』(私家版、一九三六年)によると、原名は滿蒙文化協會、一九二六年に中日文化協會となつた。即ちこれら二つの協會は連続している。日本では「日滿文化協會」と称える。
- (200) 江上波夫『東洋学の系譜』大修館書店、一九九二年十一月、九三頁
- (201) 関野貞・竹島卓一共編『熱河』座右宝刊行会、一九三七年、二二五頁
- (202) 注(197)前掲論文、三頁
- (203) 日本語版、天津大学『承德—清代の文化』中国建筑工業出版社、毎日コミュニケーションズ、一九八二年七月、二〇三頁
- (204) 「関野研究員講演—熱河省建築調査旅行談—」『東方学報』第五号、一九三四年十二月、四三一—四三三頁
- (205) 注(201)前掲書、二二五—二二九頁
- (206) 伊東祐信『熱河古蹟』私家版、一九九四年四月
- (207) 注(201)前掲書、二二八頁
- (208) 関野貞・竹島卓一共編『熱河』(図版)座右宝刊行会、一九三四年。(解説)座右宝刊行会、一九三七年
- (209) 伊東忠太「熱河の遺跡」『建築雑誌』第六二五号、一九三七年四月
- (210) 五十嵐牧太「熱河古蹟と西藏芸術」洪洋社、一九四二年十月
- (211) 田中禎彦「満洲国における歴史的建造物の調査保存事業」『日本建築学会計画系論文集』第五二五号、一九九九年十一月、二七八頁
- (212) 『満洲国古蹟古物節録』文教部礼教司宗教科、一九三六年三月、一—二八頁
- (213) 『選編満洲国名勝天然紀念物彙覧』文教部礼教司宗教科、一九

三六年八月、一一二三頁

(214) 注 (211) 前掲論文、二七七一—二七八頁

(215) 注 (201) 前掲書、二二四頁

(216) 伊東忠太『伊東忠太建築文獻 論叢・随想・漫筆』龍吟社、一九三七年一月、二一七頁

(217) 注 (206) 前掲書、三一六頁

(218) 稲垣栄三「中国・朝鮮における建築遺跡の研究——関野貞と建築史学——」『総合研究資料展示解説 文化史・自然史の研究紹介』東京大学総合研究資料館、一九八三年、四八頁

(219) 関野貞『日本建築に及ぼせる大陸建築の影響』岩波書店、一九三四年、一一頁

(220) 注 (219) 前掲書、二二頁

(221) 『建築雑誌』第二六五号、一九〇九年二月、四—三三頁

(222) 注 (216) 前掲書、四一頁

(223) 注 (219) 前掲書、六八頁

(224) 関野貞著、太田博太郎編『日本の建築と芸術』上、岩波書店、一九九九年十月 六一頁。原著は一九二六—一九二八年に『アルス建築大講座』に発表された論考である。

(225) 五百旗頭真「国際社会の中の近代日本」『現代日本の形成過程』

「映像資料」第一巻、丸善株式会社、一九九四年

(226) 関野貞著、太田博太郎編『日本の建築と芸術』上、岩波書店、一九九九年十月、序

(227) 広瀬繁明「明治期における「文化財」保存行政と関野貞—美術史から建築史、そして考古学への展開—」『日本における美術史学

の成立と展開』研究代表者 米倉迪夫、平成九—一二年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)研究成果報告書、東京国立文化財研究所、二〇〇一年三月、一五九—一七三頁